
孤独な兵器少女と変態で幼女好きな俺

天馬 龍星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な兵器少女と変態で幼女好きな俺

【Nコード】

N2184W

【作者名】

天馬 龍星

【あらすじ】

二〇三六年、世界は多く変わっていた。日本の首都は東京から大阪へ、頭脳は筑波になり、そして東京は日本から隔絶された。堕ち神を閉じ込めるために萌え文化が栄え、統一教会東京大学が創立された。そして東京は七区に分け割れた。

第0話 完全無欠自己中オタク登場（前書き）

はじめまして、天馬龍星です。

何かごちゃごちゃしてきたので、最初から書きなおすことにしました。

より面白く、読みやすいものを書きたいと思っていますので、最後までお付き合いくださると嬉しいです。

第0話 完全無欠自己中オタク登場

「この子の名前は、翼^{つばき}にしようと思います、意味は可能性。この子には自由に生きてほしいんです？ 何にも縛られないで、最後まで自分の意志を貫いて欲しいんです。あなたはそれでいいですか」

「ああ、俺も気に入った。だからあまり無理に力を使うな。俺が必ず運命を変えてやる。この子のためにもな」

「やっぱり、あなたは優しいわ。でもこれは私にしかできないことだから……もう少しだけ、無理をさせてお願い」

「わかったよ、どうせ止めても聞かないんだろ。なら、好きにすればいいさ」

「ありがとう。もし私が死ぬことになっても、私が見たことは誰にも話さないでください」

「わかった、誰にも言わない。大丈夫、俺とお前の子だ！ どんな過酷な未来が待っているようにと決して負けないさ、乗り越えて行ける強さを持っているはずだ」

またこの夢か？ 最近よく見るようになった不思議な夢。

校長の話しがつまらなくて眠ってしまったようだ。

椅子から立ち上がり伸びしてから、出口に向かって歩いていると「昨日の魔法少女シリアみたか？」

「見た見た、今回も萌え萌えな展開で、ドキドキしたぜ」

黒髪のひよろい男が、眼鏡をかけたオタクっぽい男性に声をかける。オタクっぽい男性は満面の笑みを浮かべて楽しそうに答える。

二人とも紺のブレザーを着たここの生徒で、興味深い話し声が聞こえてきたので足を止めて耳を傾けてしまう。

「蒼髪にロングヘアとか、最高に萌えるよな」

「ああ、あの風で髪が靡く所がチャーミングだよな。あのネコみたいに甘い声も萌えちゃうよ」

「なかなか、お前わかつてるじゃないか？ ミニスカ、黒ニーソがまた痺れるんだよね」

「そうそう、あの絶対領域は堪らんな。しかもあの上品そうな白いブーツの破壊力は萌え死ぬほどだ」

「その気持ちわかるぜ。やっぱお前とは話が合いそうだな」

彼らが話しているは今話題の萌えアニメである。

ここ東京では絶大な人気を誇っており、数多くのグッズ発売されている。

また、いたるところでポスターや看板を目にする。シリアグッズ専門店やシリア喫茶まで、できる始末だ。俺の名前は天海翼^{てんかいつばさ}、魔法少女シリアの大ファンにして筋金入りの二次元信者。リアルな女などに興味はない。シリアちゃん一筋で生きてきている。その熱の入れようは世界一だと自負している。萌え都市として栄えている東京すら、俺の居場所は無く異端視されるほどの完全無欠自己中オタクなのだ。

幼女好き変態などと罵倒されるわ。女子には人気がなく軽蔑の視線が向けられ、男子もウザイと言われる始末だ。

二人の会話はヒートアップしていて、思わず声を発してしまった。後ろから二人の間に割り込み感じで思い切り叫んでしまった。

「貧乳って最高だよね、何か禁断の果実みたいで。特に幼女は素晴らしいよ」

「なんだ、コイツは俺達の会話に勝手に入ってきやがって。なんて空気の読めない、自己中な男だ、信じられん」

いらだった顔つきのひよろい男が、腹部めがけて大振りなパンチが飛んでくる。完全に頭にきているようだ。目が血ばしているが、ひるむことなくその拳をかわし、蹴りをくりだす。腹を五センチほどめりこませ、くの字がったになって腹を抱えて、顔を歪めながらその場に倒れ込んだ。

「この傍若無人態度に、よれよれのダイサイ制服。ミスターヘータ
イーーーー」

無言で思い切り殴りつけ、空中を三回転くらし壁にぶつかり倒れたのを確認して、辺りに睨みを効かせ黙らせている途中で視界が暗くなり、力が入らずその場に倒れた。一瞬何が起こったのか、わからなかったが。

「おい、やり過ぎだよボケ。死人がでるだろう、少しは手加減しろよな」

この一言を聞いてすぐに何をされたのか、わかった。

「貴様、また変な薬をうちやがったな。このマッドサイエンティストめ」

「人聞きの悪いこと言うな、ただの興奮を抑える薬で人体に害はないはずだ」

（絶対ウソだ、コイツがそんな普通そうな薬を作るわけがない。俺は騙されぞ）

マッドサイエンティストの登場で周囲のざわめきが大きくなる、みんな彼を恐れているのだ。萌えで栄えている場所に住みながらの萌え嫌いと言うか、オタク嫌いのイカレタ男を——沈黙の空気を打ち破るように誰かが叫び出した。

「白衣を靡かせているあのイケメンは、火竜焰かいつほう。この錬金術の時代でもなお科学を貫き通す姿勢を変えない、もう一人の異端児」

二〇一二年、科学万能の時代は終わりを告げる。相次ぐ環境問題さらされ、その被害は甚大で、日本の国民、いや、全世界において疲弊じんたいしきつていた。

しかし科学者達は解決策も講じることができなかったのに対し、教会の対応は迅速かつ完璧なものだった。国民の支持された教会は実権を、信仰学の義務化と環境に悪影響を及ぼす科学技術の廃止を推し進め、法律として認められ、全日本国民適応されて、全国の学校では信仰学の義務教育が行なわれるようになった。

科学が異端の学問になり、いつしか、マッドサイエンティストと呼ばれるようになった。科学者たちは、信仰学者と名前を変えることを余儀なくされた。

信仰学とはアルネシア神を信仰し、神の力の使い方を学ぶものである。

日本国民よって、信仰学は細分化され、次々新しい分野が開拓され、日常生活に溶け込んでいた。そして東京に浸透した信仰学は、萌えという感情を信仰する学問と好奇心を信仰する学問に別れた。

「よくもやりやがったな。貴様こそ俺を殺し気か、変な薬をうちやがって」

薬の効果も切れ、立ち上がると同時に啖呵たんかをきる。

「なんだやる気か。いいぜ、お前との因縁にもそろそろ終わらせたいと思ってたんだよ」

「や、ヤバイぞ！ 奴等またここで死闘を繰り広げるつもりだ。逃げるぞ、巻き込まれたらそれこそ死ぬよ。俺は逃げるからな、お前らも早く逃げたほうがいいぞ」

そう叫びながら、腹を抱えてひよる男は体育館から姿を消した。もう一人男は倒れたまま動こうとしない。そして焔に殴りかかるうとしたら、担任の樋口ひぐちが割って入ってきた。誰かが先生を呼びに行つたのだろう、全く余計なことをしやがって。

「また、お前たちか。毎日毎日問題を起しおって、馬鹿者どもが。冬休み返上で学校に來い。その腐った性根を叩き直してやる」

「待ってください、先生。俺達はケンカなんかしていません。終業式も終わったし教室にカバン取りに行こうぜ、と声をかけただけです、なあ、つばさ」

「親友とケンカするわけじゃないですか。ボク達はカバンを取りに教室に戻るので失礼します」

「おい、待って話しはまだ終わってないぞ」

樋口が何かを叫んでいるようだが、気にしない。体育館にたくさんの生徒が残っており、みんな楽しそうに友達と話している。所々で小競り合いを起こしているの、その対応に追われているため簡単に体育館を抜け出すことができた。

（どうやら、俺はコミュニケーション能力がゼロらしい。よく話し

かけても無視されるし、さっきみたいにうまく会話の中に入ることができない。だから話し相手はいつも焔だけになってしまう。本当はみんなと仲良く話さないのに)

第0話 完全無欠自己中オタク登場（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございます。
どうですか？

ちゃんと改善されていますか？

面白くなっていますか？

読みやすかったですか？

誤字脱字は気になりましたか？

全体的におかしな場所はありませんでした。

もし何か感じるモノがあつたら感想を書いてくれると嬉しいです。

一言でもかまいませんから——何かありましたら——気が
ねなく書いてくださいね。

ではこれで失礼します。

最後までお付き合いくださりありがとうございます。

第0・5話 堕ち神

教室前の廊下一面に貼られた萌えポスターを見て俺は、東京が萌えに侵食されていることを実感した。

二〇二八年（当時五歳）、奴等は何の前触れも無く現れ、分身とも言える神を結晶化させ喰らっていった。神を喰われた者は、心を無くし奴等に隷属した。

父も俺も神を信じてなかったから、結晶化されることなく助かった。

神を信じてない人が集まり、レッドサイエンティスト教会に反旗を起こした。

理由は至ってシンプルである、教会の生み出した神が災いの種だからである。

暴動が起きるなか父は教会から仕事を受け、奴等の正体を暴くために戦って死んだ。

父の死をいたんだ、多くの科学者が無念を晴らすために立ちあがってくれた。

そして個体数をだいぶ減らした奴等は人間に擬態し、人間社会にまぎれこんでいった。

しかし父は無駄死にしたわけじゃなかった、優秀な科学者達のおかげで、彼らが百分と萌えエネルギーで出来ていることと、萌えエネルギーに引き寄せられていることがわかった。教会は堕ち萌え神という命名し、一箇所に集めるために東京全土を萌え都市に作り変え、萌え神だけを信仰することを約束した。

さらに万全を期すため東京を出る者を無差別に殺す機械を設置して完全に隔離した。

「つばさ、そんな所に突っ立ってないで！ 早く来い」

廊下にまで響く焰の声が聞こえて、急ぎ足で教室の中に入ると、窓際の方で制服の上に白衣を纏って気取った男が目に入った。他に生徒はいないようだ。自分の机に向かってカバンを取ろうとしたら、

唐突に話し掛けてきたので振り向いた。

「ちよつと相談したいことがある。人前じゃ言えない話なんだけど聞いてくれるか？」

「お前が俺に相談するなんて珍しいな、いつも偉そうなのに。で、どんな相談なんだ」

「教会の奴らに、堕ち神対策技術者としての誘いを受けた。近々堕ち神を根絶やし作戦が行なわれるため優秀な技術者を探しているらしい」

「確かにそれは人前で言える話じゃないな？ そんな重要なことを何故、俺に話した。しかも教会って？ 統一宗教ことか」

「ああ、そうだ。そこで巫女をやっているイヴという少女について知りたい。

あとこれはチャンスだ、奴等を根絶やしにできる上に、心を無くした人達を救う方法がわかるかもしれない。なんせ教会の技術力は世界一だからな」

この世界には人の数だけ神が存在している。九十年前の宗教統一戦争で、パンドラという女性が神を顕現させ、戦争を終わらせたと授業で習った。

今もイヴという巫女が新しい生命が誕生たびに神を顕現させている。

俺達には、神を顕現されていない、信仰心がないからだ。信じる気持ちが無ければ神は顕現されないみたいだ。それが異端視されるもう一つの理由だ。

また、願いを叶える時のみ姿を現し、普段は身体の奥深くで眠っているらしい。

人が死ぬと神も一緒に消滅するが一般的だが、神を喰らう神、堕ちた神というものの存在する。イヴが堕ち神を創りだしているという噂もあったが、教会は全面的に否定している。

なぜ、萌えという感情が堕ち神になりやすいのか、それは謎の多い感情だからだと教会の科学者は説明していて、イヴが関与している

ことは認めていない。

焰の両親は神に心を喰われ、奴等のしもべになった。

もし助ける方法があるなら、俺も協力したい。堕ち神だけでなく、神の存在自体を恨みながら生きてきた、それこそ、全ての神を殺したいぐらいに怨んでいる。だから焰の気持ちにはわかるつもりだ。だが、教会の手は借りたくない。しかし、その技術には興味がある。

「それを知ってどうするつもりだ。まさか教会に手を貸すつもりか？」

「はあ、なわけねえだろう。俺が宗教に力を貸すことなどありえない。潜入だよ、潜入。敵のアジトに潜り込み中から破壊工作をする。少し考えればわかるだろう」

子供を諭すように喋り出す、そのふてぶてしい態度がむかつきつつ、納得の笑みを浮かべて、頭を掻きながら情報を整理し、必要最低限のことだけを述べるように努める。

「わかった」

「わかったならとつと教えろ」

焰はとても険しい顔をで注射器を向けつつ、全身から教えなかったら殺す的なアレを出して脅おどしてくる。とても人にものを頼む態度じゃない、生唾を飲み込みながら、はきはきと喋りだす。

「知っていることを話そう、イヴの伝説は知っているよな。そのイヴの遺伝子元に創られたパンドラだ。パンドラ遺体の側で見つかったのがイヴだ。なぜイヴと呼ばれているかというのを神を顕現させ、全て神を従えることができるからだ」

「一体どういことだ、なぜ従える力も持っている。パンドラ以上のことができるというのか？ ちゃんと質問に答えろ」

注射器をしまい、襟元を掴んで詰め寄ってくる。慌てて答えるが今度は嫌味な感じで叫ぶ。コイツの態度にむかいついてきたからだ。

「統一戦争後、パンドラは始まりの書を所持したまま姿をくらました。そしてイヴという少女が保護され、パンドラの遺体が見つかったのが十三年前。堕ち神が現れた時期と重なる。詳しいことは教会

の人間に訊かないとわからないけど。イヴは魔法術師で、パンドラが、自分の遺伝子を改良して生み出した者だから、全て神を支配することができた」

「その話が本当なら、イヴが堕ち神を創ったということになる。なぜ、そんなことをした。まさか教会を潰すためか？」

「ああ、そうだろう。魔法術師とは、本来秩序を破壊する存在だからな」

「魔法術師ね。まだ、そんなことを考えていたのか？ まあお前らしいか、でも俺は魔法術みたいなオカルト系は信じない。堕ち神の原因は科学的に調べるさ。」

でも、気になるなパンドラが教会を抜け出して遺体が見つかるまでの七十八年間の空白があるのか。

教会の教えを素直に信じるのは危険だ。パンドラという女の素性がわかっていない」

どこか納得したような顔をして、襟元から手を離し、びしっとかっこつけて叫んできたのを聞いて、同類だと思った。

第1話 焰との賭け、萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルの調査。

「お前こそ、いつまで科学にこだわるきだよ。今は神を信仰する時代だぜ。お前も変わらないじゃないか、俺は科学よりも魔法術を信じているだよ」

「そうかもしれないな。俺は科学一筋でお前は魔法術の道を究めればいい。もう同じ道は歩けないのだから――」

「俺とお前じゃ、目指すものが全然違うからな。道を違え、今は敵同士だが、いつか分かり合える、友達になれると思っ^たている」

「そんなことはありえない、もっと現実を見ろよ。昔とは違うんだよ。萌えオタは大嫌いだ、俺は俺のことしか信じない。もう裏切られるはたくさんんだ」

「まさか、黙って引越しちゃったことを怒っているのか、なら誤解だ。お前を裏切ったわけじゃない。仕方ないことだったんだ、信じてくれ」

「信じる、何を信じるというのだ。何も知らないくせに調子のいいことばかり、お前を見えていると虫唾が走る。俺がどれだけ苦労して特待生なったかも知らないのに、偉そうにほざいてんじゃねえ」

「まあ俺達は、学校だけの関係で、立ち入った話しはしたことがないからな」

「学校以外の時間は全部研究に費やしている、馴れ合いは嫌いなんだ。それにオタ活動な^つてキモイことはやらない、萌えオタなんてみんな死んでしまえばいいだ」

「だから教会の誘いを受けるつもりなのか？ 萌えオタを全滅させるために」

「ああ、そうだよ。俺は萌えオタが大嫌いなんだよ、見てるだけで吐き気がしてくる」

「お前のオタ嫌いは異常だ！ 俺が居ないあいだ何がお前を変えたんだ、焰」

「てめえ、なぜオタをやっている。オタクがそんなに偉いか？ 俺に指図できるほど」

「俺はただお前が心配なだけなんだ。幼い頃に命を救われたからな」
「俺の心配をする前に、自分の心配をしろよ。教会の大学に進学するんだて、でもてめえの学力じゃ、逆立ちしても無理だぜ。学年最下位のクズが」

「やってみなきゃわからないじゃないか？ 俺の夢はやっぱりあの少女と再会すること。それを叶えるためには、大学での勉強は必須なんだよ、わかるか」

「すまん、全然理解できない。なんで名前も知らない少女のためにそこまでできる。」

しかも、てめを裏切って捨てた女なんだろう。なぜ捜すんだ、復讐するためか」

「お前には一生わからないさ、彼女の気持ちなど。紙は助けてではなく、さようならと書かれていた。つまり自分から姿を消したんだ、俺を巻き込まないために、そう彼女は優しい子なんだよ。そんな彼女の側にいたいから俺は捜すんだよ」

「まさか……本気で言っているのか？ 恋をしたというのか？ 名も知らない少女に。理解不能な感情だ」

「だから言っただろう、お前には一生理解できないことだと。このマッドサイエンティストが」

「俺はいいだよ。マッドサイエンティストと呼ばれても、何かカッコいいじゃん。でもお前は違うだろう。夢ばかり見て現実と夢の区別もつかなくなった。救いようのないバカだろう」

「ちゃんと、現実と夢の区別くらいつけられる」

「てめえが出会ったという魔法術師も、どうせ妄想の産物だろう。現実を見ていない証拠だよ」

「あの子は確かに居たんだ、俺はすっかり覚えている。アレは、夢でも幻でも妄想でも無い。現実のできごとなんだ」

「だったそれを証明して見せろ、口だけなら何とでも言える。俺の

前にその魔法術師を連れて来い。まあ、所詮無理な話だ、諦めて自分の愚かさを認める。ふっははは」

「笑うんじゃない。あの子と再会するため俺は大学に行く決めたんだ」

コイツは科学しか信じない、イヤ信じられないだ。信仰心によって生み出された神は、人の心を喰らい願いを叶える異質な存在。願いを叶えることに人形になっていき、最後にはイヴに隷属する。そして焰の両親は願ってしまった。死んだ我が子を生き返らせて欲しいと、その代償に心を失った。焰は未熟児だったらしく、生まれて十日ほどで死んでしまった。だからどんな代償を払っても生き返らせたいという思いがあつたのかもしれない。

神の力は平等ではない、高位の神がいれば、低位の神もいる。

高位の神を宿した人間だったならば結果が変わっていたのかもしれない。

そんな理不尽な理由で納得ができるわけがなく、俺達は教会を憎むようになったのかもしれない。

今は寮で生活をしているが、もうすぐ出ていかなければならない。

だからコイツは神を信じない、けれど学年一位を常にキープしているから凄い。

トラウマの一つや二つ、誰もが持っているものだ。

いくら技術が発達して生活が楽になろうと宗教は無くならないのだから――

「そこまで言い張るなら俺と賭けをしないか？俺が勝ったら、助手になってもらう。てめえは馬鹿だが、手先は器用だし機械に強いからそこそ役立」

「ああ、いいだろう。俺が勝ったら魔法術の研究協力と大学への手まわしを頼みたい」

「ふっ！いいぜ。勝負内容はアキバで行なわれているという萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルの調査だ。期限は新学期までだ」

「それって今ネットで話題の魔法バトルネタか？ アキバでアニメのコスプレした、美少女達が世界の命運をかけて戦っているというアレか？ 確か魔法少女シリアちゃんのコスプレをした参加者もいるという。超々俺好みのネタじゃないか？ その真偽を確かめてくれればいいんだな」

「ああ、調査方法はお前に任せる。だが忘れるな、俺に下手な小細工は通用しないぞ。ふっははは」

コイツは何も変わっていない、兎相で会った時のままだ。本当にコイツは不器用なんだよな。

俺が困っている時は助けてくれたし、今だって将来のことを真剣に考えてくれている。

たぶん…… 萌え萌え美少女だらけのコスプレバトル調査というもの、俺を諦めさせるためのものなんだろう？ 情報元不明の怪しいものだ。調査には一週間も掛からないだろう。それ目で真相を確かめ、魔法術などはないということを証明したいのだろう。ほんと愚直な奴だ。

第2話 幼い頃の少女との出会いは初恋の味

なぜ俺がそこまで魔法術を妄信しているかという？ それを語るには、幼い頃の不思議な体験を話さなければならぬ。

あれは伯父さんに引き取られることになり、焰と別れて三年が過ぎた冬。ぜんそくを患っていた俺は学校にも行かず、家で過ごすことが多かった。それを見兼ねた伯父さんは俺にこう言った。

「そんな軟弱な身体をしているから病気に負けるんだ。よし、わしが稽古をつけてやる」

無茶苦茶である、そんな家に居たら死ぬと思い逃げだしてきた。行く場所もなく、帰ることもできなくて、近くにあった公園のブランコに座り無駄に時間を過ごしていると、どこからともなく綺麗な歌声が聞こえてきた。とても澄んだ歌声で思わず聞きいつてしまふ。心震える歌声に興味を持ち、声の主を捜してみることにした。そして伝説のイヴと見間違ふほど瓜二つな少女と出会ったのだ。たぶん初恋だったのかもしれない。言語眼げんごがんを用いてイヴの伝説を調べることにした。

言語眼とは音声^{もろこ}が文字^{もろこ}なって見えるうえに、どんな言語も読めるし、語源も理解することができる。

つまり、知らない、文字、単語、文法がないということだ。

一度読んだ書籍を記録・検索・再生することができる。

書物を読むことにだけ長けた力であり、他に何の使い道もない力である。

欠点は全て日本語になつてしまうことと、数式など文法で表すのが難しいものは解析できないということ。つまり、式を解く能力は持っていない。

父から受け継いだこの能力を使えるのは俺と義妹の虹彩アイリスだけだ。

利点は、力の発動が簡単でリスクがないこと。発動時に目が光ることも紋章が浮かべあがることもない。黒い目のまま発動できるた

め、他人に勘づかれることはない。

そして驚愕の事実を知った、この世界とは別にもう一つ世界があること。次元の壁というものを超えた先に、魔法少女達が暮らす夢の世界がある。その世界ことをアルネシアと呼んでいる。

『貴方様を幾年も捜していました。桜さまから預かったこれを渡すために』

言語眼によって写しだされた文字を読めるだけで、会話をすることはできない。見るだけの能力だからな。

一冊の本を差し出してくる。表紙に何も書かれていない白い本だ。桜というの母の名前だったはずだ。この少女は母の知り合いなのか？ 母のことはよく知らない、顔だて写真でしか見たことないし、父も死んだ母のことを全然話してくれなかった。いつも他人を信じるな、教会の神を信じるな、教会は敵だ。自分以外は敵だと思えと言っていたのに、教会の仕事を受けて死んだ。

『これは始まりの書。言語眼を持つあなたなら読み解く事ができるはずです』

押しつけてくる本を軽い気持ちで受け取り、本を開くと文字が光出し直接頭の中に入ってくる。頭が痛い、割れそうだと思い閉じると頭痛も治まった。

『どうやらまだ早過ぎたようですね。もう少し時が経てばきっと読み解けるようになるはずです。だって貴方様は言語眼の持ち主なのですから』

真っ直ぐな赤な瞳が心をざわつかせる。内に秘めた何かが彼女と共鳴しているようで身体が熱い、だが嫌な熱さじゃない。

少女の身体的特徴を簡潔に述べると、澄みきった日の白い雲なみたい髪で、ふわふわと柔らかかそうに靡いていた。一点の曇りも無い白磁の肌が人形だしさを強めていた。その肌よりさらに白いワンピースに白いスニーカ、そして黒い日傘を差していた。ワンピースはとても質素なもので彼女には不釣り合いだと思った。雪の精霊を思わせるくらいの神々しさがあつたから――

例え、会話できなくても、仲良くなるのには、さほど時間はかからなかった。

言葉を交わさないでもわかりあえてる気がした。

なぜ、そんな気がしたのか？ 傍で笑っていてくれたから、ずっと一緒に居てくれたから、いつもいつも、公園にいた。約束もしていないに毎日毎日俺が来るのを待っていてくれた、それがとても嬉しかった。彼女は俺の深いところまで入り込んで来ていた。学校にも家にも居場所のない俺は、彼女と居るときだけが、安らげた。彼女も同じ気持ちだと思っていた。でも、そんなのは俺の勘違いだった。

事件が起こったのは、彼女と出会って二週間の後のもとても寒い日だった。運悪く伯父さんに捕まってしまい、しごかれてしまった。

伯父さんのモーションアイは、反則的な強さがあり、まず勝ち目はない。だって動きがすべて見切られるんだよ、これだから武闘派は嫌いなんだ。まだ身体中が痛むし、今日は寒いな！ 吐く息が白くなり、雪もばらついている。手袋にマフラー、使い捨てカイロと防寒装備でいつも公園に向かった。彼女に会うためだ、公園に到着した時にはうすらと雪が積っていた。雪の中で見る彼女はとても幻想的で、輝いていた。この世界に舞い降りた天使のようで、息をするのも忘れて見てしまうほど彼女は美しかった。

俺が来たことに気付き、ゆくりと歩いてくる。左胸辺りに手をあて、呪文のようなものを唱えると少女はうつむきながら

『貴方様の父親である一心様に堕ち神の調査をお願いしたのは私なの』

「キミは教会の人間なのか？」

しかし彼女は何も答えないまま、俺の前から姿を消した。言葉が通じていたのかも定かではない。ただ彼女はもうここに来ない気がした。

次の日。公園に来て見たが、やはり彼女の姿は無く、一枚の紙切れだけが残されていた。

スベリ台に貼られた紙には、汚い字で「さようなら」と書いてあった。

名前も知らない少女を捜す手段も無く、ただ呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

彼女は一体何者だったのか？ 本当に教会の関係者なのだろうか、わからない多過ぎた。

ただ一つだけ分かっていることわ。

彼女は魔法術師だったということだ。

彼女はぜんそくを治してくれた、彼女と別れてから一度も発作が起きていない。

しかし異性と付き合えない身体になってしまったのも事実である。だからこの呪いを解くために魔法術のことを調べ始めた。

そして、まだ始まりの書を読むことはできない。もし読む解くことができたならこの呪いを解く方法がわかったかもしれない。それに始まりの書は、イヴに所縁ゆかりのあるものだから、彼女に会う方法もわかったかもしれない。

だから俺は魔法術の勉強を始めたのだ。彼女の言葉を信じて、早く始まりの書が読めるようになるために。

第3話 兵器少女との出会い

二〇三六年、世界は多く変わっていた。日本の首都は東京から大阪へ、頭脳は筑波になり、そして東京は日本から隔絶された。堕ち神を閉じ込めるために萌え文化が栄え、統一教会東京大学が創立された。そして東京は七区に分け割れた。

十二月二十四日、恋人もない俺は、萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルの調査のために、今秋葉原にきています。

でも折角来たので、友達を誘ってエロゲー買ってから調査をすることになりました。

「じゃあな、つばさ」

「おお！ またな」

かみなか しりやま

神中と白山と別れた俺の両手には、エロゲーショップで買った、大量のエロゲーが入った紙袋がある。もちろん本日発売したものだ。二人とも、とあるオフ会で知り合った二次元信者で、とても気の合う友達です。

シャボン玉みたいな薄い膜に守られた少女が突然姿を現した。

その現実離れた光景を見て、俺は確信した。アキバで何かが起こっているのは間違いない。興奮気味に身体を震わせ、思わずエロゲーの入った袋を落してしまう。気にせず数メートルに倒れている少女を凝視する。

「魔法少女シリアちゃんに似ているな。まるでアニメの世界から出てきたようだ」

自分を落ちつけるように、小さく小さく呟いた。

（しかしなぜ、全裸なんだ。噂ではコスプレした少女達が戦っているはずだ。どういった経緯で空から萌えキャラが降ってくるという状況になったのかはわからない）

あちこち怪我をしている、そうとう激しいバトルだったのだろう。コイツを襲った犯人がまだ近くににいるかもしれないと思い経ち、辺りを見渡すが、人影はなく物音すらない。薄気味悪い静けさに恐怖を感じずにはいられなかった。

気が付いた時には、人気のない公園に迷い込でいった。

確か白いワンピースに、黒い日傘を持った、小学生くらいの子を追いつけていたはずだ。どこか雰囲気がい出の少女に似ていたから、思わず後を付けてしまったが、結局見失ってしまった、尾行に気付かれたのかもしれない。変質者だと思われたのだろう。探偵や刑事に向いていたいな。

——よく考えたら、可笑しな話だ。あれからもう十年近くも経っているのに、姿が変わってなかった。まるで歳をとってないように見えた、そんなことありえないのに。

彼女を見失った場所に白い羽が何枚か落ちていた、これは天使の羽などではないのか？ そんなメルヘンチック考えながら歩いていたら、声が聞こえた。若い女性の澄んだ声だ。

辺りを見渡すが人影は無い、後ろの方から聞こえたように気がするに——誰も居ない。

『貴方の助けを必要としている者がいます。資格を持つ者よ、始まりの書を開き呪文を唱えなさい』

エロゲーの入った袋を一旦地面に置き、リュックから始まりの書を取り出し読み始める。

『永久とこしえに眠りし英知の結晶。私の呼びかけに答え、その姿を現せ』その呪文に反応するように黄金色に輝き出す始まりの書。

どからともなく無色透明な膜に包まれた少女が現れ、始まりの書をリュックに戻し、エロゲーを拾い追い掛けたら、人気のない公園に迷い込んだというわけだ。

見れば見るほどシリアちゃんに似ているな、一分の一等身大フィギアみたいでお持ち帰りしたい気分になるぜ。

数メートル先に倒れている、シリアちゃんに瓜二つな女性は一休

何者のか、非常に気になる。溢れだす好奇心を抑えることができず、何だか少しワクワクしてきた。

非現実的に足を踏み入れたと思う——ライトノベルの主人公の気持ちに少しわかった気がした。

それと同時に危険な匂いがプンプンする、上手い話には毒ある。

これは罠ではないのかという気持ちが芽生えはじめていた。

裏があるはずだ、どう考えても可笑しいだろう。

関わったら大変なことになるぞ。

それでもいいのか俺、自問自答を繰り返す。

（ここで逃げたらヘタレだ。美少女を目の前して逃げるなど愚か者がすることだ）

何より胸が高鳴りを押さえることができなかった。

高校生活は、思っていたよりも普通に平凡で退屈なものだった。

家に帰ってマンガ・ラノベを読み、ゲームをやり、また学校に行

く、その繰り返しだ。

高校生になって変わったことは何一つ変わっていなかった。

バイトを始めたわけでもないし、彼女ができたわけでもない。

もうすぐ卒業するというのに中学生の頃と何にも変わってない。

成長していないだ。

それはなぜか。

勇気がなかったからだ。

—— 一歩踏み出す勇気が

だから、このフラグを逃すわけにはいかないという気持ちで一杯になった。

しかし、現状何をすればいいのかわからない。

とりあえず、救急車を呼ぶべきだろうか？

それとも人工呼吸……それ以前にまずは、呼吸をしているのかを確認するべきなのか？

こういう時にどうすればいいのか？ いまいちわからない。

とりあえず少女に近寄り、片膝をつき、呼吸を確認する。

どうやら息はしてるし、目立って大きな怪我は無い。

（わかっていたことだが、近間で見るとやはり萌えキャラだ。空を切り取ったような青い髪に、閉じた目を覆う長い睫毛。顔のパーツはどれを取っても俺の理想とするもので、完璧といってもいい。まるで俺の頭の中を覗いて、それを具現化したそんな少女だ）

まあ、そんなことはありえないだけね、頭の中を覗くとか。

しかしこのまま放置するわけにはいかないので、呼びかけてみることにした。

「おお、大丈夫ですか？ 生きてますか？ 何があったんですか」
反応はなかった。困ったな、どうするかなど、思索している時

「ここはどこ？ あなたは誰」

少女の声が聞こえ、思わず振り向いてしまった。

ビシューーーー

不覚にも、勢いよく鼻血が出てしまい、彼女にもかかってしまった、少し申し訳ない気持ちになる。

いかんいかん、まさか三次元相手にこんな約束な展開があるとは、油断した。

相手も凄く驚いている、しかし悲鳴をあげる様子はない。固まっているのか？

（いきなり知らない人が目の前にいって、鼻血をかけられ、普通驚くよな）

俺の心臓もバクバクで、あたふたとしてる。もう拳動不審で完全な変質者だ。

このままではまずいと思い経ちとりあえず血を拭こうとした。

彼女の白く滑らかな体を血で汚してしまったから、そう決断し、彼女の身体を直視する。艶めかしい、それでいて素朴な感じもあり、実体がまるで掴めないミステリアスな女性で直視したまま動けなくなる。

身体にこびりついた血を、指で拭って軽く舐めった、その妖艶で萌えるしぐさにドキとした。そして妖艶な笑みを浮かべて少女は

「この血は、お前のか？ 感謝する」

（傷が治った！ 一体何者なんだ、この少女は）

腰まで伸ばした、艶やかな光を醸し出すスカイブルーの髪で胸を隠していると言っても、貧乳だけだね。とても残念な胸で、くせ毛のない整った清純派に髪に、日焼けのない滑らかなので、生クリームのように白く柔らかそうな肌、全身から醸し出される甘い香りに魅了され、心奪われる。

大きく丸みを帯びたエメラルド・グリーンの瞳はネコみたいで可愛く、断然ネコ派の俺には好印象で、鼻と口は小さく、まさに萌えキャラと言った顔立ちだ。

十人中十人が萌えキャラと答えるだろう。

背は低く、百五十前後といった感じで、幼さない少女といったイメージの人形のように可愛い女の子である。

間違いなく日本人ではない、だが外人のそれとはまた違う、言葉ではうまく言い表せないが、彼女からは何か異質なモノを感じる。本能的に関わるな、危険だと訴えている、警告して来るが、動けなかった。

彼女の目には力があり、その妖艶な体に魅了され、動くことができなくなほど美しい身体は、まさに二次元美少女以上の輝きがあった。

まあ萌えキャラだけだね。

両手で胸を触り目線を下げ、彼女は自分の体を見ると少し肌が赤くさくらもちみたいになる。小さくて可愛い胸を直視する、視線を外すことができない。

（三次元はクソゲーで、三次元女に興味のないこの俺が、目を離せなかった）

「きゃあああああ」

今度は叫び声をあげた、だが心地よい叫び声だった。

どうやら自分が何も着ていないことに気が付いたらしい。

耳まで真っ赤に染め、恥ずかしくなったのか。踵を返し、逃げる

ように走り出した。

その背中に向けて、できるだけ紳士的に優しく叫ぶ

「ナイス——— 恥じらい」

親指を立て締まりのない顔になりながら心の中で呟く。

（決してロリコンではない。思わず叫んでだけで、これはたぶんお約束なんだろう）

振り返って涙目で「ま……マント……生成」と叫び胸の前で祈るように手を合わせ、手全体が光り出してから少し開き、野球ボールぐらいの粒子の集まりが弾け、体に纏わりつきマントとニーソックスを形成した。

変身した。

それはまさに魔法少女の変身シーン。

このクソゲーな世界で、夢にまで見たもの。

魔法少女の変身シーンが見れるとは、それだけ生きてて良かったと思える。

もう思い残すことはない。

イヤ違うだろう俺、ここで終わっていいのか？

いいわけがない、確かに得体の知れない、危険な少女なのかもしれない。

でも、俺は「魔法少女が大好きなんだ」と腹の底から歓喜の声を上げ、ガッツポーズをとってしまった。

（だってリアルで魔法少女を見てしまったら叫ばずにはいられないでしょう。これもお約束だよ。このチャンスを逃すわけにはいかない。夢にまで見た非日常ライフが待っているんだから）

「私とした事が裸身を見られたぐらい動揺してしまったが……」
逃げるのを止め、振り返り叫んだ。

しかし、その顔はまだ赤く、声も少し震えているように感じた。
それがとても可愛く抱きしめたくなつたがこらえて、俺は少女と目線を合わせるために屈んだ姿勢をとる。

「リアル魔法少女とか……マジ、俺の予想を超えてるぜ！ ついに

俺様の時代がきた——」

「いいか、繰り返し言うが、血の提供痛み入る」

あまりない胸を張り、右手を腰にをあて、左手を突き出し、勢いよく叫ぶが届かない。俺はしゃがんだまま一方的にわめき続ける。もはや会話など存在しない。

「オタクが夢を見る時代は終わらない、エロは世界を救う！ 魔法少女最高」

「人の話を聞けっ」

腕を左右に振りオーバアクションで叫ぶも、聞く耳を持たない。自分の言いたいことだけをひたすら語る、相手の話はまったく聞かないで押しつけがましく、まさに自己中と言った感じだった。

魔法少女に会えたことがあまりにもうれしくて熱くなり過ぎていた。

「よし大丈夫だ、全て任せろ——で、その下はまだ何も着けてないのか？」

（言った後に激しく後悔した。でも、だって気になるじゃないか）

ゆでダコのように頬を赤く染め、目を見開きビクリした表情が、また萌える。

もうホント可愛いな、お持ち帰りしたいくいだよ、マジで。

貧乳好きの俺としてはたまらないな、ほっそりとしたスレンダーな身体わ。

「ええい、もういい。ココはどこだ」

そのしぐさ、表情、全てが可愛くて、俺は思わず脱ぎ出していた。これが妖しの術か？ 何て恐ろしい術だ。

魔法少女を目の前にして興奮を抑えることができなかったのかもしれない。

「この変態！ 人の話を聞け。コミニケーション能力ゼロか、それとも上手く言語が翻訳されていないのか」

目線を下ろして不敵な笑みを作り、蔑むように、憐れむように見つめてくる。とりあえず服を着るか、寒いからな。自制心は大切だ

よな、やり過ぎるとひかれるからな。少し自重してちゃんと相手の話を聞くか、それがいいな。これ以上怒らすのは得策じゃない。

「うん、大丈夫。ちゃんと聞こえてるよ、でキミは何者？」

「よくぞ、聞いてくれた、わたしは兵器だ」

「……………」

「——兵器」

「うむ、そうだ」

どこをどう見ても、萌えキャラである。しかも俺好みの萌えキャラだ。

「こ……っくらっ！ だからジロジロ見るのをやめろ」

耳まで赤く染めて、何とも頼りない紺色マントをしっかりと掴み胸を隠し、足を固く閉じているが——黒いニーソックスが眩しい。今の姿からは異質な物は感じない。気の所為だっただろうか？ まあ、可愛いからどうでもいいや。

「最初は堂々と見せていたじゃないか」

「それは確かにそうだが、なんか貴様に見られるのはイヤなんだよ。何かを思い出したようにいきなり辺りを見回す。

「教会からの追っ手が！ 近くにいますはずだ」

手にマントが引っかかり下半身が露になるが、本人は気がついていないみたいだ。

危機迫る感じで公園を見回しているが、人の気配は全く感じない。これだけ叫んでいるのに誰も来ない可笑しいのかもしれないが——

——美少女が突然現れる何ていう、『王道展開』にあっただせいで、驚く気にはなれない

しかしというか、やはりというか、下は何も入っていないんだ。つまりノーパンだったなどという、いやらしいことを考える余裕はあった。

「どうやら近くに敵はいないみたいだな。貴様に一つ教えておきたいことがある。この身体のことだ」

「改まってどうした」

「大人しく聴け」
「ああ」

第4話 自立型人形（アルネシアドール）

——それは戦国時代。

あまたの宗教が入り混じる日本で、唯一絶対神を追い求めた男がいた。その男の名を花守天心といって、天下統一のためには唯一絶対神が必要だと考え、神を顕現する方法を摸索している途中で異界の存在を知ってしまった憐れな男じゃあ。

異世界アルネシアに魅了された憐れな男は、一族の力を借り、始まりの少女イヴが眠るといふ遺跡で始まり書を見つける、それが非劇の始まりであった。

始まりの書を手にした男は、異世界の門を開いて異世界人を招き入れてしまった。

何かに取りつかれたように人格が豹変してアルネシア人ともに忽然^{いつぜん}と姿を消した。

それから神隠しが起こるようになり、多くの若い女性が行方不明になった。

行方不明になったの女性は、アルネシア神復活の供物として捧げられるために、選り抜かれた者達じゃあ。心に深い闇を抱え、神に助けを乞った者達の中に私も居た。

神の石と呼ばれる、アルネシア神の力を宿す宝石を身体に埋め込まれ、神の器としての教育名の調教を施された。

神の石は、寄生する個体によって形を変え、宿す力も違う。中には心を喰われ人形になったものいた。

そして百体以上の自立型人形^{アルネシアドール}生み出され、天心の追い求めた唯一絶対神の器になれるのはただ一人だけ、それ以外は廃棄処分が決まっていた。

生き残るために多くの仲間を手にかけてしまった。

残り半分になった時に反乱が起こった、その混乱に生じて施設から逃げることに成功した私はあてもなくさまよっていた。

しかし生まれた時代が良かった私の力を必要とするものはたくさんあった。兵器としての力、他者を殺す力、それを存分に使い殺し続けた。戦^{いく}が終わった頃には独りになっていた。恐れられ忌み嫌われていた私を救ってくれたのが、マスターじゃ。

マスターが私に居場所をくれたから、今の私があるのだ。マスターには感謝している

そこで話しが終わったのを確認して話し出す。

「なるほど難しいことはわからないけど、魔法少女ということではないだね」

「一体何を聞いていたんだ、貴様は——私は兵器だ。断じて魔法少女ではない。わかったか、変態野郎」

誇らしげに顔を近づくる。よほど兵器であることが嬉しいのだろう。俺には理解できない感情だ。魔法少女のほう^{ふひん}が断然素晴らしいのに、そのことに気付いていない彼女が不憫に思えた。

「まあ、行き成りこんな話を聞かされたら驚くのも無理はない。どうだ、私の凄さがわかったか」

どや顔で言ってくる少女の顔を見ながらとりあえず頷き、さつきから気になっていたことを尋ねてみる。

「話にでてきた、始まりの書ってこれのことか」

「おっ！ それだ、間違いない。なぜ、貴様がそれを持っている」

「やっぱり、この本のことか？ この本の持ち主を捜しているだよ。何か知っているか」

「すまん、長き眠りにしていたのでわからない。でもマスターなら知っているかもしれないけど……今どこにいるのか、わからないはぐれてしまったのだ」

「一体何があっただんだ。なぜシャボン玉みたいな薄い膜に包まれて、全裸で現れた」

「統一戦争で核に傷を覆った私は、回復のため長き眠りについた。その隙を教会の奴等に攻撃され遅れとった私を逃がすためにマスタ

「は単身で乗り込み、シリウスの転移術でここに飛ばされたわけだ」
「治療カプセルに入っていたから全裸だったわけだ。しかしなぜ俺の前に現れたんだ」

「それはたぶん貴様が始まりの書を持っているからだろう。転移術は大きな魔力に引き寄せられるからな」

「一樣筋は通っているな。お前が何者なのかはいまいちわからんが」

「貴様こそ、何者だ。普通の人間が始まりの書を持っているわけがない。それは神の力を宿した魔導書だ。資格を持つ者しか触れることができないはずだ」

「生憎、俺は普通の高校生だ。特別な力も持ってないし、この本だって偶然手にいてただけだ。お前が思っているような、特別な人間ではない。残念だったな」

「どうにも納得のいかなそうな顔をしているが、嘘はついていない。言語眼を持っているが、始まりの書は使いこなせてないしな。それにしてもマント一枚というのは、いろいろとまずいよな。」

精神的に——よし決めた。

「ちよつと、ついてこい。貴様の服を買ってやる。その格好ではいろいろまずいだろう」

「施しは受けん。服ぐらい自分で生成できる、私をあまり愚弄するな」

「そういうなよ、貴様の力は有限なんだろう、血がなれば何も生成することができない。そうだろう」

「なぜ、それを知っている。まさか教会の人間か？ 私を追ってきたのか？」

（やつぱり、そうか？ だから俺の血を浴びて傷が治ったのか？

人間の血をエネルギー原としているわけか？）

「俺は教会の人間じゃない、お前の言動を聞いていればそれくらいわかる。いざつて時に力が使えなかったら困るだろう」

「お前が教会の関係者じゃないなら、私に血を吸わせる。そしてた
らお前を信じてやる。もちろん買物にも付き合ってやる。なかな
かの好条件だと思わないか？」

「思わないね、だって痛いのはヤダもん。それに面倒事にも関わり
たくないしね。血を吸われるくらいなら逃げるね、全力で……」

「私を置いて逃げるといいのか？ こんな軟弱者が教会の人間のわ
けないか？ 恥を知れ、それでも男か」

「何とでも言えればいいさ、争いごとは嫌いなんだよ。だから、お前
がどうなるうと構わない。俺は見ず知らずの人間のために命を掛け
られるほど、おしとよしじゃないんだよ。成さなければならな
いことがあるからな」

（なんで、俺こんなこと話してだろう、まるでバカみたいだ。関わ
りたくないならとつと逃げればいいのに……）

「お前にも成さねばならないことがあるのか？ わかった、お前に
ついて行く」

「おお！ わかってくれたか、さっそく服を買いにいくぞ。ついて
来い」

「私に命令するな」

「いろいろとめんどくさいヤツだな」

「面倒言っな」

地面に落としたエロゲーを拾い、俺達はコスプレショップを目指
して歩くことにした。できるだけ人のいない道を選んで向かった。
さすがに人通りの多いところを堂々と歩く勇氣はなかった

第5話 立派な魔法少女に育てます

なんとか、コスプレショップに来た俺達は驚愕していた。

「俺も来るのは初めてだが、ココは凄いな！ いろんな種類のコスプレがある、バニーや、ナースや、メイド、あとアニメの衣装もたくさんあるな」

「ああ、凄いとしか言えないな。こんな摩訶不思議な服を見たのは初めてだ」

「好きなものを選び、金の心配はしなくていいからな」

「本当にいいのか？ お前へ意外といい奴じゃないか」

「今頃気付いたのかよ、まあいい。早く選べよ。日が暮れちゃうから」

「ああ、そうしよう」

「よし、これに決めた。じゃあ試着して来るね、覗くなよ。覗いたら殺すからな、絶対殺すからな」

「わかったから、早く行け」

何度か振り返りながら、慎重に試着室に歩いて行く。俺はとりあえず試着室の側で待たせてもらうことにした。衣擦れの音が想像を駆り立てる、覗く気はないが、女の子の着替えを見たいという気持ちはある。それが可愛い子なら、なおさら見たいと思うものだ。男はそういう生き物だ。

しばらく葛藤が続いた。命は惜しいが、でも覗きたいという気持ちも捨てきれない。俺はどうすればいいだと、頭を抱えていると……カーテンが開いた。どうやら着替えが終わったようだ。

「どうかな？ 似合うかな？ 私、こういう服着るの初めてだから、よくわかんなくて、感想聞かせてくれる」

とてもしおらしく言う彼女は可愛らしく、ハロウィンの衣装も非常に似合っていた。まさに彼女のためにしつらえた、ピンクドレ

ス、その上に羽織る紺のマント。頭上に輝く紺色のとんがり帽子は魔女といった出で立ちを強くしていた。

魔法少女らしさの欠片もないコスチュームだ。まるで俺の好みをわかっていない。ほんとうにコイツは魔法少女としての自覚があるのか……はなはだ疑問である。

「何だ！ その格好は！ 確かに好きなのを選んでいいといったが、それはないだろう？ 魔法少女らしさがまったくない。却下だ、着替えなおせといたいところだが……それはそれで、なかなか似合ってるし、時間もないから今日のところは許してやる、ありがたく思え。ふはははは」

「いちいち、何で偉そうなんだ！ 素直に誉められないのか？ 全くめんどくさい奴だな」

苦笑を浮かべているが、どこか声は弾んでいた。会計を済ませて俺達は次の目的に向かうことにした。

もちろん下着も購入した、さすがにノーパンのままではまずいからな。あとブーツも買ってあげた、服に似合うやつね。いつまでも靴下一枚で歩かせるわけじゃないでしょう。ふびんな子だと思われるちゃうよ、ホント捕まらなくて良かった。

「なあ、どこに向かっているんだ」

「お前は黙ってついてくればいいだよ」

紺色のマントを靡かせながら、人気のない路地裏を進む少女、その斜め後ろからついていく俺。かれこれいぶん歩いている、ほととけないオーラーを出していたので、仕方なく一緒に行動している。あくまでも、仕方なくだ。俺は決して優しい人間じゃないからな、見ず知らずの他人のために行動できるほど立派な人間じゃない。ただコイツが本当に兵器なのか、気になっているだけだからな。

「ところで本当に貴様、兵器なのか？」

「その眼は、私の言う事を信じてないという眼だな」

「イヤ、貴様の言うことを信じてないわけじゃないだ、ただ現状それを確かめる術がないしな。でも決して疑っているわけではない。

信じてくれ」

「まあ、こちら辺でいいか？ 人気もないこの廃墟ならゆつくり話すこともできるか？」

そう言いながら辺りを見渡す、ここは確か法律改正の影響で捨てられた場所……昔は最先端技術を扱っていたみたいだけど、今は立ち入り禁止区になっている。

「魔法少女になる決意ができたのか？ 異世界の話を俺に聞かせてくれるんだな。どんな悪と戦っているんだ、なんだかわくわくしてきたな」

「最初に言っておく、私は魔法少女になるつもりもないし、異世界から来たわけでもない。お前の考えているような不思議な力はない。しかし倒さなければならぬ敵ならいる。頼む、私のパートナーになつてくれ、お前はなかなか見所のある男だ！ もちろんお礼はする。どうしてもアルネシア杯で優勝しなければならぬんだ」

「でも俺、普通の人間だし、戦う力なつて持つてないよ」

（確かに非現実の世界に憧れてたけど……それはエロゲーの世界でバトルモノじゃないんだよな。武闘派の家に育ったからかな？ こういう運命的な出会いでもバトルモノ展開なのか。争いごとは嫌いなにいつもこうだ）

「それは大丈夫だ、私はお前に力を与えることができる。ここで会ったのも何かの縁だ。力をしてくれ」

（何でこんな展開になつただろう、俺はただ平和な世界で魔法少女とイチヤイチャできればそれでいいのに、武術の世界は逃げられないのか？ これでは少女を助けた意味がないじゃないか？）

「私には共に戦う、パートナーが必要なんだ。頼む」

「そんなこといきなり言われても困るよ」

「血の契約を交わそうではないか」

「契約？」

「そうだ、契約だ。私と契約しアルネシア杯で優勝すれば、貴様の望みも一つだけ叶えることができるぞ」

「興味深い話ではある。だが断る、俺は他人の力は借りない主義だ」
「どうしても叶えたい願いはないのか？」

「ある、だがそれは自分の力で叶えなければ意味がないんだ。だから他者の力は借りない」

（まあ、ハーレム王国はちよつと創つてみたいけどな）

「そうか、やつぱりそうなのか。この世界に私の味方など独りもないのか？ 私は孤独だな。帰る場所すらないとは」

陰のある表情を見て俺は唇を噛みしめ、こみ上げてくる感情をぐつとこらえる。

彼女の虚ろな瞳を見ているといたたまれない気持ちになった、こらえきれない涙が溢れてくる、何とか励ましてあげたかった。彼女にはずつと笑顔でいて欲しかった。

「つまりお前は魔法少女で俺の家を仮住まいしたいと」

満面の笑顔浮かべ、歯を光らせ、ガッツポーズを取り

「という事だな！ パートナーになるのは無理だが、友達にならなくてもいいぞ」

それが精一杯だった、もつと気のきいたことが言えればいいんだけど、うまく口にできなかった。頬掻きながら相手の言葉待った。
「友達か？ 変わったことを言う奴だなお前は、私は兵器だぞ」

顔を真っ赤に染めて「それも悪くないか！」と微笑む。

見てるこつちまで恥ずかしくなり、顎に手を当てながら

「と、なると俺はマスコットか？ つまり兵器もとよい、魔法少女にエロい事しほうだいというわけか？」

子供だな。バカだからこんな時どうしたらいいのか、わからないから、ついふざけてしまう。真剣に人と向き合うことはできない。本当に弱く情けない人間なんだよ、つくづく嫌になるぜ。いつだって俺は独りよがりだ。相手の気持ちなんて考えていない。

人とちゃんと向きあうことのできない、不完全な人間なんだよ。だからかな、彼女をほつとくことができなかった。

「おい、貴様はどこまでふざけているつもりなんだ。それなら私が

どんなに恐ろしい兵器を見せてやる」

「何をする気だ」

全身の筋肉を張りつめて身構える俺。彼女から目が離せない一体どんなものを生成するつもりだ。ゴクンと息を呑む。けれど何もおこらなかつた。

可哀想な目で彼女を見る。ここまで緊張感を出しといて、それはないだろうと思つたからだ。この空気に絶えかねたのか、身振り手振りで説明を始める。その姿は滑稽でしかかつたため、思わず笑つてしまふ。そんな姿を見て必死に叫ぶ少女。

「ち……ちがう！ これはちがうぞ。私は本当に恐ろしい兵器なんだ」

「わ・わかつた、わかつたから、泣きそうになるな」

「これはエネルギーが足りなくて武器を生成できないだけで……」

「燃費の悪い奴だな、やつぱり服を買つといて正解だったわ」

「また私を愚弄するつもりか。なら許さんぞ。お前から血を根こそぎ奪つてやる」

「ほお、やる気か。俺は強いぞ、小さい頃から鍛えられてたらな」

手をポキポキと鳴らしながら、にやりと薄笑いを浮かべる。

「やれやれ、どうやら少しお仕置きが必要なようだな、ここなら人目もないし丁度いい」

「ずいぶんと自信満満だな、逃げるじゃなかつたのか？ この臆病者め」

「あの不思議な力が使えないということがわかつたからな、今の貴様など恐れるに足らん」

「あまり私を舐めるな」

爪を立てて猫みたいに飛んでくる

（先手必勝ということか？ やられる前にやる。良い根性だ）

「とにかく血をよこせ」

「こら、抱きつくな」

（あれ何ともない？ この子は本当に人間じゃないのか）

異性に抱きつかれると、全身から猛毒を出し、相手を殺すという呪いがかかっている。

これは健康な身体を入れた、対価みたいなもので、名も知らない少女からもらった力だ。

まあこれが原因で、普段女には興味ない振りをしているだけなんだけね。

しがみついていた少女を引きはがし、暴れる少女をなだめるように優しく語りかける。

「やれやれ、いくら昨今では美少女バトルが多いとは言え、安易に主人公に襲いかかるのは感心せんな。それでも魔法少女か？ 愛と正義のために戦え、そしたら俺も力を貸してやる。血はあげないけどな」

「いいか、私は魔法少女なんかじゃない兵器だ！ だから愛と正義のためには戦わない、自分の信念のために力を振るう」

（魔法少女じゃ無い、どうやらホントみたいだ……呪いが効かなかったしな。人間じゃない何て……あんまりだ）

その場に倒れこみ、涙を流しながらコンクリートを叩く。冷たくて堅い、でも俺には心地よいくらいだ。

「そんなに落ち込まなくても……」

「だから最初から言っているだろうが！ この身は兵器、戦に勝つ為の武器だ」と

「ぐすん、そりやそうかもしんだけどさ。まあ、そんな都合良く魔法少女が現れたりしないよな」

「自分で言うのもなんだけど、兵器が見の前に現れた事にはやっぱり驚かないだな」

「ああ、驚かない。だってお前は魔法少女だろう。その根拠は魔法少女シリアに似ていることだ。なぜ似ているのか、答えてくれ。それがずっと気になっていたんだよ」

「貴様の言っていることはさっぱりわからない。魔法少女シリアとはなんだ。アルネシア人のことか？ 異世界アルネシアには多くの

魔法少女が住んでいるからな。しかし私はアルネシア人ではなく兵器だ」

「そうか、わからないか。では貴様に用はない。イヤ、さてよ？ コイツが神秘的な力を持っているわけだし」

（変身もできるし、コイツといればそのマスターというのにも会えるかもしれない。独りで闇雲に探すよりも効率がいい）

「おい……ちょっと、どうしたんだ。急に黙りやがって、何を企んでいる」

「てっ事は……俺がお前を立派な魔法少女なるように教育すればいいのか。それ全て解決か。よし決めた。俺がお前の面倒をみてやる。行くところないんだろっ」

「ちよつと待って……勝手に話が進んでいるぞ」

第6話 漆黒の魔女カサンドラ

「やっと見つめた……永遠とも思える時間を生きて——」
機械的などても冷たい声が聞こえた、いつの間に現れたのだろうか。

目の前に、黒いミニドレス着た少女が立っている。

俺と背丈の変らない、でもどこか大人びた雰囲気がある女性。

少女は自称兵器を静かに見つめ佇んでいる。

その姿は、深淵の闇、深い夜、そして絶望的な黒を思わせた。

肩の上で切り揃えられた髪も、ひじまで覆う手袋もみんな漆黒で、手に握る剣……それも黒刃の剣だ。

剣先だけが赤い漆黒の両刃の剣は、艶めかしく光り、切れ味の恐ろしさを物語る。

左手で剣を軽く持ち上げた途端、黒刃に細かな赤の装飾文様が浮かび上がったと同時に、長い前髪の下の黒い瞳が、かすかに光を放つ。

「久遠の魔導具を渡せ」

（何を言っただ。この女は？）

「カサンドラ、お前も生きていたのか？ イヤ、永き悪夢から、目覚めたのか」

「ひさしぶりね、最後にあったのは一世紀くらい前だったかしらね。ホント懐かしいわ」

「もうそんなに経つのかしら、時が経つは早いものね、カサンドラ」

「一体何を話しているだ、貴様たちは知りあいなのか？」

「ええ、彼女とは古い付き合いよ、人間。大人しく渡してくれるなら、危害は加えないわ」

「ふざけるな！ そんなことできるわけないだろう。コイツは俺様の所有物だ」

「どうやら死にたいようだね、キミは」

不敵な笑みを浮かべ地面を強く蹴り、一気に距離を詰めてくるカラサンドラ。

俺が身をひるがえすより早く首目がけて斬りかかる。

食らう寸前しゃがんで避けたが、すぐさま第二撃目を後方に転がって避けるが、頬をかすつていたみたいだ。血がパタパタ垂れた。

「どうやら武道の心得があるみたいね。でもただの人間じゃ、私は倒せないわよ」

「ここは一旦逃げるぞ。コイツは危険だ」

「何処に逃げるといふの？ この時の止まった世界で。私の能力で時を止めているのよ、だからどんなに叫んでも助けも来ないわ」

「おい、奴の言っていることは本当か」

「ええ、本当よ。私の能力は創造で、カサンドの能力は時の凍結」

「でもそれ可笑しくないか？ 奴が本当に時を止められるなら俺の時間も止めれば、それで済むだろう」

「そうね、たぶん彼女もまだパートナーを見つけてないからだと思う」

「確かに私はまだパートナーを見つけてないわ、でもそれだけじゃないの？ あなたから、強大な魔力を感じるわ。初めは彼女と契約したのかと思っただけで違みたい出し、でも普通の人間にこれほどの魔力はないはずだわ、あなた一体何者なの」

「普通の人間だよ。両親も普通だしね」

（嘘である。両親のことはよく知らない。でも本当のことを答える義理もない）

「まあ、そんなことどうでもいいわ、どうせすぐに死ぬんだから」

「奴は本気であなたを殺す気よ、早く逃げて」

「逃げるって言われてもな。折角手に入れた、魔法少女をミスミス手放すわけにはいかないよな。やっぱ俺も戦うよ」

（こんな危機的状况でも、彼女を見捨てて逃げるという選択肢はなかった。もちろん危機感はあったが引くに引けない状況だった。俺は臆病な人間だから、誰かを見捨てて逃げるなんて、勇気ものもな

いんだよ)

「あんた本当に馬鹿ね。まあ、そういう馬鹿は嫌いじゃないけど」

「どうやら死ぬ覚悟はできたみたいですね。せめてもの情けです。苦しまないように、一瞬で終わらせてあげますわ」

アレは一撃必殺の居合いの構え。迂闊^{うかつ}に近づくのは危険だな。ここは遠距離からの攻撃にきりかえるか

「おい、飛び道具か、何か持ってないか」

「ごめん、持ってない」

「そうか、ならしうがないか？」

遠距離攻撃は無理だ。拳一つで何とかするしかない。覚悟を決め、地面を強く蹴り、カサンドラ目掛けて殴りかかる。

「ぐっは」

致命傷は避けたが、やはり斬られた。血がドバドバでてくる。何て切れ味のいい剣だ、かなりの業物とみた。右脇腹がキリキリ痛む。

「おい、かなり血が出てるぞ大丈夫か」

叫びながら少女が掛けっ寄って来る。

「これくらい大したことない」

「そんな傷まで覆って、よく笑ってられるわね」

「魔法少女の前では笑顔でいるって決めているんだよ。その方がお前も安心するだろう。それに魔法少女は宝だからな、必ず守ってやるよ」

(でも、痛いのは嫌いらし、血を見るのだて好きじゃない。できれば争いことならはしたくない。でも幼い頃の自分との誓いは守らないとな)

「だから、私は魔法少女じゃないと言ってるだろうが、何度言えばわかるんだ。ボケが」

「安心しろ、ちゃんと立派な魔法少女教育してやるからな。大丈夫、大した傷じゃないさ」

「いまから応急処置から、あまり動かないで」

泣きそうな顔で必死に包帯を巻いてくれている少女を見て、ああ、ありがたいと思いながら、話し始める。

「魔法少女ってさ、愛と正義のために何の見返りも無く、その身を犠牲にして戦っているんだよ。それって誰でも真似できることじゃないよね。自分のために戦うじゃなくて、大切な誰かを護るために戦う。それが魔法少女なんだよ。でも兵器はどうだい、人を殺すために道具、それでは誰も護れないじゃないか？ キミを孤独にするだけじゃないのか。それじゃあ、あまりにも悲し過ぎるじゃないか。救いを求めるなら魔法少女になって、俺と戦わないか？ キミなら立派な魔法少女になれると思うだ」

話し終えた頃には応急処置は終わっていた。

自称兵器は俺の血を使い、壁を作り、敵の攻撃を防いでくれただけでなく、傷の手当までしてくれた。何ていい奴なんだ、見ず知らずの俺を助けてくれる何て。クソ、泣けるぜ。

「貴様という奴は、魔法少女のことしか頭にないのか？ つくづく理解不能な男だな」

「命を懸けるには十分過ぎる理由だ。俺は世界の誰よりも魔法少女を愛しているからな」

「相当の変わり者だな。だが残念なことには私は兵器だ。人殺しの道具だ、いまさら生き方は変えられないし、魔法少女になるつもりなどこれぼっちもないさ。だからお前はここに隠れている。私が捕まれば済むことだ」

「ふざけるな！ 何勝手に諦めてんだよ。成さなければならぬことがあるのだろう。なら最後まで諦めるな。希望を捨てずに戦え、そして自分の意志を貫け」

「貴様に言われるまでもない。私は私のためにしか力を使わないと決めたのだから。貴様の力など借りずとも大丈夫だ。日本最強の兵器だからな」

壁に亀裂が走る、もう悠長に話している時間はないのかもしれない。

「最後、これでは言わせてくれ、死ぬな」

「当たり前だ。もしもの時はコレを使え」

決意の言葉と同時にぐらいに風船のような物を俺に渡してきた。

「コレは何だい」

「一度だけお前の命を守ってくれる。使い方はふくらますだけだ。うまく使え」

クソ！ 一人で行きやがった、かつこつけやがって、やつぱり正義の為に戦ってんじゃないか？ それでこそ魔法少女だ、俺もこんなところでじつとなんてしてられない。何か作戦を考えないと殺されてしまう。

第7話 血の契約

壁が碎ける音ともに少女の悲鳴が聞こえた、俺は駆け出していた。無我夢中で走り出しだ、少女の安否を確かめるために、辺りをくまなく探す。

そして瓦礫に埋もれている彼女を発見した。

「今、どかしてやるから待っている」

なんとか、瓦礫をどけ彼女を助けだすことに成功した。

「おい！ 大丈夫か？ 血まみれだぞ」

「なぜ、出てきた。死にたいのか？ バカモンが」

「そんな、傷だけかけ身体で他人の心配をするとは、貴様もずいぶん変わった奴だな」

「私達は似ているのかもしれない。強がりで、意地っ張り、そのくせ、本当は弱い」

「ああ、そうかもしれない。だからほっとけないのかもしれない」

「仲良く話しているところ悪いんだけど、これで終わりにしてあげるわ。光を奪え、エクリプス」

少女のことで頭が一杯になり、敵が近づいてきていることにまったく気付かなかった。

辺りが真っ暗になる、世界から光が消えたみたいだ。何も見えない。

闇に紛れて無数の斬撃を繰り出してくる。アイツの悲鳴も聞こえた。

（バカなこの暗闇中で俺達の姿が見えているというのか）

音無なく迫ってくる刃、避けることは不可能に近い。完全に闇に溶け込んでいる、実戦経験をかなり積んだ、プロの暗殺者だ！

しかも斬れるたびに強い脱力感ある、まるで力を吸われているみたいだ、長期戦は不利だ。となると、とれる行動は一つしかない。アイツの力に賭けるしかないのか。

「臆病者め、姿を隠しネチネチ相手を痛ぶることしかできないのか？ この弱虫」

「弱虫ですって、許せませんわ。この最強の一撃をもって葬ってあげるわ」

「俺の急所はここだ！ ちゃんと狙えよ」

「その減らず口も聴き飽きましたわ」

鈍い音が響き、光が世界に戻ってきた。やったな、特に作戦プランとかはなかったが、俺達は似たもの同士だ。奴等ならきつとやってくれると信じていたさ。これで俺達にも勝機が生まれた。

「一体何が起こったというのだ。なぜ光が戻った」

「地面を見てみる」

「地面が光っている。これはヒカリゴケか」

「それは普通のヒカリゴケ比較にならない明るさを放つ。どうやら半径三メートルまでしか暗闇にできないようだな」

（鈍い音の正体はゴムだった。ゴム風船で作った人形を身代わりにすることで一命を取り留めた。そのあとは賭けだったが、成功して良かった）

「小賢しいことをしてくれますね。でももう虫の息のみたいですわね。大人しく久遠の魔導具を渡せば、命だけは助けてあげますわ」

「てめえはバカなのか、俺が魔法少女を手放すわけねえだろう。それにな俺はこんなところじゃ死なない。死ぬわけには行かないだよ」

とりあえずアイツと合流しよう、そして二人でコイツを倒そう。

一人で出来なくても二人なら倒せるはずだ。どうやらアイツも同じことを考えていたみたいだ！ 何か叫びながらこっちに近づいてくる、声がだんだん大きくなる。俺も走り出す、彼女に向かって全力で駆け出す。しかしその道をふさぐカサンドラ。

「そこをどけ、邪魔だ！ 俺達の道をふさぐな」

「なら、打ち破ってみてくださいな。お前たちの底力を私に見せてくれ、そして私をもっと楽しませてくださいな」

「私はここで壊されるわけにはいかない、これが最後のチャンスよ！ 私と協力してカサンドラを倒しましょう」

「それしかないか？ 俺もまだ死にたくない、あの少女に会ってないからな。いいぜ、協力してやるよ」

カランドラをはさみうちし、俺はありったけの力を込めた掌底を腹めがけてくりだす。同時攻撃だ、これはさすがに避けられないと思ったのもつかの間、身体を掴まれ、一回転し地面に叩きつけられ、その後俺の右腕を掴んで彼女のほうに投げられる。なんて俊敏で力強い動きだ、まったく見えなかったぞ。

「おい、変な所触るな、どけ！ くつつくな、変態」

覆いかぶさるように倒れた、俺は少女に罵倒された。すぐにどうとしたが、変な倒れ方をしたしせいかな？ 絡まって身動きとれないという不可解な状態に陥った。甘い香りが鼻腔をくすぐり、とても幸せな気分になる。彼女の吐息やら体温を肌で感じる事ができるくらい、かなり密着した体勢である。この死んでもいいなと思えるほど心地良かった。

「コラ、息をかけるな、気持ち悪い。お前、今の状況わかってないだろう、だからそんなにふざけてられるんだよ。コラ、動くな。変なところに当たるから、この変態」

「仲良くじゃれあっているところ悪いんですが、そろそろトドメを刺さしてあげるわ、二人一緒に仲良く死んじやいなさい」

「時間がない、早く私の血を飲め、死にたいのか」

「ああ、わかったぜ」

少女の首筋に噛み付く、血はとても苦く、錆臭いくてお世辞にも美味しいとは言えない。

だが、死にたくなかった、だから無我夢中で血を吸った、血に飢えた、吸血鬼のように激しく吸った。

身体中が光出す、あまりの眩しさにカサンドラも近づけないようだ！ よし、ほどけた、身体を自由に動かさせるぞ、それに細胞の一つ一つが活性化しているのがわかる。傷がみるみる治っていく、全

身から力が湧いてくる。これが血の力か？ 過すごすぎる、一体どうなっているんだ。

「契約は成功したみたいね、力が溢あふれてくるがわかるわ。まるで生まれ変わったみたい」

「これが血の契約か？ 今なら何でもできる。不可能なことも可能にできるはずだ」

（こんなことならもつと早く契約しとけば、そしたらこんな痛いめにあわないで済んだのかもしれない。でもピンチからの大逆転の方がカッコいいか？）

「そうでなければ……面白くないわ、さあ、お前たちの全てを私にみせて。全力でお相手してあげるから、楽しいパーティの始まりよ」
「貴様の戯言にいつまでも付き合うつもりはない。エロゲーを剣に変える力で一気にかたづけてやる」

（えっと、今日買ったエロゲーはどこだろう—— あ・あった）

運よく近くに一つ落ちていた、エロゲーまでの距離約十センチ。

素早く地面を蹴り取りにいかうとするが、邪魔が入る。

（クソ、後もう少しなのに？ 手がエロゲーに届かない）

「自分の能力を喋るとは、救いようのないバカですね」

「それは貴様のほうだ、カサンドラ」

「どういうことですか？」

アマノムラクモノツルギ

「天叢雲剣生成」と叫び、手が光り出して少し開き、野球ボールぐらいの粒子の集まりが弾け、剣を構成していく。

それは両刃の大剣で、刀身は紫で、柄は黒。

大きさは少女の背丈以上あるが、片手で軽々持ち上げている。

ゆっくりとこちらに向かって歩いてくる。

「そういうことですか？ それで勝ったつもりですか？ 爪が甘いですわね、スイーツのように考えですわ」

大剣を斜めに力強く振り下ろすが、軽く受け流される。

「残念でしたわね。このエクリプスはオレイカルコス製ですよ。そんなナマクラでは、傷一つつきませんことよ」

この際にエロゲーを掴み、武器に変えることに集中した。
ジャンルによって武器の形状が決まり、武器の効果を変える。
俺が手にしているのは陵辱系、効果は服従。

形状は短剣。

刃渡り五センチぐらいの短剣。

材質はヒヒロカネ。

エロゲーが短剣へと変えていく。

両刃で細身の刀身は闇夜の中でも煌々と輝く緋炎。

それが自分の身に宿した力。

短剣を正眼で構えて地面を蹴ってカサンドラと間を詰め、素早く
頬を切り裂くことで効果が発動する。

「油断したな」

カサンドラの動きが止まる、これが俺の力だ。

「何をしたのですか、身体が動がまったく動きません。これはどう
いうことですか」

「今だ、トドメをさせ」

相手の動きを数分しか止めることしかできない。これも俺がこの
力を完全に把握していないからだ。もって一、二分だろう、だから
彼女にトドメをさしてもらったことしたのだ。

「いちいち私に指図するんじゃないわよ、それくらいわかってい
るわ」

「や、止める——」

構う事なく斜めに思い切り振りおろす、カサンドラの身体はか
ら血が噴き出し、地面を赤く染める。

「やった」

「イヤ、逃げられたわ。手傷を負わせることはできたけど」

「えっ！ どうやって逃げたんだ」

「それは簡単よ。あなたの想像以上に彼女の力は強力で、あなたの
力は未熟だということだけのこと」

「俺の力は、ものの数秒しか効かなかったということか」

「そういうことね、この未熟ものめ。あと契約について伝えておかなければならないことがいくつかある」

「簡潔に説明してくれ」

「お前の身体に私の血が馴染むまでおよそ三日。七十二時間ね。それが過ぎたら二十四時間以内に私の血を飲まないと貴様は死ぬことになる」

「それはどうということだ」

「契約の対価だ、驚くほどのモノではないだろう。あと私の血を飲むことで繋ぎりが強くなる。もはや私達は一心同体なのよ。記憶の共有に感覚の共有。貴様が傷付けば、私も傷付く、もはや貴方と私は離れられない。どこにいても繋がっているのよ。」

それが血の契約……私とパートナーを組むということ、そして力を得るということ。

契約を終わらせるには、私の願いを叶える……それしか方法は無い。

貴様に選択の余地などもはやない。

さあ、私ともに生きましょう。

世界が終わるまで、ずっと、ずっと一緒にいましょう」

（ふざけるな……俺は、まだやることがあるだ）

などなどと思ったがとりあえず、短剣をエロゲーに戻し、散らばっているエロゲー紙袋に戻し、大急ぎで逃げようとしたが遅かった。巡回お巡りさんに捕まってしまった。罪名 幼女誘拐および強制わいせつ。もちろん無罪を唱えた。だが誰も信じてくれなかった。

みんな口をそろえて『あいつならやると思ってたよとか、イカレタ野郎だからとか』、他にもこんなことを言っている奴もいた。

『ローリコンだからな、絶対やると思ってたよ』みんな好き勝手いってくれる。

第8話 組織

飾りつけもなくだった白だけの部屋。

そこにぽつんと、鳥カゴがある。

鳥カゴと言つても人間が一人丸ごと入れる大きさだ。

その中で一人の少女が泣いている。

目は赤くはれ、喉もかれている。もう永い時間泣いているみたいだ。

少女の背中には翼があつた、白く綺麗な翼だ。

もしかしたら、少女は天使なのかもしれない。

決して比喩ではない、それくらい美しかった。

少女はある男の子を思い出していた。

とても優しい人のことを――

見ず知らずの言葉も通じない私のことを気にかけてくれた――とても優しい人である。

名前も知らないけど、その顔はわすれない。

もう会う事ができなくても。

鳥カゴの鳥は決して外にでることはできないから。

アレは淡い夢でうたかた。

でも決して忘れることはできない大切な思い出。

あの子は私のことを覚えているだろうか？

もし覚えていてくれたら嬉しいな。

ああ、会いたよ。会いたよ。

地面が涙で濡れていた、何で俺は泣いているんだ。何か夢を見ていた気がするがよく思い出せないが、始まりの書は黄金に色に輝いてた。俺の手元に残ったのは始まりの書だけである。他は全て取り上げられた。なぜ始まりの書だけ残ったてそれは秘密さ。拘置所で迎える朝はとても寒い。そして俺の身に何が起きたのかを思い出し、

愕然とする。

俺捕まっただけ。そんな嘆き悲しんでいる時に、怪しげな神父が面会にやって来た。

もちろん知り合いではない。無神論者だ、教会なつて一度もいったことないし、教会関係者に知り合いはいない。

「お礼を言いに来たんだよ。スピカを助けてくれてありがとう」

感謝の言葉を述べているのに表情一つ変わらない、のっぺり顔の男。服装は紺色のスーツに首から十字架を下げている。髪は綺麗に整っており、ほんとうに特徴らしい特徴のない男だ。

「なんのことを言っているのか？ 俺にはわかりません」

「キミが捕まる前に助けた少女のことですよ。我はその子の保護者みたいなものです」

「お礼は言葉より、俺の無実を証明してくれた方が嬉しいです」

「もちろん、そのつもりできました。ただし一つ条件があります。

何、簡単なことです」

何も書かれていない白い仮面を張り付けたような顔で言われると、物凄く怖い。

「俺にできることなら何でもします」

「娘の恩人ということとでいろいろと調べさせてもらいました。特殊な環境で育ったようですね。しかも始まりの書を所有しているとか？ 実に面白い話ですね」

「神父さまは一体何者なんですか。なぜ俺のことをそこまで知っているんですか？」

「娘の恩人でも、それはお答えすることはできませんね。ただ貴様の敵ではありません」

「それで俺は何をすればいいんですか？」

「娘を助けて欲しいんですよ、あなたは娘と契約したんでしょ」

「まあ、成り行きでしたけれど、後悔はありません。魔法少女との契約は王道ですからね。もちろん助けるつもりですよ」

「ありがとうございます、断られたとうしようかなと思ってました。

あなたを証明するものは、全て消去しましたから」

「消去？ それはアレか？ 捨てられたということか」

「少し違いますね、存在した痕跡を消したのです。簡単に言うと『過去改変』ですね、はい、だから捨てられたではなく、忘れられたです、世界に」

「そんなことが本当にできるのか？」

「出来ますとも、それが組織の力です。そして今日からあなたも組織の一員です」

「ちよつと待つてください、スピカとか言ったか、あの子は守る。だけど組織に入るとは言つてません」

「それは困りましたね、あたなの存在は全て消してしまいましたしね。組織に入ってもらわないと私の立場がないんですよ。考え直してくださいませんか」

「それはできない」

「死ぬということですね」

「なぜ俺が死ぬ、貴様が俺を殺すのか」

「お忘れですか？ あなたは娘の血を飲まないと死ぬですよ」

「ああ、そのことか？ 血が身体に馴染むまであと二日、確かにあまり時間はないな」

「どうします？ ここで死ぬにますか？ まあ一樣娘の恩字ですから、丁重に埋葬してあげますよ。だから安心して、死んでください」

「少し考えさせてくれ。すぐには答えを出せない」

「仕様が無いんですね。では明日また来ます。それまでに考えてくださいね。あなたに残された時間は……もうわずかですから、いい返事を期待してますね」

「わかりました」

「では、これで失礼します」

「いろいろとありがとうございます、ではまた明日」

そして神父と別れて拘置所に戻った。

神父の話を断つても地獄、乗ってみても地獄だろう。

どっちを選んでも地獄だな。

なら、神父の話に乗ってみるのも悪くないのかもしれない。
あの子にもう一度会いたいしな。

何て言っても魔法少女だしな、守ると誓ったからな。

まあ、ここに行っても死だけだしな。

しかし、存在消えたと言われてもいまいち、ピントこないな。

まあ、迷う余地なんてないけどね？

こんな俺を必要としている人がいるんだから。

その人の役に立つことができるだけで幸せなはずだ。

よし、明日ちゃんと答えよう。

今日はもう寝よう、いろいろと考えたら疲れちゃった。

「おはようございます。決心はつきましたか？」

「組織とやらに入ってやる、だから早くここから出せ」

「わかってくれました、ありがとうございます。娘をよろしく願います。あとこれはスピ力を助けてくれた謝礼です。どうぞお納め下さい」

小麦色の封筒を押しつけてくる。中には十万ほど入っていた。

「こんなにもらえませんか」

高校生の自分が貰うには少し大き過ぎる金額だった。

「受け取ってください、ほんの気持ちですから。それに生きていくために金は必要です」

「わかりました。大切にに使わせていただきます」

牢屋を出た俺は、神父の紹介でとある教会に厄介になることになった。

そこは教会というよりも神殿と言った雰囲気建物だった。
巨大で立派な石組みの教会。

デザインはたぶん、イギリスとかにある大神殿だろう？

まあ写真でしかみたことのない建物だ。

石畳の教会を見るのはこれが初めてで目を丸くした。

扉を開けた先は礼拝堂になっていた。

石組みの壁にタイルの床、豪華なステンドグラス、列をなす長椅子に立派な内陣、十字架にかけられた救世主の像……どれも、西欧の歴史ある教会を思わせた。

教会という場所に来るのは、初めてだったが、思わず息を呑んだ。異世界に迷い込んだと錯覚するほど、中は広く美しかった、それに空気もたいへん澄んでいて清々しい気持ちになった。

「申し訳ございません。ここは関係者以外立ちり禁止になっております」

紺の修道服を着た、二十代後半と思しき女性が声をかけていた。とても落ち着いた雰囲気をつつた、修道服の非常に似合う女性。

「俺はシリウス神父の紹介できたものです」

金の瞳を瞬かせ、納得したよう顔で手を叩き。

「ああ、あなたが……はい、話は聞いています。スピカさんの恩人で、確か天海翼さんですよ」

「はい、そうです」

「わたしは、シスターカレナといいます。立ち話も何でしょう、食堂まで案内します」

四十五度の綺麗なお辞儀に、爽やかな笑顔。差し出された手には白い手袋がしてあった。その手を握りしめ俺は軽く頷いた。手袋越しとはいえ、女性と手を繋ぐのは恥ずかしいものだ、少し頬を赤く染めていた。

「こちらが食堂です。何か吞まれますか？ 紅茶とコーヒー、それとウーロン茶がありますが、どれになさいますか？」

「では、コーヒーを」

「ブラックでよろしいですか？」

「ミルク一つと、砂糖なしでお願いします」

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

綺麗に腰を三十度に折り、あざやかな笑みを浮かべ、コーヒーを入れに向かった。

残された俺は辺りを見渡す、天使の絵が描かれたステンドグラスに、シャンデリア。長机に置かれた口ウソク、あと宗教画も幾つか飾つてある。待つこと数分で戻ってきた。

「熱いのでお気をつけてお飲みください」

テーブルの上にそおつと置かれる二つコーヒー。ミルクがたっぷり入ったコーヒーは彼女が飲むのだろう。

「ありがとうございます」

向かいの席に着き仕事の話が始める。その場の空気がりりと変わった気がした。

「あなたにはスピカさんの護衛と、各地で起きている神狩りを調査してもらいたいです」

「それが仕事内容ですか？」

「はい、そうです。やっていただけますか」

大人の笑みを浮かべ、艶めかしい声でお願いしてくる、その姿はまさに大人の女性と言った感じだった。

（いかにも怪しい仕事だ！ 神狩りの調査か？ しかも報酬も高い。神父は死と隣り合わせの仕事だと言ってた。でも断ることはできない。断れば……事務所……か）

「はい」

肩を落とし、口を震わせ、力なく答えた。まともに彼女の顔を見ることができない。

「ありがとうございます。」

彼女の明るい声に対して、目線を反らしたまま、苦笑を浮かべて軽く頷くことしかできなかった。

第9話 再会

「では、宿舎にご案内しますので、わたしの後をしつかり連いてきてくださいね」

「わかりました」

シスターカレナの後を歩くこと数分、古びた建物が見えてきた。

「こちらの建物の一〇五号室です。あとこれが部屋のカギです、無くないようにしてくださいね」

シスターからカギをもらい、宿舎の中に入っていく。

薄暗く痛んだ廊下は、所々穴があいており、壁には不気味な染みがたくさんある。月明かりを頼りに歩いて行く。どうやらこの廊下は円形になっているらしい。五部屋で、二階に向かう階段らいきものがみあたらない。外から見た感じ五階ぐらいまでありそうなのに、不思議な建物である。

とりあえず、自分の部屋に向かうことにした。

「ここか、一〇五室は」

ゆるやかに扉を開き、中を覗く。

何もなかった、家具という家具がなかったが、思った以上に綺麗だった。白く真新しい壁に茶色っぽいフローリングで、埃一つなく悪臭もしない。広さは四畳半ぐらいだろう。今日からここで生活することになるのか？

ただお布団がないのは厳しい、せめて毛布一枚ぐらいは欲しい、凍え死んでしまう。

よし、シスターに話して毛布を借りよう、そう思い経ち、教会に向けて歩きだす。

困った！ 道に迷ってしまった。土地勘もなく、シスターの後を連いていったけなので教会までの道がわからない。

道を聞こうにも人影が見えない。完全に遭難してしまった。

（このまま、ここで野たれ死ぬのかな。どうしてこんな人里離れたところにあるんだろう）

見渡す限り木、鬱蒼と生えた木が見える。それ以外見えない。この木の所為で方向感覚が麻痺する。冷たい風と木々のざわめきが体を震わせ、魔性の森に迷い込んだ気分になる。

辺りは暗く、月明りとおぼろげな記憶を頼りに教会への道を探す。

「きゃあああ——」

女性の悲鳴みたいなものが聞こえてきて足がすくんで動けなくなる。

命の危険を強く感じた、ヤバイ！ マジでヤバイ！ この森で何かが起こっている。

（どうしよう、助けにいったほうがいいのかな）

そう思い、叫び声がした方に歩き出す。できるだけ静かに、物音をたてずに慎重に森の中を進む。

「この娘どうしますか、殺しますか。アニキ」

「イヤー、縄で縛おけ。もしもの時は、人質として使えるからな」
「わかりやした」

話し声が聞こえてきたので、こっそり木の影から覗くと、ガラの悪そうな男達に少女が捕まっていた。数にして五人。捕まっている少女は、あの自称・兵器の魔法少女だ！ 確か名前はスピカとかいったな。

服装は大日本帝国海軍航空隊のモノだ。

『零戦』の名で知られる零式艦上戦闘機は海軍の戦闘機であり、航空隊の着用するを航空衣袴と呼ばれていて、布で作られていた。スピカが纏っているのは、上下ツナギ式で黄土色をしている。

アニキと呼ばれた男は、女子高生が持つてそうな、紺のナイロン製のうさぎのマスコット付いた、可愛らしいバッグを持っていた。たぶんスピカのものだろう。

なぜにバッグだけあんなに可愛いだろうか。実におかしいというか、アイツは、うさぎが好きだったのか？ 驚きだ。

（とりあえず、助けないとまずいな）

「おい、貴様ら一体そこで何をやっている」

「見てわからないのか？ お宝を頂こうとしているんだよ」

「やはり貴様らは追い剥ぎだな、ということは悪だ。悪は許さない」

「正義の味方気どりの餓鬼が、いい気になるなよ。こつちには人質がいるんだよ」

スピカの首元にナイフを突きたて叫ぶ、仲間の一人が殴り掛かってくるが、そのパンチをカンターで返す。まず一人。

「貴様、人質がどうなってもいいのか？」

「そいつが死のうと俺には関係ないことだ！ 俺はただ悪が許せないだけだ」

「イカレてやがる。なら望み通り殺してやる、ざまあみやがれ」

スピカの首にナイフを突き刺そうとしたその時、ありえないことにスピカの蹴りが股間を直撃し、悶絶する男。

（アホだ！ アホがここにいて、人質に反撃されるなんて、アホとしか言えない）

「大丈夫ですか？ アニキ」

「よくもアニキをやりやがったな」

続いて二人掛かりで襲ってくるが、単調な攻撃なので避けるのは容易い。

「クソ！ こうなったら全員で行くぞ」

「さすがアニキ！ もう復活ですか」

「どうやら、回復したらしい、意外とコイツ等、タフだな。」

「つかまえた」

賊の一人が俺の肩を掴み叫ぶ。

「汚い手を退ける！ カスが」

肩に触れてきた男を思いつき投げとばす。

そして残りの三人を一瞬で蹴散らすし、バックを取り返す。

「クソ、覚えてやがれ」

「待つてください、アニキ」

仲間の一人を抱えて逃げていく、アニキと呼ばれていた男。その後ろを三人の下っ端。悪役とはいっつも見ても惨めなものだ。

「大丈夫かい、すぐにほどこいてやるからな」

「ええ、また助けてもらったわね、ありがとう」

「お前意外と弱いだな、あとこれお前のだろう」

そっぽを向いてバッグを押しつける。縄はもうほどいてある。

「血、貴様の血さえあれば、あんな奴等に遅れをとることはなかった」

バッグを受け取りながら皮肉言う。全く素直じゃないし可愛くもない。まゆ毛がよって、怒っているようにも見えるが頬は少しだけ赤い気がした。手を伸ばし立ち上がるのを手伝う。細く綺麗な手だった。

「俺の血じゃないとダメなのか？」

「一度契約を結ぶと契約者以外の血を飲むと死ぬだよ。そういう風に私達は作られている」

「じゃあ今は、俺の血しか飲めないのか？」

「まあ、そういうことになるな」

まゆ頭を上げ、頬を赤く染め気恥かしそうに言うスピカは少しだけ可愛いと思った。手や足をもじもじさせ、可愛らしく身体をくねり、髪を靡かせる、その姿は絵になっている。俺の心を震わせた。なるほど、いろいろと大変だな！　ここで何をしてんだ」

「貴様には関係ないことだ。私は人に干渉されるのが嫌いなんだ」

突然怒りをあらわにするスピカ、表情がころころ変わるヤツだ。

一緒にいても飽きないタイプだな。冷静に観察する、にしても俺には関係のないことだな。別に口出しするつもりもないしな、ここは一つ謝っておこう、ついでに教会の場所も聞く事にした。

「個人的問題に首を突っ込むつもりは別にない。言いたくないならそれでいい。あとお前、教会の場所わかるか」

「先から貴様は偉そうだな！　私はお前という名前ではない。スピ

力だ。覚えとけボケナスが！ 教会の場所なら知らん」

「お前——ここに住んでるじゃないのか？　なんで知らないんだよ」

「だから私はお前じゃない。スピカだ。知らないもは、知らないんだから仕方ないだろうが。ボケがっ」

「逆ギレかよ！　どうするだよ」

「私が知るか？　ボケナス」

「クソ！　このままここで話していても、埒があかない。空から探すぞ！　スピカ」

「お前空を飛べるか？　凄いな！　私は飛べないぞ」

「俺だって——飛べるか？　貴様が俺を抱えて飛ぶんだよ」

「えっ！　どうやって」

「俺の血を吸って、空を飛べそなものを生成すればいいだろう」

「ああ、その手があったか」

「やっと気がついた。ホントバカだな」

「うるさい、さっさと血を吸わせろ」

「はいはい、わかったよ」

「なんだ、そのなげやりな返事は？　貴様は私に対する敬意が足りないぞ」

「何でもいいから、早く吸えよ」

なんでコイツはいつも首筋を狙ってくるんだろう、出会ったときもそうだったな。たぶん深い意味とかないだろうな。バカだから——

——まあいいけど、やつぱり、血を吸われるのは好きになれないな。痛いし、力が抜けていく感じがあるし、もうとにかく最悪な気分になるだよ。

「終わったか？　なら、早速生成頼むわ」

「そのくらい言われなくてもわかってるわよ！　少し黙ってなさい」

ツンケンしたい態度をとりがって、ツンデレでも目指しているのか？　今時流行んねえよ！　まあ、でも意外と可愛いな。これはこ

れでいいのかもしれない。決して嫌いではない。

「なにっ！　ぼさつと立つてのよ。できたわよ」

「翼か？　しかもハヤブサの翼。スピカ良い選択だ」

「では、いくわよ！　しっかり掴まっていないと、振り落されても
しらないからね」

「これでいいか？」

「コラ、だからって抱きつくな、変態」

「無理を言っな」

「まあ、仕方ないか？　でも変なことしたら、容赦なく落すからな。
いいな」

「何もしないよ。たぶん」

「たぶん」

「何もしません」

「わかればいい、では行くか。空の旅に」

空から辺りを見渡す。一面に広がる緑。この森はどこまで広がっ
ているのか？　気になるが、今は教会を探すのが最優先事項だ。

「えっと、教会は——あった。意外と近くにあったぞ」

「シスターカレナ。毛布一枚貸してください」

「ええ、いいわよ。あそこはとても冷えるから。暖かくしないと
けないわよね」

「ありがとうございます」

「あと必要なモノがあったら、スピカちゃんに作ってもらいなさい」

「でも、アレとても疲れるですよね」

「じゃあ給料が入ったら、家具とかそろえればいいわ」

「それまで我慢するしかないですね。ところで給料日はいつですか
？」

「依頼達成後に渡しているわ、だからね、給料日とかはないの」
「そうなんですか？　わかりました」

「では、失礼します」

第10話 メッリサ・リナルド

宿舎・自室。

「ふう、何とか無事に帰ってこれたか」

「私の血も汝の身体に溶け込んできているようだな、そろそろ、本契約に入るか？ 心の準備はできているか」

「契約って血を飲み交わすだけじゃないの？」

「まあ、アレは仮契約というか、時間が無かったんだ、しょうがないだろう」

「危機迫る状態だったからな、わかった。その本契約というのを結ぼう。俺の覚悟は遠の昔に決まっている。それにキミの血を飲まない俺は死ぬだろう」

「そうだな、もう私の血は汝の身体に入ってしまったからな」

「拒否権何て最初から無いんだ。それにお前が気にすることない。これは俺の選んだ道なのだから」

「それでも、お礼を言わせてくれ、ありがとう。では、一言信義と呼ばれる誓いの儀式を行なう」

一言信義とは、武士に二言はない、その武士道の“誠”と同様。約束ごとに二言はなきようにという意味は合いの“信義”を合わせた誓いのこと。

まあ、平たく言うと、指切りと同じようなものだと考えていい。

「私の言葉に続いてくれ。」

我、誓い立てし言葉、忘れることなかれ

汝、聞き届けし言葉、忘れることなかれ

今度は俺がゆっくりと口を開き

「我、誓い立てし言葉、忘れることなかれ

汝、聞き届けし言葉、忘れることなかれ」

「我と汝、ここに結ぶ契り、互いに破る（やぶ）ことなく、破られることなきよう努めるべし。」

誓いに？偽りあれば、その不義に制裁をもつて応じ、その命に鉄槌を振り下ろす。

我と汝、交わす言葉、これすなわち一言信義の契りなり」
綺麗な声が心に響く。

この後は確か、実際に誓う内容を言うんだっただな……

「我、天海大地は、汝、スピカに誓う“キミと友達になる”と」
パートナー

「我、スピカ、天海大地の誓い、聞き届けたり。これにて、一言信義の儀とする」

これで契約完了と

「大な魔力を感じたんで来てみたが。ついに見つけたぞ。星喰い」

「また変なのが出た。コイツに出会ってから変な奴に良く会うようになったな」

まあ、退屈はしないからいいけどね。

白のロングケープに身を包んだ白人女性がそこにいた。金髪碧眼で、手に持っているのはレイピアか？身長は俺より高いな？たぶん百八十はあるな、しかも八頭身だ。胸はでかく、魅力的だ、F、イヤ、Gカップはあるな。スピカにない魅力を持ち合わせた女性だ。まあ俺は貧乳派だけだね。

「マスターはどうした。なぜおまえここにいる」

「貴様と一緒に居た男か、知りたいなら私の所に来い。そこはお前の居る場所じゃない」

「ふ、ふざけるな。仲間などにはならん。私は貴様らがしたことを決して忘れない」

（スピカの様子が可笑しいな、震えているみたいに見えるし、何処か感情的で。声にも覇気がない）

「なぜスピカを狙う。一体何者なんだ」

「おっと。自己紹介が遅れたな。私はイギリスからやって来た。星喰い討伐部隊者で、名をメッリサ・リナルドという。貴様はそれがどういう存在だかしているのか？世界を滅ぼすかもしれないほど

恐ろしい兵器だぞ」

「俺のパートナーを侮辱するな」

「侮辱ではない、事実だ。そいつは恐ろしい兵器なんだよ。地球そのものを壊しかねない力を持っている」

「コイツにそこまでの力があるとは思えないがな」

「何も知らずに契約したのか？ そいつの力は貴様の手にあまるものだ。一滴の血でドラゴンを生成した恐ろしい女だ。万物を創造する力、例外は無く、彼女は全てのモノを完璧に創造することができる。それが例えフィクションでも」

「スピカを手に入れてどうするつもりだ」

「世界平和のために役立てる。争いのない平和な世界で暮らしただらう」

「そのためにスピカが必要だと言うのだな」

「ああ、そうだ。貴様ではその兵器は手にあまるだらう。我々なら有効に使うことができる。もちろんタダとは言わない。一千万出そう、それだけあれば、再就職先も見つかるだらう」

「断る。いくらお金を積まれてもスピカは渡すつもりはない。貴様らがつくる平和にも興味はない」

「自分の身を心配しているなら安心しろ、契約解除の方法なら知っている。星喰いを渡してくれたら教えてやる。それが条件だ」

「必要ない。契約したことは後悔してないし、自分の意思で決めたことだ。それにお前らは気に入らない。スピカをモノみたいに扱いやがって、そういう考えが一番嫌いだよ」

「姿こそ人間に近いが、それは紛れもなく兵器だ、人間ではない。そんなこともわからないのか」

「全然わからないよ。わかりたくもねえよそんなこと」

「どうしても、渡さないというのだな」

「ああ、渡さない。絶対にな」

素早く背後にまわり込み、喉元にナイフを突き立ててくる。

胸が背中にあったているか、その感触を楽しんでいる場合じゃない

い。

「早く俺から離れる、死ぬぞ」

「動くな、騒ぐな、お前は人……」

だから離れるって言ったに、結局何も聞き出せないまま死にやがった、クソ。

「ねえ！ 何で死ぬじゃったの？」

（震えも止まり、陽気な声で訊いてくる。やっぱりコイツのことはわからない。何を考えているのか全く読めない）

「俺の身体から出た毒にやられたんだよ。俺の身体は少し特殊でな、抱きつた相手を瞬時に殺すことができるだよ」

丈夫な身体を手に入れた対価がこれだよ。おかげで異性と付き合いうことができなくなった。

「で、この遺体はどうするの？」

「陽のあたりのいいところに置いとけば、自然消滅すぞ」

「マジでか」

「ああ、ホントだ」

「今日はもう疲れた、俺は寝る。お前も自分の部屋に帰れ」

「おい、待って！ 貴様は、大切なことを忘れているぞ。まだ私の血を飲んでいない」

そう言われて見れば、血を飲まないと死ぬだけ、忘れてたわ。

「わかった。飲むから準備してくれ」

血の入った銀の聖杯。

「早く私の血を飲め、死にたいのか？」

「それでは頂きます」

「苦い……」

「まあ、そのうちなれる」

「そういうもんかね」

（記憶が、ビジョンのようなものが見える。これが記憶の共有か？）

一面に焼け野原が広がっていた。無数の死体が転がり、血の臭い

充滿している。

ここが秋葉原であることに気付くのに数分の時間を要した。

人影が見えた。

女性だ。

二人いる。

一人はスピカで間違いないだろう。あの軍服には見覚えがある。

もう一人は、成熟してきた、大人の女性だ。

でもどこか、あの少女に似ている。白髪に白肌でも傘は差してしない。たぶん陽が射していなかろう。空は黒い雲で覆われていた。

「私のせいでまた戦争が起きた。多く人が死んだ。私が殺したんだ」

返り血で、白いドレスは赤く染まっていた。

「泣かないで、貴女せいじゃないわ。貴女の力を求める、貪欲な人間が悪いのよ。あんなゴミために泣く必然なんてないわ」

「私が殺した。私が殺した。私が殺したんだ。私を守るために多く血が流れた。私がいなければ、私さえいなければ、戦争は起こらなかった」

「お願い私の話を聞いて、耳を傾け……自分をそんなに責めないで」

しかし、スピカの響きは少女には届かなかった。

そこまでだった、それ以上何も見えなかった

（今のは本当にスピカの記憶なのか？ 何て悲しくて苦しい寂しい記憶なんだ）

「その恰好で寝るのか？」

「そうだけど、何か文句でもあるのか」

「別にないけど」

（寝巻姿も見たかったけど、まあいいや。軍服も似合ってるし）

「もう俺は寝るよ。スピカ、お前は隣の二〇四号室だろう」

「お休み」

スピカが部屋を出て行くのを確認して眠りにつくことにした。

第11話 調査開始

「朝だ！ 起きろ」

「まだ眠いよ、今何時だ」

「わかるか」

「時計ないんだけここ」

「朝食ができたらしい、食べに行くぞ」

「教会まで歩くのか？」

「ここの食堂で食べられる。黙ってついて来い」

「わかりました」

食堂は二階にあるらしい。またこの宿舎には階段というものがな
いらしい。では、どうやって行くのかというと、一旦外に出て梯^は
子^こを使って窓から入るらしい。まったく変わった入り方だ。

二階は食堂の他にお風呂や談話室があるらしい。

「なかなか美味しかったな！ いろいろと訊きたいことがあるんだ
が、訊いていいか」

食事を終えた俺達はとりあえず談話室でこれからのことを話すこ
とにした。

「まずは私達の絆を深めましょう」

「わたしの名前はスピカ、あなたの名前は？」

「俺は天海大地、一樣お前の護衛だ。よろしくな」

「ええ、こちらこそ、よろしく」

「組織のことを教えてくれ」

「まあ単刀直入ね。でも私もそんなには知らないわよ」

「それでも構わない。知っていることを全部教えてくれ」

「わかった。教えてあげる、その代わりわたしの質問にも答えてね」

「ああ」

「世界規模の宗教組織なんですって。何でも人類が生まれる前から存在していたものらしいわ。組織の名前は不明、その目的も明らかになっていない」

「神狩りの調査することが目的じゃないのか」

「それは本来の目的を誤魔化すモノ。他にもいろいろとやっているわ」

「異世界の研究もやっているのか？」

「わからないわ」

「質問を変えよう、シリウス神父のことは知っているよね」

「ええ」

「一体何者なんだ」

「私の保護者で魔法術の研究者らしく、たまたの魔法術を使うことが出来るわ。彼もアルネシア人で歳は不明。アルネシア人は長命なのよ。あとマスターの友人らしいわ」

「アイツは信用できるのか？」

「それはわからない。私もほとんど話したことがないから、でも悪い人ではないと思うの」

「そうか。今のところは様子見ということか」

「他に訊きたいことはある」

「今のところコレくらいかな」

「では私からいくつか質問させてもらうわね。答えられる範囲でいから正直に答えてね」

「ああ」

「なぜここに來たの？ 目的は何？」

「それはキミ会いたかったからというのもあるが、死にたくなかったからかな、やっぱり」

「あの子ため？」

「あの子？ 誰のことを言っているだい」

「気にしないで、今言ったことは忘れて」

「なんでだ」

「なんでもいいから、忘れなさい」

「わかった、そう睨むな、もう変な詮索はしない」

「ならいいです。貴殿、桜の息子らしいな。シリウスから聞いた時は、正直驚いた。だが私の眼に狂いなかったということだな」

「知り合いなのか？ 母さんのことを教えてくれ」

「時期が来たら話そう。今はその時ではない」

「そうかよ？ 話せないことばりじゃないか」

「まあ、そう怒らないでください。これが最後の質問です。貴殿とて始まりの書とはなんですか？」

「この本は母の形見みたいなもので、とある少女から譲り受けたもので、どんな力を秘めているのか、まだではわからないけど、大切な本だ！ それだけは言える」

「わかりました。では、カレナに会いに行きましょう。教会までの道はもう覚えましたが」

「ああ、完璧だ。任せとけ」

教会・食堂。

「貴方達にはアキバに行ってもらうわ。そこで、萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルの調査を行ってほしいです」

「萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルですか？ それと神狩りとどんな因果関係があるんですか」

「コスプレ美少女に神を奪われたという報告がたくさんきているわ。なんでもアルネシア神を崇拜する人が激減して堕ちた神が大量発生しているらしいわ、原因は不明なんです」

（神とは信仰心の塊だ。人が神を信じなくなってしまうては、神はこの世界に存在することができない。神が奪われるということは、信仰心を奪われると言うことになる。信仰心を失ったものは、生きる気力を失い廃人になると聞いたことがる。それでもし死人がであれば堕ち神が生まれる。堕ち神とは信仰心では萌えという感情を喰らいこの世界に存在することができらしい。堕ち神が増えるという

ことは、また暴動が起こり戦争が起こるということを意味していた)
「なるほど、それは一刻も早く原因を究明しなければいけませんね」
「ええ、確かに興味深いわ。もしアレが関わっているとしたら」
「神の石によって生み出された自立型人形か？ 確かにその可能性はあるな」

「時間が惜しいわ。もたもたしてないで、秋葉原に行きましょう」
「その前に一度部屋に戻ってみて。シリウス神父からあなた宛てに荷物が届いているんです？」
「きつと役に立つはずですから」

「はい、わかりました。では一度部屋に戻りますね、いくぞスピカ」

「ええ、私はここで待つてるわよ、準備ができたら声をかけて」

「わかったよ、独りで戻るよ。大人しくまってるんだぞ、いいな」
「はい」

宿舎・自室。

「え」と、神父からの荷物はこれか？ 中身はエロゲー、アキバの地図に、怪しげな魔術書。あとはケイタイ、ノートパソコンにリュック。それから意味不明なガラクタがたくさんか」

ノートPCもあること出しネットで調べて見るか？ 頭に埋め込まれたIDチップを利用することで電話線を介さないで、ネットに接続することができる。しかも無料。

検索ワードは萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルでよしと。

えくと約三十九万六千件か？ 意外と多いな。某掲示板だけざっと目を通しておくか？

なるほど神は無理やり奪っているみたいだな、死者も数人でているみたいだ。被害者の数も百人を超えているみたいだな。このままほつとくと大変なことになりそうだな。

しかしこんなことができるのは教会の人間しか、考えられないけど――系が全くわからない。それに焰の言っていた堕ち神を根絶やし作戦というのも気になる。もしかしたらアイツが一枚噛んでい

るのかもしれないが、確証がない段階では何とも言えない。まあ調べるのはこんぐらいにしておくか？ パソコンを閉じ。ケイタイはズボンのポケットにしまい。エロゲーに地図と始まりの書はリュックに入れて、持って行くのはこれくらいかな。よし準備もできたし教会に戻るか。早く戻らないとスピカに怒られるからな。

教会に戻って見ると、白いセーラー服を着た少女がいた。

襟と袖口に紺色の三本が入っており、胸元のスカーフと下を合わせるスカートも紺で統一されてある。三つ折り白ソックスもあいつて鼻血を出しそうになった。

自然な美しさ。素朴で家庭的な安心感をかもしだす、和心だった。「スピカちゃん可愛いでしょ！ さすがにあの格好じゃ目立つからね、着替えさせたの」

（まあ、確かにあの軍服で街を歩いたら目立つよな）

「あとこれ——秋葉原で起こっている事件の詳しい資料よ。事件解決のために使って」

「ありがとうございます」

小麦色の封筒を受け取り、無くさないようにリュックにしまっておくことにした。

「あんまりジロジロ見るな、バカ」

「その服。超似合ってるじゃ、めっちゃくちゃ可愛いよ」

「そうか、まあ悪い気はしないな。でも私には少し可愛過ぎないか」

「そんなことないわ！ 同性の私から見ても綺麗だと感じるもの」

「でもこの格好で外を歩くのは、恥ずかしい」

（何故？ 夏服なんだ！ 今は冬だぞとツツコミを入れたいのに、言うタイミングがわからない。二人ともそのことに触れようとしていない。このまま外に出れば確実に目立つ）

「それは困ったわね。どうしましょう」

「あ、あのちょっといいですか？ その服装で外に出るのは止めた方がいいと俺も思います」

「やっぱり変か？ 外に出たら笑われるか？」

「全然変じゃないよ、すーんごく似合ってるけど——」

「けど何だ。はつきり言ってくれ、頼む」

「それ夏服だよね。真冬に着てたら、多分目立つと思うだよね」

「そうなのか？ これは夏服なのか」

（えっ！ そこ、そこを訊くの？ どう見ても夏服だよね。生地が薄いし、半袖だし。間違いなく夏服だよね）

シスターに助けを持ってみるが、微笑んでるだけで何もしてくれない。

この人わかってやってる。絶対楽しんでる。

「まあ、なんだ……。露出が多い服は夏で、少ないのが冬服だ。覚えておけ」

「なるほど、露出が少ない服を着ればいいだな。じゃあ着替える必要なかったな」

「軍服もマズイ、というか、目立つ。そうだ！ トレンチコートを着ればいいよ。よし、それがいい」

「おお！ そうか、コートを着ればいいのか。カレハはトレンチコートを貸してくれ」

「ええ。いいわよ」

「これで完璧だな」

セーラー服の上に紺のコートを羽織ったスピカが自信満々に言う。

「秋葉原を歩いても目立たないはずだ」

「ところ、お前は準備できたのか」

「OK」

「じゃあ、行くか」

第12話 伝説のハッカー

アキバ・裏路地（ジャンク通り）

資料に書かれた事件現場に来ている。スピカに普通の女子高校生というものを一通り教えてあげたが、大半はウソである。なぜならば俺が知らないからだ。まあ大丈夫だろう。

「ここが事件現場か？ 特に変わったところはないな」

「魔力の残留を感じる、あなたは何も感じなのですか」

「そう言われてもな、わからないよ。どんな感じだよ」

「形容しがたいですね、まあわからないならいいのよ。ここで何者かが、異能を使ったのは、まず間違いないようです」

「奴等が関わっているのか」

「その可能性は高いわね」

「お前は奴等の居場所とかわかるのか」

「魔力は感じないはこの辺りにはいないみたいなのよ」

「近づけばわかるのか」

「ええ、たぶんね」

「じゃあ、まずは情報収集と行きますか」

「ええ、それしかないみたいね」

シスターカレハから貰った資料には大したことがかかれてなかった。

事件現場と被害者の数。他には目ぼしい情報はなかった。

廃ビル、そこに伝説のハッカーいる。

仁科芳雄博士の優れた遺伝子を引き継いだ男。

強固なセキュリティも通用しない、世界の何処へでも潜入し情報を引き出すことができる。金では決して動かないが、女には弱いという噂。

アキバの都市伝説の一つ。

「その伝説のハッカーに会いに行くのか？ 場所はわかっているんだろうな」

「ああ、俺のマブダチだからな。普段はジャンク屋で働いているんだ」

「お前の友達ということは……変態なのか？ 同類なんですね、キモイですね」

「奴は確かに女好きだが、大丈夫だ！ 俺以上に二次元信者だから、三次元の女は安全だと思う」

「お前以上なのですか？ それはいろいろと心配ですね。やはりここは別行動にするべきだと思います、お前はその友達から情報を聞き出すのよ、私は別ルートから調べるわ」

「え……スピカも一緒に行こうよ、きつと楽しいよ」

「イ……ヤ……なの」

「何でだよ。伝説のハッカーに会いたくないのかよ。そしたらお前のマスターのことともわかるかもしれないだろう。会いたくないのか」

「会いたい……でも……変態の所に行くのわ嫌なんです。だからお前一人で行け、変態」

「わかった、待ち合わせ場所は、ラジオ会館の前でいいな。あと時間十七時」

「了解なのよ」

この女は一貫性なく、掴みどころのない性格だ。語尾もころころ変わるし、どんなキャラ設定になっているのか読めない女だ。

廃棄された雑居ビルは駅の裏手にある。街の灯りも届かない、闇の中にそれはある。

そこは昔、最先端技術を扱っていたが、現在は法律改正によって、禁止区に指定されている。

そのため、立ち入り禁止エリアであるが——潜入は至って簡単である。なぜならば東京自体が隔離され立ち入りを制限されているか

らだ。

「ひさしぶりに来たが！　とても人が住める場所とは思えない」
部屋の一角からぼんやりと光が漏れている。

「白山、俺だ！　翼だ！　お前に訊きたいことがあって来た」

ブラックカーディガンに迷彩ミリタリーカーゴを着た男が姿を現した。どう見ても中年オジサンである。不精髭ぶしようひげにぼさぼさな頭。近いうちにハゲるな。お腹はもちろん出ている。相変わらず運動とかやってないんだろうな。引きこもって機械とかいじってるんだろうな。

「おお、来たか、待ってたぞ。立ち話も何だ、まあ中に入れ」

「ああ、そうだな」

部屋の中には所狭しと機械が置いてある。何の機械なのかはわからない。

「電気とか通ってるだよな、普通に。よく取り壊されなかった」

「コネだな。無理言って親父に頼んだからな」

「お前の父って確か『白山純』だよな。スカイブルーネット、バージョニカロスの開発者にして、ネット魔術師と称される男だよな」
ターミエーターを観賞中にひらめいたと言われている。自我を持ったコンピューターで、東京全土を監視するために作られた。東京から出ようとする者を瞬時に殺し、手段は選ばないため巻き込まれる人が多いと聞く。

また、政治、経済、宗教、世界構造を裏から操っているという噂もある。その力は東京だけでなく世界をも監視しているといわれている。その実態のほとんどがブラックボックスで、開発者の白山純にしかわからないプログラムで作られている。ネットの魔術師と揶揄されるだけあって、彼の登場でインターネットは格段に進化した。世界最大のSNS・セクリッド。電話回線なしの高速インターネット。情報処理スピードとセキュリティが格段に上がった。

スカイブルーネット、バージョニカロス。謎の多いコンピューターだ。

「そうだけど。世間が騒ぐほど凄い男じゃないぜ」

「まあ、いいけど。そんなにココが気に入っているのか」

「秘密基地っぽくて、好きなんだココ」

「そんなもんか？ あと前来た時より機械類増えてないか」

足の踏み場もないぐらいに所々に機械が設置されていた。ここで一体何が行われているのだろうか？ パソコンに繋がれた無数のケーブルはなんだ。巨大なモニターみたいなものには、よくわからない数字の羅列が表示されてる、なにかのプログラムか？ 怪しげな研究所を連想させるものばかりある。

「俺にもいろいろとあったからな」

「おい、どうした。何でいきなり泣くだ」

目尻に涙を浮かび、突然泣きだした。今の話のどこらへん涙腺にふれたというのだろうか？ まったく状況が飲み込めない俺を見て、白山が話し始める。

「この世からお前の存在が消えたかと思ったんだよ、本当に。捜したんだぞ、携帯に電話しても繋がらない。お前の家にいたら、ウチには子供はいませんか、わけのわからないこと言われたしな。いくら俺でも、お手上げで、どうしようか？ 困っている時にお前から連絡があつたわけだ」

「存在の痕跡を消したとか……言つたような気がしたな。よくお前は覚えていたな」

（白山の話を聞いて、啞然とした俺は軽く呟くことしかできなかった。手足も少し震えていた）

「選ばれた存在だからな、俺には特殊な力があるだ」

「どんな力だ」

「それはな、機械とリンクする力だ」

「おお！ 地味な力だ」

「地味じゃないこれは凄い力だ」

「どんな凄いことができるだ」

「ハッキングができる、あと機械と会話できる」

「ウイルスを流すとか機械類を操るとか出来ないのか」

「出来ない。だがバレずに情報を盗むならできる」

「相手に攻撃はできないのか」

「出来ない、やれば俺が死ぬ」

（ほんとうに意味のない能力だな。そんな力を手に入れる前から凄腕のハッカーだったのに……逆にできることが減ったじゃないか？情報を盗むだけの能力でなんだよ。しょぼすぎだろう、機械と話せるからなんだよ。よくわかんない能力を手に入れたもんだ。まあ、人のことは言えないけどな）

「で、どうやってその力を手に入れた」

「それは教えられない。でも、今貴様ならおうよその検討はついていないじゃないのか」

「雑談はこれくらいにして、本題に入るぞ。アキバで起こっている神狩りを調べているだが、知っていることがあたら教えてほしい」

「今、ネット上で人気のあの事件か。ああ、知ってるぜ」

「やっぱり知っていたか」

「だが、ただで教えるわけにはいかない、条件がある」

「何だ、俺に出来ることなら何で言ってくれ」

「お前の自立型人形をココに連れてくることだ」

「それが条件か？」

「ああ、そうだ。簡単だろう」

「貴様何を企んでいる」

「企む何て人聞き悪いこと言うなよ。興味があるただだよ、お前が選んだおもちゃにね」

「その条件は飲めないな、スピカはココには連れてこない」

「なぜだ！理解できない、それでは情報は手に入らないぞ、いいのか」

「ああ、それで構わない。一人で情報を集める、白山、お前の力は

借りない」

「本気で言っているのか？ お前一人で何ができる」

「何だってできるさ、昔の俺とは違うだから」

「そうか、わかった。今度会った時は敵同士だな」

「ああ、そうなるな、じゃあ俺はもう行くよ」

第13話 魔女の願い。それは――

翼が去った後、白山はあの日のことを思い出していた。

翼と神中と別れた俺は、いつものメイド喫茶で一休みしたあとの帰り道、アイツと出会った。

駅の裏手の廃墟に入った時、血を流した人形にしか見ない女性を発見した。

国籍はよくわからないが、顔だちからすると外国人のようだ。まだ若い。十代の顔立ちだ。足元には漆黒の剣が落ちている。この少女の持ち物でまず間違いないだろう。

短く切りそろえられた黒い髪に、黒いドレスを着た女性は何者だろうか。暗殺者みたいな怪しい服装……アキバでいた何が起きているんだ。

なんだか非常に、シニールな光景だなと内心で嘆きながら、少女の安否を確認するために近づく。

少女の身体には無数の傷があり、とくに酷いのは左肩から右わき腹までの斜めに付いた、切り傷だ。たぶん誰かに襲われたのだろう。幸い息はしているので生きといることだけはわかる。とりあえず、止血だけして、一旦家に連れ行こう。

なぜ救急車を呼ばないのか、医者が嫌いだからだ。

自室に戻り応急措置終わえ、我ながら完璧だと自負するほどのきだった。

あとは起きるのを待たただけだ。包帯でぐるぐる巻きにされた、ベッドの上でぐっすり眠る少女は見えて頷いた。

今居るのは研究所とは別の部屋である。研究所は五階にあり、今は二階の住居スペースに居る。この建物は十五階だてになっており、いろんな改造がどこされている。防犯対策にはぬかりはない。

「ここは何処だ」

「起きたか？　ここは俺の隠れ家だ。俺はキミの味方だ」

ベッドから起き上がりおうとするから、俺はとっさに叫んだ。

「コラ、動くな傷が開くだろう。もうしばらく安静にしている」

「血、貴様の血をよこせ、血がアレばこの程度の傷すぐに治る」

「吸血鬼か？ 驚いた、実在していたとは」

「吸血鬼などという低俗なモノと一緒にするな、殺されたいのか？

私は生粋の魔女カサンドラだ。覚えとけ」

「魔女？ 今時魔女はないな、俺の血で悪魔でも喚起するのか」

「確かに私は数体の上級悪魔と契約をしている。魔女だからな、だがここで喚起はしない。そんなことよりも早く血をよこせ……」

ヤバイ、傷がまた開きはじめている、包帯が真っ赤に染まっている。なんておびたさい、出血量だ。顔色も悪くなっている、このままほっておくのはマズイ。

「血を飲めば本当に傷が治るんだな。その後殺したりとかしないよな」

「命の恩字を殺すなど、そんな無粋なことはしない、私は高貴な人間だからな」

（何処をどう見ても人間には見えないが……たぶん人間なんだろう）

「わかった、早くしろ。だができるだけ優しく痛くするな」

「いちいちとうるさい男だ」

右中指を指し出して血を吸わせる。チクとする程度で想像していたよりも痛くなかった。

ただ、少女に指を吸われるというのはなんともエロいものだ。思わず顔を赤くしてしまった。

「美味しい、貴様。私と同じ高貴な人間だな」

「しがないジャンク屋ですけど、何か？」

「イヤ、何でもない。助かったとりあえず、礼を言うを。名前を何と言つ」

ベッドから起き上がり、俺の方を向いて頭を下げる。何度見ても美しい女性だと思う。

「白山辰五郎だ、覚えとけ」

「シラヤマタツゴロウか？ ふつ！ 変な名前だな」

（イントネーションが少し違うが気にしないでおう）

「今時辰五郎はないよな、確かに無いよな。何でも新門辰五郎しんもん たつごろうにあやかっているだしよ」

「新門辰五郎か？ 聞き覚えのない名前だ」

「江戸町火消しの元締だったらしよ。詳しくは知らないけど……まあその先祖らしいだ」

「なるほどやっぱり、高貴な生まれだったらしいな」

「どこにでもジャンク屋だし、親はちよつと有名人だど、高貴とか全然ないと思う」

「高貴な人間ほどそれを誇らないものだ。気にいった力を貸そう。私に何か訊きたいことはあるか？」

「今、アキバで何が起きているんだ、知っていることを全て教えてくれ」

「アルネシア杯、それは己が望みをかけた戦いであり、イヴという少女を巡る戦い。ここ秋葉原だけでなく、世界中で自立型人形同士の戦いが行われているわ。世界規模のバトル・ロワイアルの開催。

ここ東京でも行われて……ぐはっ……」

「大丈夫か？ とりあえず横になれ」

しゃべってる途中で吐血したやがった、まだ完全に治ってなかったみたいだ。俺としたことが油断した。カサンドラをベッドに寝かせ、手を優しく握りしめる。

「思った以上に傷が深いみたいね。体内にあるナノマシンもほとんど壊されて、治癒力が大分低下しているみたいね」

薄笑いを浮かべ、弱々しい声で言うてくるので、握る手に力が入る。目尻が少し潤んできた。今にも泣きそうな面になる。

「キミを助ける方法はないのか？」

「一つだけあるわ、魔女との契約。契約することで体内のナノマシンも修復されるはずよ。

でも魔女との契約は命掛けのモノ。失敗すれば確実に死にはない。

それでもやるの？」

「魔女との契約、良い響きだ。もちろん契約するさ」

「じゃあ、まず魔法円を描きなさい」

「描き方がわからないな」

「私が教えてあげるわ」

「中央の魔法円を直径9フィート（一・八m）で作る」

「ああ」

「外の円と内の円の間には、赤の蛇を描く。

この蛇頭から尻尾に向かって、ギリシャ語の悪魔の名を書く。

中心の正方形は、紫に近い鶯色で塗られ、中には“chaos”
”と書いておいて。

四つの六芒星形は、赤色で塗る。

三角の部分には、“MAGICA”と一文字ずつ書く。

中央の六角形には、木馬を緑で描く。

円の外の五芒星形は、赤で塗る。三角の部分には。“Te
grammatom”と分かち書きする。

中央の五角形には、木馬を紫に近い鶯色塗る。

全ての文字を黒で書く。これで完成だ」

「出来た。疲れた」

「あとは魔法円の中心に立ち、契約の言葉を承諾するだけです」

「汝、我との契約を望む者よ、我は汝との契約を望む。汝は強き者、
誇り高き者。

さあ、私の名前呼べ。それで契約は完了する」

「カサンドラ」

叫び声とともに闇が現れた。闇は俺を飲み込もうとするが、魔法
円に阻まれて近づくことができないみたいだ。

（助かった）

「魔法円は正確に描けていたみたいだな。今からその対処法を教

えてやる」

「それは助かる早く教えてくれ」

「自分の信じる正義をぶつける。そいつは正義とか、愛とかに弱いからな」

「俺の信じる正義か？ それは萌だ。萌えこそが正義だ。くらえ萌え萌えパンチ」

拳が赤く光り、鋭くパンチをくりだし、闇を抜いおとす。

「何て強い思いの力だ。あんなにも強く輝いている」

「ふう〜終わったか」

「ああ、無事契約は結ばれた。少し休ませてもらう、起きたら話の続きをしよう」

「俺もくたくただ。今日はもう晚いし、話はまた明日だな。おやすみ」

翌朝。

「おはよう、よく眠れたか」

「おかげさまでゆくり休むことができました。ありがとうございませう」

「それは良かったでは、昨日の続きを聞かせてくれないか」

ベッドからを起こし、俺は向かい側に椅子を置き、そこに腰をかける。

「私にも叶えたことがあるから。強い魔力を辿ってここに来たのです」

「なるほど、そうまでして叶えたい願いつて何だ？」

「大切な人を冥界から取り戻すこと。そのために私は悪魔と契約して魔女になりました。でもそれだけでは彼を生き返らせることはできませんでした。だからこの大会に参加したのです」

「そうだったのか？ ところでアルネシア杯とは主催者は誰だ。どういった目的でこの大会は開かれた。その系がまるで読めない。自立型人形同士で戦わせて何を企んでいる」

「主催は教会の教皇ダフネで、その目的は唯一絶対神を創ることかな。そのため私達を戦わせようとしている。私達は元々そのために生み出された存在だから」

「教会、あの教会か？ 世界規模のテロリスト集団。弱者救済を掲げているが、その実やっていることはテロ紛いの武力介入。そのために多くの死者を出している。奴等が通ったあとには、草木も生えないという伝説の殺し屋集団か？ 神の名のもとに戦っているが、奴等が信じる神はどうせ破壊神なんだろう」

「教会が信仰しているは、アルネシア。異世界の神で、この地球に平和をもたらす神だと言われています。そして神の声を聞くことができるが、巫女であるイヴです。そのカリスマ性でどんどん信者を増やしていると聞き及んでいます」

「なるほど。ところで、そのイヴという巫女は何者なんだ。俺様の情報網を持っけてしても、その実体を把握しきれていない。その素顔を見た者は、堕ち神に心を隷属すると噂も流れているほどの謎の多い人物だ」

「彼女とはよくわからないわ。ただ言えるのは、彼女が人間ではないということ。どちらかと言えば私達に近い存在ね。彼女もまた我欲の塊よ、聖女には程遠い存在ね」

「しかし、お前達は彼女を巡って戦っているんだろう。彼女にはそれだけの価値がある、違うか。だからこそ教会も彼女の力を利用している。そうなんだろう」

「その解釈で間違いないわ。そしてその力を十二分に引き出すには、久遠の魔導具の力が必要だ。奴にはパンドラから引き継いだ力があるはずだ。統一戦争で共に戦った数少ない仲間だからな」

「だから、彼女を追いかけて、極東の島国まで来たのか？ カサンドラ」

「その通りですわ、彼女は鍵ですもの。森羅万象へ続く鍵。彼女の力無くして、私の願いは叶えられませんか。手傷は負わされましたが、おかげでわかったことがありますわ。彼女と一緒にいた、変

態顔の人間方がパンドラの力を引き継ぎました」

「それは一体どういうことだ」

「私にも詳しい経緯まではわかりませんが。彼から感じたのは、紛れもないイヴの力です。わたしにもイヴの血が流れているからわかります。あれは間違いない始まりの少女の力です。あと微かですが、契約の際に、久遠の魔導具からも同じモノを感じましたわ」

「わかった、それがほんとなら、俺も協力しよう。その人間の特徴を教えてください」

「高校生か？ 大学生ぐらいで、よれよれのシャツによれたズボン。見るからに不衛生な格好で、顔は気持ち悪くて良く覚えてないというか、思い出したくない。とにかく生理的に受け付けない顔で……エロゲーを剣に変えるというキモイ能力を使うのが特徴ですわ」

「もしかしたら、こんな顔じゃなかったかな？」

女性にそこまで言わせる男と言ったら、コイツしか、思い当たらない。翼の写真を見せることにした。他にもキモオタはたくさんいるけどね。コイツを発見した場所も考慮するとね。やっぱりアイツしか思い当たらないよ。

「コイツだ！ この気持ち悪い顔だ、間違いない。久遠の魔導具と一緒にいった人間です」

「やっぱり翼か？ ちょっと携帯に電話して見るよ」

「おかしいな繋がらない。ちょっと家の方まで行ってくるから、ここで待ってくれ」

「たぶん無駄でしょう。行くなら止めませんが」

「よくわからないが、翼を連れてすぐに戻って来るからな。大人しく待ってろ」

数時間で帰宅する。

「あのやろっ、どこにもいなかった。原因はわからないが、何者かに存在自体が消去されたみたいだ」

「やはり組織の手が回っていたのですね？ 相変わらず仕事が早い

ですこと、では、彼を見つけ出すのはもはや不可能ということですか」

「ああ。いくら俺様でも痕跡が全くないじゃ、捜しようがない」

回想終わり。まあダ翼には会えたけど肝心のスピカちゃんには会えなかったのは残念だな。でも発信器と盗聴器はうまく仕掛けることができた。

発信器からでる電波を見れば奴が何処に居るのかすぐにわかる

第14話 アポカリプス十二使徒

さてと、これからどうするかな？ スピカとの待ち合わせまでは、まだ時間があるし。

そこら辺で聞き込みでもするか？ 足でかせぐしかないからな。

ふう〜疲れた。なかなか有益な情報は手に入らないな。
そろそろ待ち合わせの時間だな。集合場所に向かうか？

ラジオ会館の前。

「遅いぞ！ で、何か情報は得られたか？」

「特に収穫はないな、ごめん」

「まあ、そう簡単には見つからないか？ 気にするな」

「ありがとう。お腹もすいたし、なにか食べに行くぜ。ところで好き嫌いとかあるか」

「特にないな。好きなモノも嫌いなモノ」

「それはいかな。好きな食べ物は必要だぞ。キャラ的」

「そうなのか」

「そうだ。シャディのメロンパンとかルナのピザとかな。好きな食べモノは必要なんだよ。わかるか」

「そうゆうものなのか？」

「ああ、俺がオススメの店を紹介してやるきつと氣にいるはずだ」

「てっ、何でメイド喫茶まで来てオムライス食べてだ」

「オムレツの方がよかったか？」

「そう言う問題じゃない、なんでメイド喫茶だと、訊いているだ」
「もちろん。お前のキャラ作りのためだ。」

あと情報収集ためだよ。ここのメイドは以外と情報通なだぞ。知らないのか」

「知るか？ 貴様はこういうふざけた店によく来るか」

「常連だな。お前も気に入ったのなら、また連れて来てやるよ」

ここエンジェルキャッツシンフォニーは、赤いリボンに白を基調としたメイド服で、天使の翼とネコ耳が特徴のかわいいメイドがいる店です。

店内は明るく清潔感があり、くつろげる空間になっており東京では一、二を争う席数をほこっています。

また、スイーツメニューも充実で壁にはメイドランキングが書かれています。

「はあ……契約する相手を間違えた」

「そこでため息くな、幸せが逃げるぞ。それにこのオムライは美味しいと思うぞ」

「まあいいわ、済んだことだし、あなたの優しさは知っているから確かに美味しいわね。」

でも、この空気に馴れそうにないわ」

「独得の雰囲気はあるよな。食事しながら情報収集しますか」

店の奥にステージが設置されており、その上で数名のメイドがヴァイオリンやらチェロなどを弾きながら、リズムに合わせて身体を軽やかに揺らしている。

食事そっこのけで群がる男たち、彼等の目的はカンナギルナの演奏を聴くことなのだ。

金髪縦ロールに一番メイド服を可愛く着こなしているフランス人形みたいな少女。ヴァイオリンを顎に添えて演奏している彼女こそ、カンナギルナ。エンジェルキャッツシンフォニーのナンバーワン、メイドにして、声優に歌手となんでもこなせる、スーパースタイルなんだ。でもスピカはこの演奏が嫌いみたいで、さっきから不機嫌な顔をしている。

食事を終え、メイド喫茶を出て路地裏に向かうことにした。

「あのメイドモドキが言ってたことは信用できるか」

「行ってみればわかるだろう」

（まさか、カンナギルナと話ができるとは思わなかったぜ。超うれしいぜ、スピカはふしぎな顔していたな。エンフォニーに入ってから、元気なかったからな）

夜の十頃に路地裏で面白いモノが見られると言われた。面白いものがなんなのは、わからないけど、たぶん事件に関係したことなどだろう。

「おう、来たか。待っていたぞ、翼」

ブラックカーディガンに迷彩ミリタリーカーゴを着た男と黒いパーティードレスを着込んだ女性が立っていた。男の方が俺に気安く声をかけてくる。暗がりによく顔がわからないので男のほうへ歩み寄る。そして驚きの表情を浮かべ叫ぶ。

「貴様がなぜここにいます」

「俺が呼んだからに決まてるだろう」

「アイツはお前の知り合いか」

服の袖を引っ張りながら、複雑そうな顔をして聞いてくる。スピカは意外と人見知りが激しいのかもしれない。というか男性が苦手なと思う。まあ決して珍しいことじゃあない。男性恐怖症の女性なんてしこたまいる。俺は屈んでスピカに視線を合わせて、手を強く握り締めて優しく言う。

「ああ。あの怪しげな男が伝説のハッカーだ」

「変態仲間か？」

軽く頷く、スピカの顔は思いつきりひきつっていた。死だ魚の様なとても冷たい目で蔑んでくるので、咄嗟に目をそむけた。精神的ダメージが大きい。

（うわあ、完全に引かれた。俺の好感度どんどん落ちてる。このままではただの変態で終わってしまう）

「久遠の魔導具というのはお前だな、相棒が話したいことがあるみたいだ。出っ来て来い、カサンドラ」

「ふふふふ、ひさしぶりにね。また会えたわね。とても嬉しいわ」

無機質な声とともに黒いパーティードレスを着た女性が姿を現す。

腰に漆黒を携え、両手に黒い手袋をした、十代前後の女性。

「あなたも契約したのね。それで私に何の用かしら。深淵の魔女さん」

「教会の奴等を倒すために貸して頂けないかしら。もちろん、それ相応の対価は支払うわよ。どうかしら？」

不敵な笑みを全開に浮かべ訊くスピカに対してカサンドラも負けずと威風堂々と言う。

二人ともバチバチと火花を散らしていた。こいつら本当に仲がいんだなと心底思った。

「教会つて、統一宗教のことだよな。奴等は何者なんだ。なぜ自立^{アルネ}型人形^{シアドール}同士を戦わせる。教会は神狩り事件に参与しているのか？そもそもお前たはなぜ、教会を潰そうとしている。俺にはわからないよ」

「何も聞いていないのか？ 教会ことも、アルネシア杯のことも、神狩りことも、なら俺が教えてやろうか」

「いいえ、私の口から話させて。いいでしょ、伝説のハッカーさん」

「俺は別に構わないけどな」

「ありがとう。ねえ、翼。メツリサ・リナルドを思えていますか？」

「ああ」

白山に礼を言い、スピカが優しい口ぶりで話し始める。空気がガラリと変わったのがわかる。ここは余計なツツコミは入れないで真剣に聞くことにした。

「彼女は教会に所属している魔法術師です。そして彼女の目的は、我々アルネシアドールを根絶やしにすることなのですわ。そのためには手段を選ばない、冷酷無比な集団です。元々は私達の組織の一員でしたが、組織が大きくなると離反者もでるもんなです。悲しいことに」

「あなた達の組織は理念が甘いですから。吐き気をもよおすぐらいの絵空事なんですもの。反逆者が出て当然ですわ」

話に割り込んできたカサンドラは蔑むような顔をしていた。スピカは歯を食いしばり耐えている姿は、見てるこちらまで辛くなってきただので、我慢できず尋ねてしまった。

「どんな理念で動いているだ。スピカ」

「私も詳しくは知らないけど。確か世界の監視だったかしら」

「監視。具体的にどんなことをするだ」

「秩序を乱した者に神の言葉を伝え、更生させるんだって。どんな罪人も殺さないみたいよ。でも基本には傍観者みたいなものね。神のお告げがなければ何もしないから」

「じゃあ目の前で犯罪が起きてても、神の予言みたいなのがなかったら見殺しにするか」

「ええ、するわ。ヒトが何人死のうと全然気にしないからね。神の意志と言うだけで何もしないの」

淡々と無表情で質問に答えるスピカ。それを聞いていて俺はふつふつと怒りが湧いてきた。これだから宗教は嫌いなんだよ。俺は神を絶対に信じてない、そんな存在を俺は認めない。神に関わるモノは全てこの手で破壊してやる。それが俺を救ってくれたヤツとの誓いだ。神殺しのためにも、始まり書は必ず使いこなせるようになる。それが彼女との誓いを果たすことになる。

「身内が死のうと奴等は何もしない。そんなふざけた連中を倒すために力を貸せと言っているのが、教会だ」

「ああ、確かにふざけた組織だな、白山。それじゃあ、離反者くらいでるよ。ヒトの命なんだと思っていやがるだ、気に入らねえ」

（まあ、その組織の一員なんだけどな、俺。でもそこまで酷い組織だとは思わなかったぜ）

「教会に寝返えた者も多くいるわ。お前達が捜している人も、その一人ですわ」

「やはり、神狩りは教会が関与していたのか？ でもなぜ教会が神を狩る必要がある。もともと教会が生み出したモノだろう」

「ええ、そうです。神とは教会が生み出したモノです。より正確に

言うならば統一戦争の時、パンドラが生み出した存在です。しかし教会は一枚岩ではありません。みながイヴを崇拝してアルネシア神を信じているわけではありません。アレは元々異世界の神ですからね。教会の多く人はアポカリプスと呼ばれる人を指示しています。イヴの司る神は、日本の九十九神つくもがみに近いものだと言われています。アポカリプスの司る神は対極存在だと言われています」

「つまりどうということだ。なぜ神狩りが起こる。神同士で争っているとも言つのか」

ハマルティア

アポリュトローシス

「他の神を信仰することは罪で、神狩りは解放を意味します。つまり人間同士の醜い争いですね。堕ち神という存在はご存知ですか？アレはイヴが自分の身を護るために生み出した存在です。世界を滅ぶすモノでも、真理の霊王に対抗するモノでもありません。イヴ自身は争いを望んでません。しかし世界は、彼女の意味に反し争いを求めるのです。アポカリプスの使徒は私の達・アルネシアドールと神狩りが世界の秩序を護ることだと信じています」

「バカげた話ね。教会のゴミ共が考えることは私にはわからないわでもね、イヴを悲しませる奴は許さない。アルネシア杯に参加したのはイヴが助けを求めていたからなの」

「スピカちゃんはいヴのことを大切に思っているだね。でもそれは可笑しな話だ。だってスピカちゃん長き眠りから目覚めた、ばかりなんだろう。いつアネシア杯のことを知った。いつどこでイヴと出会った。キミの言っていることは信憑性に欠けることだらけだ」

「確かそれは俺も思っていた。コイツには謎が多いし、肝心なことは何も話してくれていない。スピカ、お前は一体何を隠している。なぜ嘘をつくんだ」

「私は言うことは全て真実、嘘偽りない言葉。それが理解できないとはつくづく愚かな人間達ね。まあいいわ、わかりやすく説明してさしあげるわ。彼女とは夢の中で知り合ったの？そして彼女からアルネシア杯のことを聞いたのよ、おわかりになりました」

「えーと、つまりどうということなんだ。カサンドラ」

「ええ、私達自立方人形は彼女を通じてアルネシア杯のことを知りました。彼女が助けを求めているもの事実です。ですが、私は彼女にお会いしたことはありません。そのお声を聞いたことしかありません。ですから私は己のために戦っています」

「なるほどね。今の話でアルネシア杯と神狩りの関係性もたいぶわかってきたぞ、翼。世界の秩序を乱す者を倒し、あるべき方向へ導くことが自分にかせられた使命だと思っているがアポカリプスの使徒で神狩りの犯人。アルネシア杯とは唯一絶対神を創ることが目的なんだ。アポカリプスの使徒とは、イヴを倒すことによって証明しようとしているだよ。真理の霊王こそ絶対神だと言うことを、だからイヴは堕ち神なつて者を生み出し教会を潰そうとした。アルネシア杯とは十年以上前から行なわれていたんだよ」

「全く愚かな話ですわ、滑稽ですわ。どちらとも、救いようのないバカですわ。」

その話は表ざたにはなつてませんが、内輪もめですわね。アポカリプス十二使徒は、禁断の知識や技術を用いて、時には非合法な行為に手を染めることも辞さない、卑劣極まる外道な集団ですね。

人々を惑わし、歪める邪悪な存在を討ち滅ぼすのが使命だと言っています、大ウソですわ。自分の正義をひたすら貫く、殺戮集団ですわ」

（アポカリプス十二使徒との言うのが気になる。もしかたら焰もそいつらと関わりがあるのかもしれない。奴はアルネシア神から解放する力を持っているらしいかな）

「堕ち神は萌えという感情を喰わない。堕ち神が喰うのは、人の絶望、嘆きといった負の感情だ。萌えという感情を喰らうのは真理の霊王だ。真理の霊王は萌え感情を知りたいのだろう、だから喰っている。俺はそう考えている」

「そうなのか？ 全然知らなかった。堕ち神は萌えを喰らう存在だと思っていたが違ったのか？ でもなぜ堕ち神に喰われた者はイヴに隷属するという噂が流れいる」

「俺の仮説なんだがな、堕ち神は負の感情がより集まってできたもので、それに喰われると隷属するというのは本当だろう。しかし一般人は襲わないはずだ、攻撃するのはアポカリプス信者だけだろう。堕ち神とは自己防衛の手段なんだろうと考えている」

「お前の言うことは元もだし、信賴にあたいたいと思っている。堕ち神のことは俺も調べて見るつもりだ。やっぱりお前はいい奴だな、白山。さすが伝説ハッカーだぜ」

「スピカ、あなたの力が必要なんですわ。今の教会は内部紛争中です。攻め込むなら今しかありません。この機を逃すわけには行きません。あなただって教会を憎んでいるでしょ。それにあなたのマスターも教会に捕えられているはずよ」

「お断りですわ。私はあなたを信用してないし、信用するつもりもありません。これ以上話すことはありませんね、いくわよ」

「ああ、わかった」

「ちょっと待ちなさい、話はまだ終わってないわよ」

「いいのか？ 何か叫んでるみたいだけど」

「気にしないでいいわ、どうせ戯言ですから」

「まあお前がそう言うならいいけど、でもまさか白山しらやまのパートナーが、カサンドラだったとは驚いたな」

「私も驚いています。まさかあの子が人間と契約するなんて思いもしなかったから。あんなに人間を嫌ってたのに、こういう心境の變化かしらね」

「対抗策を考えて置かないとな、でも今は、神狩り犯の正体を暴くことが先かな」

「ええ、わかっているわ」

「なら、いいだ」

第15話 修行

白山からなかなか有益な情報を得ることができた。アポカリプス十二使徒について調べることでも何か新しいことがわかるかもしれない。事件を解くヒントにはなるはずだ。

そうと決まったら今日はおとなしくホテルに帰るか？ ぐたくたでもう倒れそうだ。

「ホテルに帰るぞ、スピカ」

目を瞬かせ頬つぺたを強くつねり、これは現実なのかと一生懸命に確かめていた。眼前に広がるが色鮮やかなガーデンに噴水の奥にある豪邸を思わせるホテルがあった。

「本当のこのホテルのなのか？ なんでこんなリゾート地がアキバにあるだ」

「これも組織の力よ。あと一般人にはオフィス街に見えているはずよ」

「だから今まで気付かなかったのか」

「もうぐたくたなの、早く中に入りましようなのよ」

「俺も疲れた、早く休みたい」

「中也凄いな」

塵一つ落ちてない、よく磨かれた床に心落ち着くクラシック音楽が流れていた。

「あまり、キヨロキヨロしないの？ 私達の部屋は二〇一号室みたいよ」

「ごめん、ところで同じ部屋なのか？ 別々じゃなくていいのか」

「問題ないでしょね。それに敵が襲って来た時のことを考えるとね。別々で戦うのは不利よね」

「まあお前がよければ、いんだけどね」

辺りを見渡しながら俺は部屋に向かって歩き出していた。

部屋の中には、質の高い調度類が各所に置かれている。基本装飾、家具はすべて木目のキリリとしたとしたオーク材で作られており、天蓋付きツインベットが設置されていた。意外と広く駆けまわれるには十分な空間がある。防音効果も高いようで静かなものである。

「部屋の中も豪華だな。そして予想以上に広い」

「ここなら思いつきり特訓ができるね。みっちり鍛えてあげるの」
「何の話だ。特訓って何だよ」

「特訓って言うのわね、特別訓練の略なのよ」

「そんな事は知ってるよ、なんで特訓するんだよ。しかもホテルで」

「あなたが弱いからよ。このままではアルネシア杯で優勝することはできないの。それでは私が困るのよ」

「俺は困らないけどな。お前がどうしても言うなら付き合っつてや
つていい」

「一度その性根を叩き治してやるのよ」

床を蹴り跳びかかってくる。まるでネコみたいな奴だな。

「お前の動きは見え見えなんだよ。そんなに俺を倒せるかよ」
簡単にあしらってしまう。欠伸がでるほど他愛ないことだ。

「血さえあれば、これほど簡単に負けることはなかった」

「負け犬の遠吠えにしか聞こえないぞ！　だが俺達鍛練が必要だな。
お前は身体能力が低すぎだ。俺もお前からもらった力を上手く使え
こなせないでいる」

「案ずるな、血さえ飲めば身体能力は格段にある。死角無しの無敵
状態だ」

「血を飲まなければ最弱だけだな」

「私の愚弄するつもりか」

「イヤ、別に。それでその最強モードはどれくらい持続すんだ」

「一分くらいかな？」

「みじけーもう少し長くないのか」

「無理だ。無敵モードは恐ろしくエネルギーを使うから、それ以上

は体力が持たない」

「もう一度血を飲だら回復するってことはないのか」

「しない。回復にはスリープモードに入る必要がある。無防備になつてしまつからあまりオススメはできない」

「戦闘中の回復は無理か」

「ああ、最短で一時間は掛かるからな」

「基礎体力を強化するしかないな」

「私は兵器だからな特訓とかしても意味ないだけだな。というか、ぶつちやけ、めんどくさい」

「そうか、何かアイテムが必要なのか」

「要らないと思う。マスターはシンクロ率が大切だと言っていたの覚えている」

「つまり絆が大切ということか」

「まあ、そうなるな。私なりに身体能力強化は考えてみるつもりだ。かつたるいが致し方ないか？ お前はあの力を完璧に使えるようにしろ。今のままでは話にならない」

「任せとけ、俺に不可能はない」

と言つても具体的に何をすればいいだ。倒す相手と言つた、練習相手もコーチみたいなのも居ないし、何をどうすればいいのかわからないな。

とりあえずエロゲーを剣に変えてみるか？

リユックから適当にエロゲーを一つ取り出し、ものはためしと剣に変えてみる。

（イメージしろ。強くイメージしろ。最強剣を――剣（き）を）

目の前に現れたのは日本刀だった。どうやら潜在意識というか、直観にさゆつされるらしい。モチーフは戦国。日本刀を持った美少女が活躍するものだった。

（前に出した『短剣』は『忍者モノ』だった気がするな。今回はサムライモノだから日本刀なのか？ だったから普通の学園モノなら何なるんだろう）

疑問に思いリュック中から学園モノを取り出したためしてみることにした。

なんの変哲もない木刀に変わった。ちょっとがっかりした。
(まあ、学生が持つても問題ないモノか？ 剣道部みたいだな)

最高五回。それ以上は変えられないみたいだし、変身時間もエロゲーによってバラバラだ。わからないこと多い能力だ。

「どうだ、実戦で使えそうか」

「まだまだ修行が必要だな」

「そうか！ 私はシャワーを浴びて来るから、今日はここまでにして、くつろいでなさい。あと覗いたら殺すから」

「はい、わかりました」

シャワーの音が聞こえる。もちろん覗きたい気持ちはあるが、その前にいろいろと準備をしなければならぬことがある。

青い髪はしっとりと濡れていて、柑橘系かんきつの甘い香りが俺を魅了し、心臓の鼓動が大きくさせる。バスタオル一枚で出てきたスピカの身体は、赤く蒸気していた。

やっぱりお風呂があがりの女性は艶かしさが格段に上がっている。色っぱ過ぎる。

身体を伝って水滴がポタポタとたれている。なんて潤んだ綺麗な肌をしているだ。

眩しすぎるぜ。おっと本題を忘れるところだったぜ。危ない危ない。スピカに向かつて

「お前に着てもらいたい服があるだ。アキバで買った服なんだけどさ。きつと似合うと思うだよ。着てくれないかな」

「お前にもいろいろと迷惑を掛けているしな、よほど変な服じゃなければ着てやってもいいぞ」

「マジか！ これなんだけど」

紙袋から服を取り出し、スピカに見せる

「なんだ、そのふざけた服わ。そんなもの着れるものか！ 何の攻撃も防げんわ」

「まあお前が、そんなにバスタオル一枚で居たいなら、別に良いけどな」

「やはり貴様の仕業か？ 私の服をどこに隠した。正直に吐けば命だけは助けてやろう。さあ大人しく教えろ、さもなければ殺すぞ」

「汚れてたんで洗っちゃった。てへ」

「可愛く言っても無駄だ。貴様という奴は、もう許さん」

「おっと、暴れると悲惨なことになるぞ。ポロリは恐いぞ。どうする着るのか？ 着ないのか？ どっちだ」

俺の計画に抜かりはない。お風呂を覗きたいのを我慢して準備したのだから、着てもらわなければ困る。まあ、バスタオル一枚のままだもありちゃ、ありだけどね。やっぱり着ておいしいから土下座をした。

「頼む、着てくれ。この通りだ。お願いします」

「わかった、着れてる。着ればいいんだろ。だから顔を上げてくれ」

「ありがと。恩に着るぜ」
しぶしぶ頷きながら、服を受けて取り更衣室に向かって歩いていった。

カーテンの奥から衣擦れの音と黒いシルエットが薄ら浮かんでいた。

（想像しただけで、鼻血がでそう。早く終わらないかな。身体中が火照ってきた）

カーテンが開きスピカの悲鳴が聞こえてきた。

「なんだこのスカートは！ 短すぎる、ハレンチだ。セクハラで訴えるぞ」

「最近のスカートの丈なんてそんなものだ。気にするな」

「しかも肩や胸が少し出ているぞ。少し動いたらぱんつも見えそうぞ」

「魔法少女の衣装だからな。それでも抑えたほうだぞ！ もっと過激なものあるからな」

「やはり貴様は変態だ。死ね、この変態キング」

「ヤバイ！ 鼻血が出てきた。興奮し過ぎた、やっぱスピカ、お前は可愛いよ。俺の眼に狂いはなかった。立派な魔法少女に成れるよ。俺が保証する」

「バ、バカモン。血が……血が——もったいない。それに私は魔法少女になるつもりはない。何度言えばわかるんだ。この変態」

「このステッキでも持って、リリカルな呪文でも唱えれば完璧だよ」「そんなふざけたことできるか？ 私の服はいつ乾くだ」

「まあ、気長に待とうよ。このステッキでリリカルなポーズでもとつてよ。お願い」

「できるか？ ボケ、死ね変態。私は兵器だ。戦うための兵器だと何度も言ってるだろう。この変態やろう」

血の入った銀の聖杯が妖しく光る。

またこれを飲むのかと思うと気が重くなる。だって物凄く不味いだもん。できればもう二度と飲みたくない。

（結局、服が乾くまですつと暴れていた。服が乾いたらすぐに着替えてしまった。かなり似合っていたのに残念だ）

「早く飲め、ほんとうに死ぬぞ」

「それでは頂きます」

「苦い……」

「でも栄養価は高いはずだ。疲れも一気に取れる」

「それは凄いな」

（またこの感覚か？ どうやら記憶の共有記憶が始まったみたいだ。ビジョンのようなものが見える）

焼け野原に二人女性が佇んでいる。

靄がかつたみたいに視界がぼやけて、顔がわからない。

そのシルエットから、なんとなく女性だなと判断しただけだ。

何かを話しているようだが……ノイズが酷すぎて聞こえない。
頭が痛くなりようだ。

片方の女性の身体が光だし、身体から鍵みたいなのが出てきた。
それをもうひとりの女性に渡す。

鍵みたいなのは女性の身体の中に入っていた。

ノイズが弱まり、微か声が聞こえた。

「それは……の一部。貴女が守って……私には……知らない……だから」

「でも……力は……にとって大切な……じゃ……」

「だからこそ……信頼できる……に託したいの？ 私のわがママを聞いてくる」

「わかったわ」

一瞬靄が晴れ女性の顔が見えた。アレは母さんだ。写真でしか見たことから断言できないけど。

母さんとおぼしき女性は、手からワスレナグサ出し、髪を飾ってあげていた。

彼女はとても喜んでるようだった。

母は花守の血筋のモノである。

花守の一族は第一子を大切にしていた。第一子しか子孫を残すことができないからだ。

ただ母は、第二子だった。資格を持ったいもの。花使いとしての能力は飛び抜けていた、他のついついを許さないほどだ。しかし一族には認めてもらえなかった。第一子じゃないから、ただそれだけの理由である。一族の掟、仕来り、そんなくだらないモノに縛られていた母はどんな気持ちだったんだろう。苦しかっただろうか、悲しかっただろうか、今の俺にわかるはずがない。

神田花守神社という所で巫女やっていた。そこで父さんと出会ったらしい。

母のことは義妹である虹彩アイリスに聞いた。俺に義理の妹がいたことは驚いた。

母を失った悲しみで飲んだくれていた父は、麗しい女性と出会い恋に落ちたらしい。その女性というのが花守家第一子、胡蝶蘭。つまり虹彩アイリスの母だ。

当時中坊の俺は、口をばくばくさせていたよ。あまりにも信じられない話を聞かされたからね。父も母もよく知らないから衝撃の真実だったよ。

そして虹彩アイリスはさらに俺を驚かせることを言った。『一緒に暮らしましょう』と、兄妹が別々に暮らすのはおかしいということだ。俺もココの暮らしが気に入っているわけじゃない。逃げだしたいぐら이다。叔父さんと叔母さんとは上手くいってないしね。ここには俺の居場所はなかった。だからありがたい話ではあった、けれど断った。十年以上も世話になってるし、それ何の恩もある。だから勝手に出て行くのは気が引けた。それに神社は嫌いだ。神を祭るところだからな。虹彩アイリスは承諾してくれた。とても悲しい顔をしていたがわかってくれた。別れ際に母の写真を渡してくれた。

翌朝、俺はスピカに連れられトレーニングルームに来ていた。

「なんでホテルにトレーニングルームがあるだ」

「身体を鍛えるためだろう。普通」

「まあそんなだけどさ、このホテルていろいろと変わってないか」

「気にするな、訓練に集中しろ」

「ああ、わかった」

目の前にはスピカが呼んだ練習相手が五、六にいる。手練てだれの武道家である。練習相手として不足はない。

どうやら思い出エネルギを対価としているみたいで、一度剣に変えてしまふと。どんなゲームだったのか？ 全然思い出せなくなる。

また神ゲーだと最強の剣になり、クソゲーだと最弱な剣になる。判断基準は思い出の大切さみたいだ。未プレイゲームはその期待度で強さがきまる。

今わかつているのはこのくらいだ、今日はスピカ特別メニューも

あるし気合い入れて頑張るか？

今日の特訓終了。疲れた。ちょっとスピカの様子でも見てくるかな。

一体どんな修業をしているんだ、少し興味がある。

(こ、これは……)

「おい、どうした。ここで何があった。なんで、そんなにボロボロなんだ」

「いいところに来たね。血を、血を飲ませてくれなのよ」

「わかった、早く飲め」

「ありがとうなのよ」

抱きかかえていた俺の首に噛みつかれ、血が吸われていく。強い脱力感だ。これは慣れそうにない。真っ青な顔をしているスピカをほっておくわけにもいかないから、しょうがないことだ。

「なぜ、そこまでする」

「バトロアで優勝するためだ」

「そもそもそれが理解できない。命を懸けるほどの価値のあることなのか」

「ああ、そうだ。約束したからな。約束は守るモノだ」

「一体誰とどんな約束をしたんだ」

「気安く声を掛けるな。貴様慣れ合うつまりわない。干渉するな」

まただこの禍々しい感じ、剥き出しの憎悪。とても異質で歪な空気。息苦しい、ここに居たくない。逃げだしたい。そんな気持ちになるこの空気はなんだ。

「脆弱な人間が思い上がるなよ。黙って血を提供すればいいのだよ。それ以上のことは考えるな」

強きのネコのような大きな目で見据えてくる。思わず臆してしまふ。息苦しさも増した気がした。そんな眼で俺を見るな。全てを見透かした眼で――

そして俺は焰との約束を思い出した。アイツは命の恩人だ。アイツが居なればここまで立ち直ることはできなかったな。ホントに感謝している。

「確かに俺は弱い人間かもしれない。そんな俺も果たさなければならぬ約束があるんだ」

「人間ふざいがどんな約束をしたというのだ」

「困ったことができたなら今度は俺が助けると約束したんだ。昔の俺は今のお前にみたいに誰も信じられなかった、心休まる時がなかった。周りは全て敵だと思い込んでいた。そう父に教え込まれていた。だから誰かのために自分を犠牲にして頑張ってアイツが理解できなかったし、何よりも気に入らなかった。お前の嫌いなタイプだろう」

「この世で善人ぶっている奴が大嫌いだ。私に干渉してくる奴も嫌いだがな、一番嫌いなのは我欲ないとほざいている奴だな。欲がない人間だといえるはずがないだろう。みんな自分が一番可愛いはずなんだ、大切なはずなんだ。お前もそう思うだろう」

「ああ、俺も自分が一番大切さ、それは今も変わらないし、変わることはないだろう。だけど世界にはいろんな人がいて、いろんな考えがある。だからな、俺と同じ考えを持った人もいるかもしれないけど、違う考えを持った人だってたくさんいるはずなんだよ。そのを焰と出会ったて知った。お前がどれだけ長い間、独りで生きてきたかは知らない。だけどなお前がもし困っているなら、助けたい、力になりたいと本気で思っているだよ。確かにお前にとっては迷惑なことなのかもしれないし、ただの自己満足なのかもしれない。でも俺はそれでも構わないと思っている。俺は自己中な男だからな」

「身勝手で、変態で、人の話は全く聞かない自己中心的な性格で救いようのないクズだが、そんなお前がいかほどにも気にいっている、好きにすればいいさ。どうせお前は何を言っただけ聞かないのだからな」

「それはお互いさまだろう。俺は俺の目的のために戦う、お前はお前のために戦えばいい。俺は協力を惜しまないつもりだ。ただ気が

かりなことが一つある。アポカリプス十二使徒、イヴの命を狙う集団にして、神狩り事件に参与しているのは間違いなだろう。だが奴等が実行犯だとは考えられない。白山の話を聞く限り表ざた行動をするとは思えない。実行犯別にいるというのが俺の考えだ」

「ええ、私も実行犯は別にいると思うわ。だって事件現場に残っていた魔力はアルネシアドルのもだったもの。それに簡単に尻尾を掴めるとは私も思っていないわ。けれどね、イヴを傷づけれ奴は誰れであろうと許さないわ。見つけて必ず殺してやる」

「殺すのは不味いから、半殺し程度で許してやって欲しい。たぶんアイツが関わっていると思うから――」

「アイツとは誰のことだ。お前の友達か？ 知り合いか何か？」

「火竜焰――大切な友達で俺の命の恩人だ。神を特にアルネシア神を憎んでいる。両親を奪われたようなものだからな。もし本当にアポカリプスに、アルネシア神の自縛から解放する力があるなら、焰は力を貸している」

「まあもし、お前の恩人が犯人なら半殺しで許してやるかな？ 私も鬼ではないからな」

また被害者がでたらしい。今回は五人全員死亡した。神を抜かれた人間は丸焦げになって発見された。

「むごい」

そう声を上げたのはスピカだ。俺達は朝食を食べ、ホテルの自室でテレビを見ていた。

警察も懸命に調査しているみたいだけど、犯人に繋がる手掛かりはまだつかめてないみたいだ。原因の一つは、動機が見えないことだ。まるで無差別に殺している通り魔的犯行みたいで、その足取りが全く予想できない。犯人像が見えてこないらしい。

まあここで考えてもしかたないので、聞き込みに行くことにした。

「おい、スピカ。出かけるぞ。準備しろ」

「了解なのですよ」

第16話 花守の一族

電気街は昨日を一通り調べたので、今日は蔵前橋通り・末広駅周辺調べることにした。

「ここら辺も大分変わった。昔は萌えショップなつて、一つも無かったもんだぜ。信じられるか」

「そうなのか」

「ああ、ビルが多かった。無機質なビルがたくさんあって、面白くもなんともない所だった。今では萌えイラスト入り看板がいたる所に設置してある。萌え文化は東京全土に広がっているからな」

「日本ももうお終いなだね。お前みたいなのが増えたかと思うと、教会の連中も何を考えているだろうね」

「堕ち神を閉じ込めるためだろう。堕ち神は萌えという感情に引き寄せられて現れると教会の奴等は言ってただろう。でも実際は真理の霊王が萌えという感情を喰らっているだしいがどちらにしろ危険な存在なのは確かだ。心を喰われたら隷属するんだからな」

「堕ち神であろうと真理の霊王であろうと結果は変わらないということか？ ただ死者がでていることが解^げせん。最近焼死体が増えたと思わないか」

「ああ、それは俺も気になっていた。最初はコスプレした美少女に神を取られたという被害が多くてアルネシア神の支持率が落ちる程度で焼死体はでなかった。死者は数名でたが、それは無理やり神を奪われたさせいだろう、遺体には外傷はなく毒を使った痕跡もなかったからだ。最近起きている神狩りは別の意図で行われている可能性が高い」

「それは萌えという感情はもう理解したということか」

「わからないが、何か今まれれとは違う気がする。もしかしたら、堕ち神を根絶やし作戦が始まったのかもしれない」

「教会が本格的に動き出したということか？ 手に負えなくなる前

に真相を確かめるぞ」

「ああ、そうだな。だが俺は行く所があるから今日も別行動で頼む。あと時間と場所も昨日と同で、もし何かあったら俺の携帯に連絡しろ」

「了解なのですよ」

神田花守神社。コノハナノサクヤビメ木花咲耶姫を祀り、オオヤマツミノカミ初源の巫女が眠る地。数千年歴史を感じさせる神社。

ここに来た目的は母のことを訊くためだ。アキバで起こっている不可解な事件と母が関係している気がしたからだ。俺は母のことをほとんど知らない。

境内の掃除をしている巫女服を着た（バイトらしき）一人の女性に声を掛ける。

「俺、天海翼って言うんだけど、ちょっと、アイリス虹彩に話があるだ。呼んできてくれないかな」

「虹彩様にお会いしたいのですか？　ですが、今日来客があるなんて聞いていませんが……」

「約束はしてないからね。知らないのも無理なよ。でも至急訊きたいことがあるんだ」

「そう言われましてもね。何かと忙しい人ですからね。わたしの一存ではどうすることもできないです」

「居場所を教えてください、俺が直接会いに行くよ」

「申し訳ございませんが、教えることできません」

「なぜだ」

「規則ですから」

「虹彩は俺の義妹だ、と言ったら会わせてくれるか？」

「いえ、無理です。規則ですから」

軽くウェーブのかかった黒髪を手で払いながら、落ち着いた物腰できっぱりと言われた。

しかしここでくいさがるわけにもいかないの、相手の顔を見据えて言葉を吐き出す。

「どうしたら会わせてくれるんだよ」

「貴方が虹彩様アイリスの義兄だと言うのなら、それを示しなさい。そしてら会わせてあげるわ」

（クソ！ 急にそんなことを言われてもどうすればいいのか？ 全然わからない）

「どうしたんですか？ できないんですか？ なら帰ってください。そして二度と来ないください」

赤と白の絶妙なバランスを醸し出す美しい巫女服姿で、箒を両手で持つて凄いい剣幕を魔と纏い突き出してくる。目がとにかく怖い、あんな鋭い瞳、今まれ見た事がない。

身体中から油汗がにじみでる、ヤバイ完全に不審者だと思われる。このままだと警察を呼ばれる。それだけは何とか回避しなければならぬ。

「えっ！ ちょっと待って。しょ、証明ね。できるから大丈夫。OK、OK」

「なら早くしなさい。忙しいんですから、害虫にかまっている時間はないです」

「そうだね、うんわかった。えゝゝゝと」

（何かいろいろテンパってる、無理だ。打開策が全く思いつかない。困った。どうしよう。どうしただらいいだ。誰か助けてくれ）

「騒がしいわね、どうしたの朔弥さくや」

「虹彩様アイリス。その無礼極まりない男が、虹彩様アイリスの義兄だとおしやるのです。私にはとても信じられません。だから証拠を見せると言つてやったんです。でも、明らかに様子がおかしくて、挙動不審でコイツ絶対ストーカーですよ。間違いないですって。妖しさマックスですから、もう全身からヒシヒシと感じますよ。どうしますか？

警察に突き出しますか」

黒い瞳が光らせ、蔑んだような冷たい視線はとても居心地の悪い

ものだった。完全に見下されている。同年代と思われる女性に――
――これは屈辱以外のなにものでもない。

だからリアルな女性は嫌いなんだよ。いつもそういう目で見やがって、俺が何をしたって言うだよ。やっぱり二次元美少女が最高だな。今つくづく思ったぜ！

「朔弥、少し落ち着いて。深呼吸して見てわいか。はい、すくはすくは。どう少し落ち着きましたか」

「はい、大丈夫です、少し落ち着きました。ありがとうございます」
「それは良かったわ。確かこの方は、わたしくのお兄様です。それは間違いありません」

「そうなのですか？ ストーカさんじゃないですか？ どう見ても変態顔なんですが。釈然と言いますか？ 納得がいきませんね。でも虹彩様アイリスが嘘をおしやると思えません」

（腑に落ちないという顔している。そんなに俺って変態顔なのか？
イケメンじゃないとは思っていたけど、マジ落ち込むわ）

相変わらず冷たい目で睨まれている、背筋がぞつとする。それにくらべて虹彩アイリスはおっとりした口調で、ほんわかした顔をしている。しかもなぜか巨乳？ 最近の子供は発育がいいなといってもそんなに歳は変わらないだけだね。

「どうやら誤解が解けたみたいです。良かった。本当に良かった。警察に突き出されないで、正直どうなるのかと思いました」

（精神的ダメージは大きいけど。出会う人、出会う人、みんなに変態呼ばわりされ。俺は悲しいよ）

茜色の綺麗な髪を靡かせ、綺麗に着こなしている巫女服がとても芸術的で素晴らしかった。日本人とは思えない豊満な胸に大きなお尻で、締まる所はきゅつと締まった膨やかな身体は、女神を彷彿とさせた。

「それでどういったご用件でしょうか？」

「母のことで少し訊きたいことがあってね？」

「桜様のことですか。てつきりスピカ様に関するのだと思ってお

りました。生憎わたくしの口からお話できることはありません」

「そうですか？ わかりました。お忙しいところ申し訳 ありません。では失礼させてもらいます」

綺麗にターンを決め、帰路につこうとしたら、後方からおつとりとした綺麗な声がハッキリと聞こえてきた。

「どう言った経緯で兄様は始まりの書を手に入れたのかはわかりませんが。それは非常に危険な魔導書で、数多くの犠牲を出した上で、花守一族の封印したモノだと母から聞き及んでいます」

「えっ！」

思わず声を上げてしまいうぐらい意味深な言葉だった。胸に突き刺さるような鋭さを持っていた。振り返ることできず、その場に足を止めリュックから始まりの書を取り出し考え始まる。花守天心、自立型人形の生み親にした唯一神を求めた男。そして異世界の門を開き、異世界人を招き入れ始まりの書に心を喰われた哀れな道化。

そうか、やつぱりスピカの話は全て真実なのか？ これは禁じられた魔導書。ヒトの心を喰らう世界に絶望を与える魔導書。例えば言語眼を用いても読み解くことはできないのかもしれない。だがあの少女がウソを言っていたとも思えない。一体どういう事なんだ。

『全てを知りたければ開け、読み解け、その眼で』

これは魔導書の声か？ 言語眼によって写しだされた文字を読む。俺を試しているのか？ 貴様を扱えるかどうかを——いいだろう。望み通り開いてやるよ。覚悟を決め、勢いよく始まりの書を開く。

『全ての始まりは、独り幼い少女の願いから始まった。友達が欲しいという、ごく当たり前願いだった。少女には友達がいなかった。それは少女が特別な存在だったからである。生まれながらにして神と会話することができ、さらに神を顕現する力まであった彼女は、聖女として讃えられ、大切に大切に何不自由なく育てられた。彼女の周りには私利私欲に満ちた人で溢れていた。その人達の我欲によって殺されることを知った彼女は、神に助けを求めた。しかし神は彼女の願いを叶えてはくれなかった。そして私が生まれた。私は彼

女を護るために彼女が創った存在。彼女に向けられた、憎悪に嫌悪、妬みに嫉妬、憤りに殺意。ありとあらゆる負の感情を受け止めた。いつしか魔導書である私の身体は黒く黒くなっていた。予言が果たされようとしていた。彼らの怨念が情念が、私の身体を蝕んでいく私が彼女を殺す。そんなバカげたことがあるか？ 私は私はそんなことしたくなかった。未来を変えたかったけれどできなかった。私は呪われた魔導書なのさ、主殺しの魔導書。人を惑わし、狂わせ、不幸を呼び、死に至らしめる禁断の書物。私を扱う事ができるのは、カオスぐらいなものだ。もうじき私の役目も終わる。もう誰かを不幸にすることもない」

そこで言語眼の文字が途切れ、変わる。

『兄様。大丈夫ですか？ 気を確かに持ってください。魔導書に吞まれてはいけません』

これは虹彩アイリスの声だろう。どうやら俺のことを心配しているみたいだ。字の節々にそれが表れている。俺は始まりの書を閉じ、一呼吸して意識をはつきりさせてから辺りを見渡す。すぐに心配そうな顔をしている虹彩アイリスを見つけ、微笑みを浮かべると少し安心した顔で呟いてきた。

「一体何を迷っているのですか？ 兄様わ。もしかしてスピカさんのことですか」

（はっ？ 一体何を言ってるだ。この俺様が迷っている。そんなはずあるわけない。奴は兵器で人形だ。始まり書の犠牲者だろうと、過去に何があるうと俺には関係ないはずだ。そうだよ、関係ないはずなんだ。なのに、何でこんなに気になるだ、なぜほっとけないだ。ヤツが魔法少女だから、イヤ違うそうじゃない。そういうことじゃないだ）

第17話 決断

一旦は躊躇したものの覚悟を決め、振り返り腹の底から思いつき
り声を出す。

「迷い、ふっははは。そんなのあるわけじゃないか。スピカと
は利害が一致しているだけで、別に何とも思っていない」

「嘘ですね。それくらいわたくしにだってわかります」

「俺は誰も信賴してないし、誰の力も借りない。何だって一人で
きるんだ。だから心を許せる友なんつてていない。スピカと一緒に
いるのは契約があるからだ。ただそれだけの関係だ。特別な感情
は抱いていない」

全てを見透かしたような澄んだ、金色の瞳で見つめてくる。俺は
その瞳をその声を否定した。彼女の言っていることが理解できな
かった。イヤ、理解したくなかった。

何か大切なものが壊れてしまうような、変わってしまうような気
がしたら――

（そう、周りは全て敵だ！ スキを見せれば殺される。父のように
―― だから俺は誰も信じない。その生き方を変えるつもりはな
い）

などなどと思いながら、自分に言い聞かせる。しかし、複雑な顔
をしていたんだろう。

「そんな辛そうな顔で言われても説得力がありませんわ。なにより
貴方が誰よりも優しいのは存じ上げています」

「貴様に何がわかるというのだ。義妹風情が調子に乗るな。目ざわ
りだ」

アイリス

「虹彩様に対する無礼な発言はこの私が許しません」

「おやめなさい。朔弥」

「でも……………わかりました」

「本当に何とも思わないんですか？ 一緒にいて、それでいいです

か、兄様わ」

「俺は……………」

「兄様は一体どうしたですか？ 自分の意思をハッキリ示してください」

地面に倒れ込み、何度も何度も拳を叩きつける。虹彩アイリスの言葉が胸をえぐり俺を苦しめる。答えを求めて頭を使って考えるが答えでない。

（俺はどうしたいだろう？ どうするべきなのだろうか？ どうすることが正解なんだろうか？ わからない？ 全然わからないよ）

「わからないよ、そんなの。俺はどうしたらいいのかな」

（人を信じたこと何で、生まれてきて一度もないんだよ。ましてや、相手は兵器だよ。俺にどうしろというだよ）

「そんなの？ 自分で考えなさい。兄様にはそれができるはずですよ。わたくしは信じております」

（そんなこと言われても……………わかねよ。一体どうすればいいだよ。クソ！ 俺にどうしろて言うだよ）

「虹彩アイリス様、こんな虫ケラに答えを出すなんて無理ですよ。所詮害虫ですから」

「いいえ、兄様なら最善の選択肢を選べるはずですよ。優しい方ですから。わたくしは信じています」

（俺はアイツが——傷付く姿なってみたくない。けど……………多分、イヤ絶対。戦うことを止めないだろう。生きるということは戦うということだから。なら、俺に出来ることは決まっている。守る、どんな強敵が現れようと絶対に守る。この命に代えても）

「わかったような気がする。俺は多分、スピ力を失いたくないだと思ふ。俺の目の前で誰かが傷つくのはもう見たくないだ。目を離すとすぐに無茶をするからな、たぶんほっとけないだと思ふ。だから一緒にいるんだよと思えてきたよ。ありがとう虹彩アイリス」

立ち上がり力強く叫び、俺は神社を後にする。虹彩アイリスは黙って後ろ姿を見詰めていた。朔弥が何か叫んでる気がしたが、気にせず歩い

て行く。ごちゃごちゃ考えてもわからない。他人の気持ちなんて理解できるわけないだ。だったら俺は俺のしたいようにする。例えば鬱陶しいがられても傍に居続ける。偽善だとか自己満足だろうと、言われようと気にしない。独りは寂し過ぎるから。結局俺はアイツをどう思っているのかはわからない。ただ独りにしてはいけない気がする。この気持ちは何なのかは良く解らないけど、不思議と笑える。暖かくて優しいでもモヤモヤする何か言い表せないものがある。

これが好きという感情なのだろうか？ 俺は誰かに愛されたことがないからわからない。

第18話 オタ狩り

携帯で某巨大掲示板を確認しが有力な情報はなかった。やっぱり地道に聞き込みするか？ 待ち合わせの時間まで頑張るか？

ラジオ会館の前。

「たぶん犯人はオタクが嫌いだと思うの？」

「なんでそう思うんだ」

「この写真を見てなのよ」

暗がりでも美しい、淡い青色の髪を靡かせ、コートの内ポケットから一枚写真を取り出し見せてくれた。

その写真には、間違いなくオタクが写っていた。

同人シヨップの紙袋を両手に下げ、何かのアニメキャラのＴシャツに、よれた綿パンを着ている。他も丸眼鏡に小太りな体といい、どこにでもいそうなオタクである。

「確かにコイツはオタクだな。まず間違いないだろう。しかもエンフォニー常連客だ」

「でしょ。この人、背中に大火傷を負ったらしいのよ。他にもカメコ達が襲われているみたいよ。しかもみんな意識不明の植物状態、きつと神を抜かれたのね？ もう目を覚ますことはないわ。可哀想に」

（背中に大火傷か？ それ言われてみれば、肩や背中など汗をかく場所を火傷した人が多いな。これは偶然なんだろうか？ 墮ち神を根絶やし作戦とはオタ狩りのことなのか？ だとしたらやはり焰が関わっている可能性は高いな。大のオタ嫌いだからな。

でも発火方法がわからないし、なぜ火炙りなのかもわからない。もっと確実な殺し方もあるはずなのに、何かこだわりでもあるのか？ また汗でヒトを燃やすことは可能のだろうか？ わからない、なぜ汗なのかも全然わからない）

頭を掻きながら考えてもわからないので、とりあえずスピ力を褒めることにした。

「よく調べたな。確かに犯人の狙いは『キモオタ』で間違いないだろう」

「キモイ奴と変態は世界に害しかもたらさないからね。燃やしたくなる気持ちもわかるわ」

「燃やすのはマズイだろう、道徳的にな」

「あなたも炎で清めてもらったほうがいいじゃないですか。そしてその変態も治るかもしれませんよ。でもバカと変態は死んでも治らないというから無駄死にかもね」

「確かに炎で炙られるのわ嫌だな。かなり痛くて苦しそうだし何よりも俺は紳士だからな」

「変態が付きますけどね。で、こんなことをする犯人に心当たりあるですか？」

表情がコロコロと変わる奴だな。こうして話していると普通の女の子にしか見えないんだけどな。戦うために作られた兵器なんだよな。エメラルド・グリーンの瞳は何を映しているだろうか？俺はコイツに何をしてあげられるだろうか？虹彩アイリスが変なこと言うから、先から意識しまくりじゃないか？落ち着け俺――

（ごちゃごちゃ、余計なことを考えないで、今は事件のことに集中しよう）

「オタクが嫌いなヤツなんて、たくさんいるからね。それだけじゃ、見当もつかない。もう少し情報が必要だな」

「じゃあ、キモオタが集まりそうなところに行つて情報収集して来いなよ。私は別ルートで捜すからね。お願いします」

「俺一人で行くのかよ」

「当たり前なのですよ。そんな所にいったら大変なことになるのは目に見えてるでしょう」

「萌えキャラだからな。キモオタも喜ぶだろう。舐めまわすように見るだろうな。見るだけで済まないかもしれないしな……」

「想像しただけでもぞつとするわ。あと萌えキャラ言わないで、結構気にしてるんだから」

「できれば俺も行きたくないが、そうも言ってられないか。まあ幾つか心当たりがあるから行ってみるよ」

「わたしはグルメスポットを中心に回るの。お互い頑張りましょうね」

MMM（萌え萌えメイド）の前まで着て俺は驚愕した。

二〇一二年に出来たこの建物は、駅中にある。

その昔、アキハバラデパートというものがあつたが……その名残はもはやない。紹介制の会員制で、選ばれた人しか中に入ることのできない。特別な場所なのである。

中はデジタル空間になっており、生身の身体では入ることができない。うえに高度なセキュリティで守られている安全、安心な場所である。

覚悟を決めて、ドアの前に設置された電子パネルに手をかざす。

ID認証中という文字が表示される。

認証するのに一、二分掛かる。

認証終了。五〇二 天海翼と確認。これより電子化デジタルを行ないます。動かないでください。

（良かった、消去されてなかったみたいだ。組織もまだまだ詰めが甘い。もしかしたら白山の根回しがあつたのかもしれない。どちらでもいいか？ 考えてもわからないし）

電子化デジタル終了、これより入室を許可します。

（ここに来るのは二度目だな。一度目は神中の紹介で着た。できればもう二度と来たくなかつたのだが……これも仕事だ！ 気持ちを切り替えて聞き込みしろっ）

なかなか面白いことがわかったぞ。早速スピカに連絡するか？

電気街・秋葉原駅前。

「おおっ！ 来たか？ 待っていたぞ、スピカ」

「面白い話って何？ 早く教えて」

丸みを持たせた可愛らし前髪に、薄ら赤い魅力的な唇を開いて猫なで声で訊いてきた。

猫みたいな愛らしい少女である。あの横に流す感じの前髪がポイントなんだよ。

やっぱりロングヘアって可愛いよななどと思いだから話始まる。

「エンフォニーで会員限定のイベントが行われていて、カンナギルナの手料理が食べられるという情報を掴んだ。そしてその手料理は激辛料理らしい」

「カンナ……ギ……ルナ。有名な人なのか、全然知らないんだけど」

「お、お前——カンナギルナを知らないのか？ 会っただろうエンジェルキャッツシンフォニーで。帰り際に話してきただろう。覚えてないか？」

「ああ、あのメイドもどきか？ 思い出したよ」

「メイドの他にも、歌手や声優もやっている、超有名アイドルなんだぞ。ネットでもかなり話題になってるし、あの毒舌がたまらないってな」

「わかったから、興奮するな。気持ち悪いから……マジで止めてくれ。頼む」

少し興奮してしまったようだ。嫌悪感を全身から滲ませ、両手で肩を強く握り締め、膝を震わせ、怯えていたので本題にはいることにした。できるだけ優しく紳士的に話すことを心掛けた。

「で、食事会の他にもジャンケン大会が行われていたみたいなんだ。優勝すると一日デート券がもらえるらしいんだ」

「キモオタが集まりそんなイベントですね。でも、料理を食べただ

けで発火する能力何て聞いたことないの？ 物的証拠は掴んだの」

「ごめん、ない。物的証拠はないだよ。でも被害者を調べてみてわかったことがあるんだ。全員カンナギルナファンだったんだよ。なあ、出来過ぎているだろう。あとコスプレをした美少女に襲われたという証言とも一致する。彼女が神狩りに関わっているのはまず間違いないと思う」

「確かにそれは妙な話ね、あの女は胡散臭いと思っていたけど。どうやらあたりみたいね。もしから彼女はアポカリプス十二使徒の一人なのかしら、なら話が早くて助かるわ」

軽く前髪を払って、納得したような笑みを浮かべて言うスピカを見て、俺は左手を顎に添えて、右手は肘を掴んで考え込むように、カッコつけて口を開く。

「アポカリプス十二使徒の一人なのかはわからないが、事件の関与しているのは間違いなのだろう。まあ、問い詰めればわかることだし」

「確かカード下にあつたわよね。でも本当に事件と関係あるのかな？ 彼女は確かに怪しいがどうにも腑に落ちないことがあるのよね。コスプレをした美少女とは本当に彼女のことを指しているかな。襲われた人ってカンナギルナのファンなんですよ。なら、カンナギルナに奪われたとか、襲われたと言うのが普通だと思わない。それに最近増えてる焼死体も彼女の仕業だというの？」

「確かにそうだ。可笑しな話だと俺も思う。しかし犯人の狙いはア二オタだ。それもカンナギルナファンを狙っている、それは間違いない。だが本人が直接手を下しているも限らないか」

「ア二オタは特にキモイしね。最近のア二オタは、萌え萌えとキモイし、ウザイし、臭いからね。マジ、迷惑だから死ねって感じなのはわかります。本当にそんな理由だけで殺しますかね。元々の目的は神を狩ることなんだろうけど。キモオタから神を奪っただけでアルネシア神を信仰する人が減ると思えないし、原因は別にある気がするのよね」

「まあ、それは考えてもわからないから置いて。カンナギルナ

は、超が付くほど美人で、スタイルがよくて。男を虜にする魔性の女なんだって、写真もあるから見るか？ あの時ちゃんと顔見てなかっただろう」

難しそうな顔しているのを見て、ポケットから写真を取り出しスピカの顔に押しつけやる。すると、また複雑そうな顔をして、髪を軽くいじりながら小さい声を発した。

「この顔どこかで見たことがあるよな？ ……うーん、どこだったかしらね。思い出せないの。でも羨ましい身体ですね」

「コイツの仕業だと思っただけ。お前の言う通り、ずっと店にいたという確かなアリバイがあるんだよ。お前はと思う」

「よくよく見ても怪しい顔ですね。それに胸が大きいくて、背も高い。少し懂れちゃうの？ でもやっぱり関係ないと思うわ」

「そうだよな。やっぱり関係ないか？ カンナギルナは白か」

「ただ気になることが一つあるのよ。事件現場で白衣を着た高校生ぐらいの男が、何度か目撃されているの。もし、その男子がパートナーなら話は変わってくるわよ」

「なるほどその男が実行犯の可能性があるのか？ どのような能力を手に入れたのかわからないが！ その男は間違いなく異能力者だろう」

（オタク嫌いの白衣を着た高校生か、やはり焰が関わっているのは間違いないか？ 焰とカンナギルナ関係はわからないが——アイツがカンナギルナのファンということはないだろう。やはり彼女はアポカリプス使徒なのだろうか？ わからないことだらけだ）

「とりあえずエンフォニーは行って見るか」

「あの怪しい音楽を奏でるメイド喫茶ね」

「ああ、話を訊くついでにカンナギルナのサインでも、もらおうと」

第19話 救済

裏路地。

「クソ、ルナちゃんに会えなかった」

「フリータイムは終わって、今は会員の人しか会えないみたいね。ますます、怪しくなってきたわね。中で一体なにをやっているのかしら、気になるわ」

「俺も気になるが、会員費が異常に高いんだ。一介の高校生には、払えない金額だよ」

「だからこんなところで待っているのか！ 本当にここで待っていれば、犯人がくるのか？ アレから、もうかなり経っているぞ」

「もうすぐ来るさ。だから大人しく待っている。俺の推理に間違いはない」

「お前がそこまで言うなら、信じて待つとしよう。だがもし、来なければ！ 貴様の血を一滴も残さず吸ってやるからな、覚悟してけ」

「ああ、わかった。確かにただ待っているだけでは時間の無駄だな。これから戦うかもしれない男の話をする聞いてくれるか」

「うん、暇だしいいよ」

「男の名を火竜焰という。超が付くぐらいのイケメンで白衣の似合うマッドサイエンティストだ」

「その名前には聞き覚えがある、確かお前の命の恩字だったな」

「そうだ。あの時のことはいまでもよく覚えている。焰と初めて出会ったのは熱い夏の日だった。兎相に一時保護された俺はそこでも膝を抱えて泣いていた。そんな情けない姿を見た焰は俺の頬を思い切り殴ってきた。思わぬ攻撃で仰向けに倒れて痛く痛くて大声で泣きわめいたところに、透かさず「うるさい、泣くな」とまた殴ってきた。そのパンチも見事に顔面に決まったてそこで気を失った。白いベッドの上で目を覚ました、俺の前に焰がいた。「泣いてばかりじゃ何も変わらないぜ。誰も助けられないんだからな」と叫ぶ声

はどこか悲しげでまたまた顔を殴られた。また泣き出しそうになる俺を見て「強くなれ」とこう言った。俺は物凄く痛かったの泣き散らすだけで答えようしなかったら、さらにもう一発くらった。奴には数え切れないほど殴られた。ほとんど殴られた記憶しかない」「それでそんな気持ち悪い顔になったのね。骨格が変わるほど殴られるなつて憐れね」

「まあ、それは置いていて。最後まで聞けよ」

「ええ、わかったわ」

「高一のとき再会したわけだが、お互い目指すものが違っていた。およそ十年の時を越えての再会は感動的なものではなかった。十年という歳月は人を変えるのには充分過ぎる時間だった。狭間区に戻ってきた俺はそれを知った」

「狭間区って確か東京七区の一つね」

「ああ、昔は二十三区あったらしいが——今は七区しか、存在していない」

「狭間区は、秋葉原のある千神区のとまりで比較的住みやすい場所よね。スーパーやコンビニなども多いしね」

「あと雑貨や外食できる店も多いしな、秋葉原よりは住みやすいと思う。ただ萌え商品に溢れているところは変わらない。東京七区全部が萌えに侵食されている事実だ」

「どうやら、待人が来たみたいよ。話はここまでみたいね」

「火竜焔、やっぱりお前もこの事件に関わっていたんだな」

「堕ち神を根絶やし作戦か？ それとも萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルことか？ まあどちらでもいいか？ てめえはここで俺に殺されるだからな」

「なぜこんなことを知っている。お前が神を憎んでいることは知っていたが、人を殺すような人間じゃなかったはずだ」

「てめえは何もわかっていない。これは救済なんだよ。そしてこれは俺にしかできないことなんだよ。だからてめえも救ってあげるか」

ら、大人しく死ねよ」

「それはできないな。俺はスピカともに生きて行くと決めたから、お前が間違った道に進もうとしているなら俺が止めてやる。俺達は友達だろうな、焰」

「その馴れ馴れしい態度が気に入らなかった。いつも自分は正しいと信じて疑わない真直ぐな目をしていた。初めて出会った時はそんな目をしていなかった。もっと曇ったような、ギラついたような眼をしていた。てめえだって神を憎んでいたはずだ。殺したいと思っていたはずだ。なのに俺を止めるというのか？ 俺のやっていることが間違いだというのか、なぜそんなことがてめえわかるんだよ」

「わかるさ。俺はスピカと出会って、どうして神というものが存在するかを知った。神とは人の願いを叶える存在であって、不幸にするために存在しているわけではない。イヴが顕現させた神だって同じだ。人を幸せにするために存在している」

「神が善なる存在だ、笑わせてくれる。俺から両親を奪った、イヴという少女を許さない。アイツが神を顕現しなければ、俺は幸せに暮らせてたはずなんだ。私利私欲のために神のを顕現させて至福を肥やしているアイツが許せないだよ。だからこれは救済なんだよ」

「あなたバカなの？ あの子が本気でそんなことしていると思っているの。あの子はねえ、誰かが不幸になることは絶対にしないわ」

「止めるスピカ、今のコイツにそんなこと言っても無駄だ」

「なぜ、止めるの。まさかあなたもイヴが人を不幸にしているというの。彼女はそんなこと絶対にしないわ。なんでそんな簡単なこともわからないのよ。彼女がどれだけ自分を犠牲にしているか。少し考えればわかることなのに」

「お前の人形は随分とイヴの肩を持つようだな。あの方のおしゃる通りの危険分子らしいな排除しなければならない。そしたら俺は両親と再会して幸せに暮らすことができるだ」

「一体何を言っているだ、焰。ある方って誰だよ。まさかアポカリプスの使徒か」

「お前が知る必要のないことだ。大人く俺に殺される。はつきり言
って、てめえ存在が目障りなんだよ。俺の幸せのために死んでくれ、
俺のことを本当に友達だと思っっているなら」

「残念だったな、今のコイツは地上最強の兵器である私と契約した
ことにより、数段強くなっているぞ。そなたでは勝ちめはないだろ
う。なぜならばわたしは最強だからな」

「最後に一つ答えろ、焰。救済だと言ったな。それは真理の霊王の
意思か？ それとも――」

そこで言葉に詰まった。焰の顔がこれまでないほど凶悪なものだ
ったから、俺を救ってくれた、不器用だけど優しい焰はもういない
のかもしれない。人は変わっていく生き物だ。焰と出会ってすぐに
父が死に引越してしまった。そして、あの子と出会った。あの少
女と出会わなければ、オカルトにハマることもなかったし、焰と対
立することもなかったのかもしれない。でも過ぎ去ったことを考え
ても仕方がない。

「ああ、霊王様の意志だ。これは救済だ、貧困をなくすための処置
だ。この世界には飢えて死ぬ子供がたくさんいる。それはてめえも
知っているだろう」

「イヤってほど知っているさ。最近の食料問題は深刻だ。餓死する
子供が跡を絶たない。政府のずさんな対策の所為だ」

「そうだ、対策の一つに、頭の中にＩＤチップを埋め込まれている
のは知っているよな」

「俺達を管理するために政府が行なったやつだな」

「本当にそれが真実だと思うか？」

「どういうことだ」

「こう考えたことはないか。東京で秘密裏に研究を行なっている。
そのために頭の中にヘンテコなチップを入れられ。毎週行なわれて
いた検査は、実験体の観察と洗脳が目的だったじゃないか。毎回行
なわる注射は、栄養剤だと言っていたが本当は別のもで、俺達を薬
漬けにしろうとしていたじゃないのか」

「あなたのお友達完全に、教会の奴等に洗脳されているわね。可哀想だけど、ああなってしまったら、もうお終いね。人間として、教会の犬として生きて行くことしかできないわ」

艶っぽい赤い唇から憐れみに満ち溢れた言葉を紡ぎ出し、見下した視線を送っていた。

俺はそれを呆然と聞いていた。スピカが言っていることはまず間違いないだろう。コイツとの戦いは避けることはできないだろう。戦って勝つ、それしか道はない。

「うるさい。人形風情がわかったようなことを言うな。俺は選ばれたんだよ。お前達とは違う。俺は特別な存在なんだ」

「憐れね。あなたも使い捨ての道具だということに気付かないなんて」

「うるさいうるさいうるさい、選ばれた人間なんだ。だから結晶を集めないといけないんだ。そうしないと多くの人が餓死して死んでしまう。俺は英雄になるだ」

「一体何を言っているだ」

焰の言っていることがいまいち理解できない俺は聞き返してしまっただ。それに驚くこともなく焰は話始める。スピカは臨戦態勢に入っていた。鋭い眼で相手を睨みつけ、隙がないをうかがっている。ナイフを三本づつ握っており、緊迫した空気がながれていた。

第20話 戦闘その1 静電気

「これは極秘事項なんだけどな。特別に、ミジンコン並の頭のお前からにもわかるように説明してやるよ。ありがたく思っただけよ。」

食糧問題を解決するために新しく考えだされたエネルギーこそ『萌え』だ。

一般人には理解不明な感情だが、ドクター神崎はその感情を使って食べ物を作成することに成功した。ただ萌えという感情を抜き取られたオタは廃人になってしまふという致命的な欠点があった。そこでドクター神崎は考えた。なら殺してしまおう。どうせ社会のゴミだ、死んでも誰も困らないだろう。それがドクター神崎の出した答えだった。もちろんこの計画は極秘裏に行なわれることになった。ドクター神崎は『萌え』という感情を結晶化して取り出す道具とIDチップを発明した。IDチップにアクセスすることによって最高萌え体験がわかり、それを疑似体験させることができるようになった。萌え度がマックスになった状態で殺すと、綺麗な結晶が取れるという寸法だ」

「キモオタを一掃し、さらに食糧問題も解決させるという一石二鳥、イヤ、三鳥になるかもしれない作戦ですか？ 人間にしておくのが勿体無い頭脳ですね。惚れ惚れします」

ニコニコ微笑みながら焰に向かって六本のナイフを投げつける。その表情は恍惚していて、まるで人を殺すを楽しんでいるようにみえてた。黒い、黒い部分がぜんかいた。薄気味悪い笑い声まで聞こえてきた。こうなったスピカは手に負えない。

焰はスピカの投げた六本のナイフを全てかわしていた。そして俺はとにかくスピカにつっこむことにした。今後におよんで戦う気が湧かなかったからだ。

（だって、命の恩字だよ。さすがにためらうよ。それに俺、争いごと嫌いらし）

「そこ感心するところか？ スピカ。奴は人殺したぞ」

「萌えオタはキモイから死んでもOKです。どうせ、ろくに働かないニートか、社会のゴミで社会に寄生する害虫でしかないですよ。オタは悪影響しかもたらさないですよ。死んで世の中の役に立っていないじゃないの。生きてるだけで迷惑をかける、糞やろうな人達なんですから」

「そうかもしれないけどな。そこは否定できないけど——殺しちゃうのはやっぱりマズイと思うわけだよ」

「これで俺の話は終わりだ。貴様の結晶も俺がもらいうける」

（やっぱりこの戦いは避けられないか？）

「塩水爆弾」

激しい爆音とともに辺りが燃え広がる。クソ、時間切れか？ こうなったら戦うしかないか？ スピカー人では荷が重過ぎる。無敵モードは一分しか持たないからな。あまり期待しないほうがいい。しかしあのコート燃えないな。耐久力高過ぎだろう、この業火でも燃えるようすがまったくない。どんな繊維でできているんだ。

「スピカ、俺に力を貸してくれ、確かめたいことがあるんだ」

俺にスピカがいるように、奴にもパートナーがいるはずだ。今はまだ姿を見せてないが恐らく燃料系を生み出す能力はずだ。そして焰の能力は静電気だ。

静電気で火花を散らし、身体から噴き出す何かに引火さたんだ。つまり流動帯電を起こしたんだ。だから手から炎を出すのではなく爆弾なんだ。塩水は電気を通すからな、つまり俺の考えは間違っただけだったということだ。奴自身は静電気しか使えないはずだ。

「足止めを頼む、スピカ。俺はエロゲーを剣に変える」

「わかった。でもそんなに長くはもつたないぞ、できるだけ急いでくれ」

リュックから戦国モノ・ハーレム系のエロゲーを取り出し剣に変える。

付属効果は媚薬。誘惑の剣。

形状は日本刀。

刃渡り六三センチぐらいの長刀。

材質は鉄。

エロゲーが日本刀へと姿を変えていく。

錆一つない透き通る刃、腕にずっしりくる重み。

この刀で奴の能力を確かめてやる。

刀を強く握りしめ、地面を蹴り走り出す。

焰との距離が一気に縮まる。

「下がれ、スピカ」

スピカが退いたのを確認した俺は、思いきり両手で斬り裂く。

「酸化しただと」

焰の身体を斬り裂こうとした日本刀が突然、錆で砕けてしまった。地面に落ちた、残骸を見て唖然としているスピカ。

「これが奴の能力だ。静電気を使うぞ、気よつけるスピカ」

「静電気だつて、ちやちい能力だな」

「どうやら俺様の能力に気付いたみたいだな」

不敵な笑みを浮かべる、まだ隠された能力があるというのか？

底の知れぬ男だ。

（通常能力は一つだが、相手は教会だ。油断はできない。きっと卑劣な手を使ってくるはずだ。それにあの自信に満ちた顔も気になる）
「だがこの程度で勝ったになるなよ。静電気の恐ろしさを教えてやる」

奴の身体にどんどん砂鉄が集まっていく。

これほどの砂鉄どこから現れたのだ！

まさか、これも奴のパートナーの仕業か？ 近くにいるのか？

姿は見えないけど。

「砂鉄の鎧に砂鉄剣、これこそ、最強の砂鉄武装だ」

「静電気、なかなかやつかいな、能力だ」

「発火だけが俺の力じゃない、静電気を上手く使えばこんなことだって出来るだぜ」

リュックからエロゲーを取り出し、素早く木刀に変える。

これなら酸化も防げるはずだ。

「考えたな、だがその程度では俺様は倒せん」

木刀を構え、相手の隙を窺う。下手に動く事は出来ない。

（クソ！ 全然隙がない。無いなら作るしかないな）

右斜め後ろに控えるスピカに視線を送り。

「同時に攻撃するぞ。お前は後ろから俺は正面から行く」

「わかった」

「いいぜ、二人掛かりでも負ける気がしない。どこかれても掛かってこいよ。俺は一步も動かないからさ」

「クソクソクソ、舐めやがって」

木刀を思い切り顔面に向かって振り落す。脳天直撃だぜ。

そしてスピカの鋭い突きが背中に綺麗に決まった。

しかし砕けたのは木刀だった。スピカの突きもあまり効いていないようだ。

「痛いぞ、めっちゃ痛いぞ。何て硬さだ。先に拳が壊れるぞ」

（バかな！ 鋼鉄すら砕く、スピカの拳が効かないだと。修業して各段にパワーアップしているはずなのに、ありえない）

手を擦りながら地面を転がっているスピカを見て驚愕した。まあ鋼鉄を砕いたと言っても、薄くてだいぶ劣化したやつなんだけどね。それでもかなりの強度はあったはずだ。

俺の木刀も壊れたしな、鉄は酸化するし、なかなか厄介な敵だな。「どうした。貴様等の全力はこの程度なのか？ 痛くもかゆくもないな。まあムシケラにはお似合いの攻撃だな。フハハハハハ」

（あの砂鉄を何とかしないと、焰を倒すことはできないな。そうだ、塩水でもぶつけてやろう）

「スピカ、塩水って生成できるか？」

「塩水だな、もちろんできるぞ。しかし時間がかかる」

「大丈夫だ、奴は動かないんじゃない、動けないんだ」

「なんだ、そうなのか？ なら安心だな」

（磁力じゃなくて、静電気だから——塩水が効くはずだ）

「小賢しいことを考えているようだな。残念だが俺様に死角んない」

「大した自信だな、そんなもんやってみないとわからないだろう」

「なら、来いよ！ お前らの希望は全て打ち砕いて、絶望の底に沈めてやる」

「できたわよ、塩水」

三角フラスコに入った塩水を受け取り、焔に向かって投げつけた。でも砂鉄の壁に阻まれて届かなかった。

（砂鉄のよる絶対防御か？ なかなかやるな、でもそれくらいは予想の範疇だ。塩水を受け取ったときにスピカにもう一つ生成を頼んである。まあ、塩水は陽動みたいなもんだ。当たったらラッキーで কিনやつだ）

「無駄だということがわかったようだな、なら死ね。そしてその結晶を頂く」

無数の槍を形成し投げてくる。

その数、二十前後。

どれも砂鉄で作られたものだ。

だから壊すのは容易い。

俺には秘策があるからな。

「バカ、なぜなぜなぜだ！ なぜ砂鉄が届かない、容易く崩れてしまった。なぜだ！ 一体何をしゃがった」

「洗剤だよ。静電気ってさあ、摩擦を利用してるんだろ。だからさ、洗剤を使っただよ。摩擦を小さくするためにな。あと周りをよく見る」

「なんだ、この泡わ。いつの間に——俺の俺の砂鉄の鎧に浸み込んでいく。隙間から入っていく——洗剤が——鎧が壊れていく、無敵の鎧が——」

「自分の力を過信し、俺のパートナーの実力を甘くみた！ お前の負けだ。命だけは助けてやる、大人しく捕まれ焔」

「クソクソクソ、これで終わったと思うなよ。俺にはまだ切り札が

あるだよ」

「負け惜しみだな！
いうのだ」

静電気の使えない、今のお前に何ができると

「油断してはダメよ。
ああ、そうだな」

何か嫌な予感がするの？」

第21話 戦闘その2 カンナギルナまたの名をベルヴィル

「今、やれ。奴のリュックを溶かせ」

「何っ！」

音をたててリュックが溶けらしていた。間一髪、投げ捨てたため肉体にダメージはなかったが、エロゲー全て使い物にならなくなった。だが、始まりの書だけは無事だったので手に持っている。しかし俺にはこれを扱いこなすことはできない。

「これで、貴様も能力が使えなくなったというわけだな。さあどうする」

「スピカ、敵位置はわかるか？ 魔力探知というのはできるか」

「私の索敵スキルをなめないで。ええ、もちろんできるわ」

「なら、頼む」

「任せて」

「作戦開始だ」

焰に向かって全力で躊躇なく走り出す。敵の攻撃がどこからくるかわからない。

「来るな来るな来るな。奴を近づけさせるな。全力で阻止しろ」

腕、足が痛い、身体中が痛い。強い酸をかけられたみたい——

——でも止まらない。これくらいの痛み我慢できる。コイツは多くの命を奪った、そんな奴にくすることはできない。それに焰を惑わした絶対に教会の奴等は許さない。俺は必ず焰を止めてみせる。

「スピカ、まだか？ まだ、敵の位置はつかめないのか？ できるだけ、急いでくれ」

（痛い痛い痛い、イタイ、イタイ、イタイ。身体が溶かされるといふのは、想像を絶する痛みだ。並大抵の人間では耐えられないだろう。俺も限界だ。このまま死ぬのか？）

「おい、しっかりしろ。気を確かに持って」

スピカの声が聞こえた意識が朦朧としているのに、ハッキリと聞

こえた。

（そうだな、ここで倒れるわけにはいかないよな。誓ったはずだ、守ると。スピカにこんな痛い思いをさせるわけにはいかない。全て俺が引き受けてやる。必ずスピカだけは守る。この身体がボロボロになろうとな、絶対に守る。それが俺の矜持だ）

「ああ、俺は平気だ。だから、お前は索敵に集中しろいいな」

スピカの姿は視界には入らないが、声が届く距離にはいるんだろ
う。

「本当に大丈夫か？ そんなボロボロな身体で、今にも倒れそうじゃないか？」

「何、こんなわ。掠り傷だ、唾でも付けとけばすぐに治る。だからそんな、泣きそうな顔をするな」

スピカがどんどん近付いてくるのがわかる。ちらりと振り向くと目を赤くはらしてスピカ顔があつた。酷い顔だなと思った全然可愛くない。女の子はやっぱり一番笑顔が可愛いと心底思った。

「でも――」

「何、心配はいらないよ。ホント大丈夫だから」

だから俺は痛みをこらえてニコリ笑う。

「何、二人だけの空気を作ってたんだよ。ふざけやがって。俺様は無視されるのが一番嫌いなんだよ。もう少し痛ぶってから殺そうと思つたが止めた。今すぐ殺してやるよ。覚悟しな」

（クソ！ やられる。ここで死ぬのか？）

「諦めるな、希望を捨てなければ、勝機は必ずあるはずだ！ 私を信じろ」

「いまさら何をしてもう遅い」

「それはどうかな？」

「バカな？ 黄金の楯だといつの間に」

「私を舐めるなど、など言えばわかる。人間風情が」

「助かったぜ、スピカ」

「礼には及ばないぜ、当然のことをしただけだからな。敵の場所が

わかったぞ」

「それは本当か？」

「ああ、二時の方角だ。これを使い。銀の槍だ」

「ありがたく使わせてもらぜ」

銀の槍を思い切り投げる。

(当たれ)

空間に亀裂がはしるとともに声が聞こえた。その声に聞き覚えがある、カンナギルナものだ。まず、間違いはないだろう、ファンだからな。

「オプティカルカモフラージュを見破るとは流石ね」

「やっと姿を現したな、黒幕」

突然赤い絨毯表れ、その上にフランス人形みたいな少女が佇んでいた。

どこか絵になる、まるでお姫様みたい品格を醸し出している。

とても美しい姿で、思わず息を吞んでしまうほどの可憐さがあつた。

「何を見惚れている、奴は敵だぞ。これだから男というヤツは救いようがない。少しは見込みがあると思ったが、貴様ただのエロ餓鬼だな。救いようのない変態だ。失望した」

「そこまで言わなくてもいいだろう。俺は魔法少女一筋だから、機嫌なおしてよね」

「誰が魔法少女だ。わたしはそんなモノにはならない——と何度も言っているだろうが——変態」

スピカが何か叫んでいるが気にすることなく、視線を焰に戻す。

焰は騎士の礼を取っていた。

片膝をついてしゃがみ、握った右手を左胸に当て頭を垂れるこの礼は、騎士が仕える主人に向かってする最敬礼。

絨毯の上を堂々とフランス人形が進んでくる。

ふんわり柔らかそうな縦ロール、色は鮮やかな金色で頭上に光らせた王冠には、色鮮やかな宝石が幾つも散りばめられている。豪華

な白いドレス、フリルがふんだんに使われおり、少女の魅力を最大限に引き出している。身体中から溢れだす、気品、品格、風格、どれも高貴なもので、その立ち振る舞いは王族のモノ。そして身に纏う空気も女王のモノである。

女王であることを示す、紅く長いマントが彼女のあとを追っている。

「それがキミの本当の姿か？　美しい、とても美しいよ。まるで中世の人だ」

「お褒めに預かり光栄ですわ、でもあなここで死ぬのよ、私に殺されちゃうの。ウフフフ。楽しいショーの始まりよ」

「その前に一つ訊いてもいいか」

「なんですね？」

「お店はどうした？　ここに居ていいのか」

「それは心配ないは、影武者いるから」

「なら何の気兼ね無く戦える」

「あ、思い出したわ、確かベルヴィル、そんな名前だった気がする。
かさんかすいそ過酸化水素使い。血まみれの王女」

かさんかすいそ過酸化水素：化学式 H_2O_2 で表される化合物。

しばしば過水かすいと略称される。

主に水溶液が酸化剤・殺菌剤・漂白剤として利用される。

性質：常温では無色の水よりわずかに粘度の高い弱酸性の液体。

エタノール、エーテル、水に可溶。僅かにオゾンに似た臭いがする。

過酸化水素は不安定で酸素を放出しやすく、非常に強力な酸化力を持つヒドロキシラジカルを生成しやすい。過酸化水素は活性酸素の一種ではあるが、フリーラジカルではない。

強い腐食性を持ち、高濃度のものが皮膚に付着すると痛みをと

なう白斑が生じる。

また、可燃物と混合すると過酸化物を生成、発火させることがある。

水に溶けると、分解されるまでは水生生物に対して若干の毒性を持つ。

実験室では、酸素を得る際に使われる。

この反応式は以下の通りである。

反応速度を大きくするため触媒として二酸化マンガンや酵素の一種カタラーゼを使用する。傷口の消毒時に生じる泡は体内にあるカタラーゼが触媒として働いて生じる酸素である。なお、過酸化水素は消防法第二条第七項及び別表第一第六類二号により危険物第六類（酸化性液体）に指定されている。また、重量%で六%を超える濃度の水溶液は毒物及び劇物取締法により劇物に指定されている。

「彼女の手料理を食べると身体からメタノールが出るんだよ。食べても身体の以上に気が付かない人がほとんどだ。まあ極まれにいるが、大半の人は気がつかないまま焼け死んでいくさ」

メタノールは有機溶媒などとして用いられるアルコールの一種である。

別名として、メチルアルコール、木精、カルビノール、メチールとも呼ばれる。

示性式は CH_3OH で、一連のアルコールの中で最も単純な分子構造を持つ。

ホルマリンの原料、アルコールランプなどの燃料として広く使われる。

燃料電池の水素の供給源としても注目されている。

「メタノールか？ なかなか恐ろしい力だ。だがわからない、なぜ人体発火なのだ。他にも殺し方はあっただろう」

「人が燃えるのが好きだからな？ 人が悶え苦しむ姿を見ると恍惚

するんだよ」

「狂ってやがる」

「お前みたいな雑魚の感性和俺様の感性を一緒にするな。胸糞悪い……と、とっと焼け死にやがれ」

「死ぬかよ」

赤く赤く燃える炎が放つたれるが、あっさり黄金の楯に防がれてしまう。

焰を睨めつけ降伏を促す、やっぱり俺には焰を殺すことはできない。でも見逃すこともできない。また犠牲者が出てしまうからだ。命の恩字と戦わなければいけない葛藤に苦しんでいると、焰は白衣の内ポケットから黄金に輝く鉱石を取り出し、見せつけてくる。

「これが何かわかるか？」

「そ、それは希望の鉱石」

「ほおーバカなお前でも知っているようだな」

希望の鉱石と呼ばれる未知の鉱石がある。

これの輸入より火力発電が主流なり、原子力の時代は終わったのである。

だから……希望鉱石には謎が多い、ゆえに未知鉱石と呼ばれている。

鉱山元不明。成分不明。わかっていることはアメリカがそれを大量に有しているといことだ。

日本もアメリカから、高値で買っている。

アメリカがそれをどのようにして手に入れたのかは謎のままだ。

一説では、宇宙から飛来した隕石のようなものだと言われている。

その実体は謎のままだ。

そして戦争が起こった。

戦争のきっかけは些細なものだった。

いつだってそうだ！

くだらないブライドの性で戦争が起こる。

いつだって苦しむのは弱者だ。

何も変わらない。

だから権威を振りかざすヤツは嫌いだ。

「これから面白いモノを見せてやる」

「アレをやるつもりですか？ 待つのです人間。アレは私に掛かる
負荷が大き過ぎます」

「うるさい。黙って俺に従え。口答えは許さん」

薄ら笑いを浮かべ、希望の鉱石を食べやがった。美味しいのか？
そういう問題ではないな。一体何が起こるというのだ。

「見るがいいこれが自立型人形の真の力だ」

「まさか合体しただと。これが真の力だというのか」

「これこそがまさに一心同体。俺が辿り着いた境地。お前でもは一生
辿り着けない場所だ」

嘲るように叫ぶその姿はとても禍々しく、もはや人ではなかった。
これが本当に真の姿なのか？ 俺にはそうは思えない。ベルヴィ
ルも苦しんでいるように見える。

全身から溢れだす瘴気しょうきに蝕まれ、醜い、とても醜い姿をしている。
かろうじて人の形を保っているが、もはや人とは呼べない。バケ
モノだ。

「バ力なことを、アレは禁呪。禁じられた技。悪魔に魂を売り渡す
代わりに絶大な力を手に入れる」

「対価は生体エネルギーということか？」

「ええ、そうよ。しかも性質が悪いことに、契約者。つまり人間の
方にはなのリスクもない。一見、一心同体だと思えが、それは間違
いだ。人間の方には、一切ダメージを受けないだ」

「道具のように使いやがって許せない奴だ。ぶん殴ってやる」

怒りを露わにして、大声で叫ぶ。拳は強く握っていた。臨戦態勢
は整っていた。

今にも跳びかからん勢いだったが——あることに気付いた。

スピカの様子が可笑しい。

殺気だっていたのに、今は静かだ。

それはまるで嵐の来る前の静けさ、何かよくないことが起こると直感した。

第22話 戦闘その3 黒真珠・神への反逆者

「フフフフ」

悪魔のような、背筋がぞつとする、不気味な笑い声が木霊する。スピカの髪が青から黒になり、ところどころ、血のように赤い場所もある。肌も浅黒くなり、瞳は地獄の業火のように赤い。先まで着ていたトレンチコートは脱ぎ捨てられ、セーラー服が露になっている。

「こちらの方が動きやすいな」

「目覚めたか、黒真珠^{カオス}。待ちわびたぞ」

「スピカに何をした。答えろ」

「別に俺は何もしていないさ。本来の姿に戻っただけだ」

「どういうことだ」

「どうもこうもない。目に見えているモノが真実だ。現実を受け入れろ」

改めてスピカを見据える、敵意を剥き出しにした瞳は、まあいつも通りだろう。コイツはいつも俺を殺そうとしているからな。隙あれば殺そうとする。正確に言えばただ血が欲しいだけなのかもしれないが、手段を選ばないところが怖い。

「私は黒真珠^{カオス}、神への反逆者にして世界の崩壊を望む者」

「お前……知ってるか？ 自立型人形の力の源は我欲なんだよ。俺の人形が願ったことは清楚女性になりたいというものだった。何でそんなことを願ったかという、コレがバカみたいで、ホント笑えるんだがな！ コイツ、娼婦の娘なんだよ、小さい頃からやりまくってたんだってよ。マジ受ける。しまいには親に売られて神の器にされちゃったんだってよ。その頃にはもう心は、壊れてたみたいだけだな。まあこれは教会から聞いた話なんだけだな。マジ、受け

るだろう、処女を十二で失ったんだってよ。まあ、その前から男の相手はしてたみたいだけどな。淫みだらな人形だと思わないか？」

「そんな歪んだ環境で育ったから、能力も歪んだのか？ 全然笑えねよ、スピカ—— お前も—— 闇に捕らわれているというのか？ なら俺が必ず救ってやる」

「我の目覚めとともに世界は破滅へと向かう、もはや誰にも止めることはできない」

「正気に戻れ、お前はこんなことを望んでいんじゃないだろう。こ
んなくだらないことをするために戦っていたじゃないだろう。俺
の知っている、お前は確かに生意気だったが、正義の味方に憧れて
いた。人を愛する心を持っていたはずだ。おい、スピカ、なんとか
言えよ。聞こえてんだろう」

「全てを破壊するまで止まらないぜ、神への恨み、憎しみ、負の感
情を吸収し力へと変える。究極の兵器、それが黒真珠カオス、もはや誰に
も止めることはできない」

銀色の細剣を生成して、蝶のように軽やかに舞い、激しい突きを
繰り出してくる。

スカートが靡く、美しい太腿が見えるがいつもみたいに楽しむ余
裕はない。

「止めるスピカ、俺がわからないのか？ 味方だ。危害加えない。
信じろ」

「今のソイツに何を言っても無駄だ！ 貴様の声は決して届くこと
はない」

「クソ！ 完全に暴走してやがる。一体なぜこんなことになったん
だ。理由がわからない」

猛攻を皮一枚のところであわし続ける。かわすことだけに全神経
を傾ける。

（さすがにいつまでもかわし続けられないよな。体力にも限度があ

るしな)

「なかなか頑張るじゃないか？ 虫ケラ以下ゴミの分際で。だがそろそろ限界のようだな」

息が上手くできない。頭くらくらす。身体が重い。目が疲れてきた。体力的にも厳しいな、このままではやられる。

しかし俺にはスピカを傷つけることなどできるはずがない。

「スピカ、目を覚ませ！ スピカスピカ」

「うるさい！ その名で呼ぶな。私は私は——」

「スピカ、お前が何と言おうと俺はスピカと呼び続ける。これだけは譲れない。大切な仲間だから、帰ってこいよ、スピカ」

「うるさいうるさいうるさいうるさい」

『カオスの心に隙が生まれた、チャンスは今しかない。私を使え』

ああ、わかったぜ。俺は素早く始まりの書を開き読み上げる。

『其が望むは深淵、我が望むは世界。神の名を冠す者よ。我の呼びかけに答えよ。深き闇より生まれし者よ、其が願い叶えて信ぜよ。』

我は始まりを司る神じゃからな。さあ、我に全てさらせ、包み隠さず、偽らず、飾らないありのままの姿を我に見せてくれ』

言語眼によって映しだされた呪文ものを読み上げると、黄金色に輝き出す始まりの書。

これはスピカが現れた時と同じだ、イヤあの時よりも光が強い。それに意識が吸い込まれていく気がする。この感覚はスピカの血を飲んだ時に感じ脱力感に似ている。誰かの意識引っ張られているような俺の中に何かが流れ込んでくるような不思議な感覚だ。

ビジョンが見えてきた、それは輪郭は臃げでよく見えない。幼い幼い女の子。

「ねえ、何でキミは泣いているの？」

声が届くとは思ってなかった。

ただ声を掛けずにはいられなかった。

あまり寂しそうで、孤独で震えていたから。

その寂しさは誰よりも知っているつもりだから……ほって置けなかった。

まるで昔の自分を見ているようで我慢ができなかった。

「キミはずっと独りでココにいるの」

届くはずがないと思いながら喋り続けた。

その程度のことと、彼女の孤独を埋められるとは思ってなかったけど。

俺は叫び続ける。

何度も何度も何度も何度も何度も、喉がかれるまで、ひたすら叫び続けた。

「誰からも愛されたことのない人が——人を愛せると思う？」

そのの呟きは、誰に問うわけでもない。

答えを求めているわけでもない。

ただ自分に言い聞かせるだけのもの

「わたしは多くの人を殺した。仲間を守るために仲間を殺し、友達を守るために友達を殺した。自分の身を守るために多く人間を殺した。殺したくなんてなかった。でも死にたくもなかった。でももう疲れたな、ゆくり眠りたいよ。ココで静かに眠りたいの、今はそれだけなの。もうわたしの物語は終わり。これで完結」

「ふざけるな！ 犠牲の上になり経つ世界など俺は認めない。絶望が世界を覆い隠そうと、俺は希望を捨てない。どんな悲しみが待ち受けようと乗り越えて行く。だからお前も諦めるな」

悲痛な叫びがこだまする。

決して彼女には届くことのない声。

ココがどういう場所なのかは分からない。

だけど、思いは通じると信じたかった。

希望は捨てない。可能性を信じる。そして明日へと歩き出す。

だから、前に進むため叫び続ける――

「俺を信じる。必ず朝は来る。そしたらまた、笑って暮らせる。だから諦めるな。自分の可能性を信じる。俺はいつまでも傍にいてやるから。もうお前を独りにしないから。俺を信じる」

少女に向かって思い切り手を伸ばす、届く、絶対に届かせる。握り締めて抱きしめてやる。次元の壁だろうとなんだだろうと越えてみせる。

信じる力は、思いの力は、世界を変えるだ。

それが俺の信念で折れるこのない決意だ。もうイヤなんだ――何かを失うのは――

「届け――」

何かが砕ける音がした。

とても脆く儂い音。

けれど、どこか力強さを感じた。

不思議音だった。

さらに腕を伸ばす。

もう少しで届く。

あと少しだ。

そう確信した時に強い風が吹き、弾かれる。

黒い影が現れ、声が聞こえた。それはとても希薄でかげろうのような存在だった。

非常に危^{あやう}姿だった。半透明でまるで幽霊みたいで、存在感を感じほとんど感じさせなかった。

「何故わからない。何故邪魔をする。彼女はそんなこと望んでいない。ただ静かに休みたいだけだ。私は彼女の一部だからそれが痛いほどわかる」

「生憎、俺は人の話しを聞かない性格でな、疎まれようと、嫌われよう、憎まれようと、彼女の傍を離れるきはないさ。それに彼女の血を飲まないと死ぬからな。死にたくないし、俺は独りよがり魔術

師だから。別に熱血漢ぶりたいわけじゃない。ただそういう性格なだけだ」

「全く身勝手な性格じゃな、まさに我欲の塊じゃないか。お前みたいな男を自己中と呼ぶんだろう。全く、自己中で変態でオタクなんて最悪最低のろくでなしだ。お前はホント救いようのないクズだな。私がこの世で一番嫌いなタイプからもしれない」

「それでいいさ。俺はろくでなしのクズ野郎だ。人に誇れるものなど何もない。だから、生きるためにスピ力が必要だ。俺は連れて帰る。それだけだ、彼女の意味など関係ない。異論は認めない。だって俺は独りよがり魔術師だから」

「はい、そうですねと帰すと思うか。全く持って勝手な奴だ。やっぱりお前は私の一番嫌いなタイプだ。だから彼女は絶対お前には渡さない」

「なら、お前を倒して連れて帰る。俺は自分の意見を絶対に変えない」

「それは無理な話した。彼女が私で、私が彼女だ。つまり私を倒すということは彼女を倒すということに等しい。さあどうする、それでも私を殺すか？ まあそれもいいだろう」

第23話 戦闘その4 友情の剣、フェザーブレイド

「なら殺さない。スピカを失うわけにはいかないしな。それにもとも争い事は好きじゃないだ。でも死にたくないし、スピカの側に居たいから、お前を説得して連れて帰る」

「そんなに死にたくないのか？ 本当に自分のことしか考えてないな。本当彼女がそれを望んでいると思っっているのか、彼女のことをちゃんと考えているならそんなことは言えないはずだ。やはり私は貴様が嫌いだ」

「ろくでなしのごくつぶしの男だが、人の気持ちは敏感だと思っっている。一番悲しんでるのはお前なんじゃないか？ 確かにスピカはお前の一部なのかもしれない。でも拒絶された。最も信頼する者に裏切られた。お前と俺は似ている、だから俺のことが嫌いだろう。しかし本当に一番嫌いなのは、自分自身だ。だから全てを壊そうとしてている。真に助けを求めているはお前なんじゃないのか、カオス」

「ならそうだって言うだ。貴様に何がわかる。私に自身本当はどうすればいいのか、わからないだよ。助けてくれると言うのか？ ろくでなしで変態で自己中な貴様が」

「助けるさ、お前が本当に助けを求めているなら——まとめて全部、助けるさ。」

もう誰も見捨てない。決めだ！ 誓った、あの日に——だから諦めない。

別に俺を信じろとは言わない。ただ自分の可能性を信じろ。幸福って言うのはなジタバタもがき苦しんだ奴だけ手にすることができなんだよ。幸福なってる他人からもらうものじゃないんだよ、自分で実感するものなんだよ。俺はそう思っているし、そう信じている。だからまず自分を愛することから始めればいいだよ」

「私達を救おうと言う、救済する言うのか？ そんなことできるはずがない。」

私は彼女の我欲によって生み出されただけの存在。忌み嫌われている私を、私が信じる。そんなことできるわけじゃないの？ 私は私が許せない。だって彼女を一番苦しめているのは私だから――

彼女の能力は創造、その能力に例外はない。

人格すら生み出すことができる。

友達が欲しかったという理由で生み出された。

彼女はいつも独りだった。生まれてすぐ人の殺し方を覚えた。人が息をするように、彼女は人を殺す。何の躊躇もなく、まるで害虫を駆除するかのように、平気な顔で人を殺す。

それが私の生まれる前の彼女――でも彼女は温もりをしてしまった。

そして私が生まれた。

私は負の情念、彼女に殺された者達の怨念が寄り集まって出来たモノ。世界の崩壊を望む意志。

それが私、カオス。

私達の手は汚れていく。人を殺し過ぎた。ああ、まさに化け物だ！ 人殺しで、同族殺しで、救済される価値もないバケモノだ。救われる価値などみじんもない」

「俺は人殺しは嫌いだ。平気で人を殺せるヤツは人間じゃない。だけど自分をバケモノだと言うヤツは最も嫌いだ」

「ならどうしろというだ。わたしは彼女を苦しめる」

「そんなのは自分で考えろ、お前が彼女によって生み出されたものだろうと……意思があるはずだ。だから自分で答えを見つけられるはずだ。お前がどんな理由で生み出されたのか、どういう存在のか何て関係ない。お前は自分のしたいことだけを考える。お前は難しく考え過ぎなんだよ。俺を見るよ、何も考えていない。ホント自分のことしか考えてないだろ」

「ああ、そうだな。貴様ほど自己中な人間はそうはいない。私には到底真似のできないことだ。答えが見つかるまで一緒に居てくれる

？」

「当たり前だろう。仲間なんだから。だが俺はお前らを信用したわけでも、受け入れるわけでもないからな。俺はそれほど優しい人間でもお人好しでもないからな、覚えとけ」

「ありがとう。素直じゃないがいいやつだ。彼女が気に入るはずだ。私もお主が気に入った。しばらく始まりの書の中で休ませて思う」
（今のビジョンは現実ものなのか？ スピカはどうなった。頭痛、目眩、耳鳴り。

これは貧血の時の症状だ。血が足りない。それに手にも持っていないはずの始まりの書が消えている。一体どうしたことだ）

「まさか、始まりの書を取り込みこで、自我を取り戻すとは計算外のことが起こった。使えない奴だ。俺様直々にドドメを刺してやる」

かわせない、やられる。結局、焰もスピカも、何も救うことができないのか？ 自分の無力さを呪うことしかできなかった。

ここで死ぬのか？ 何も成し遂げないまま、何も変えられないまま。絶望に吞まれて死ぬのか？ そして死を覚悟した瞬間ありえないことが起こった。

目の前が、全て赤に染まった。

それは真紅のように赤く。しかしどこかおどろおどろしくもあるが、決して恐いものではなく、どこか儚さと美しさあった。そしてねちよねちよと肌にこびりつく、血生臭いもので不快な感触が全身に纏わりつく。

これは血血血血血血だ。この艶めかしい液体は、紛れもなく血だ。

誰の血だ！ 俺の血か？ いや違うこれはスピカの血だ。
なぜなぜなぜ。

一体何が起こった、わからない。

何もわからない。

一瞬で頭が真白になった。何も考えられなかった。何も考ええなかった。

「何で俺なんかを庇ったんだよ。アルネシア杯で優勝するだろう。約束を守るだろう。だったらこんな所で死ぬなよ。おい！俺達は一心同体何たる。何とか言えよ。全部嘘だったかよ。お前の覚悟はその程度なのかよ」

「脆い、これが最強最悪と畏れられた魔導具なのか。あまりにも脆すぎる、話にならない」

俺を庇ってスピカがやられてしまった。

俺のせいだ、俺が弱いからスピカが……

守ってやるて——約束したのに——結局守れなかった。

「何、ぼっさしている。死にたいのか、貴様は」

全身をパワードスーツで武装した白山がそこにいた。

「何故！お前がここにいます。その格好はなんだ」

「今はそんなことどうでもいいだろう」

「いいか、奴を倒すことだけ考えろ。他のことは考えるな。目の前の敵を倒すことだけに集中するだ。お前の力なら必ずヤツを倒せるはずだ。俺はそう信じている」

白山を包むパワードスーツから煙りが上がる。長くは持ちそうにない。

相手は火に電気を使う。

相性は最悪だ。普通戦ってもまず白山に勝めはない。

「これを使え！我が主から餞別だ」
せんべつ

（このエロゲーは三人で作った思い出のゲーム。あいつ等との友情の証。俺がキャラクター原案で、神中がストーリーを担当。白山はプログラムと音楽をやってくれた。アイツはあまり乗り気じゃなかったな、結局、たいして売れなかったけど——それ以降作っていないけど——最初で最後の作品。でも大切な思い出。明日への翼。それがこのゲームのタイトル）

エロゲーを剣に変える力。

剣の強さは思い出での大切さで決まる。

友情の剣、フェザーブレイド。

羽根のように軽く、しかし決して折れることのない最強の剣。

その形状は長剣。刀身も柄も白。全てが白い剣。

刃は鋭く、いかなるものでも斬り裂く。

この剣なら奴を倒すことができる。

だが間に合わなかった。白山はすでに地面に倒れていた。

生死は不明だが。

「安心しろコイツはまだ死んでねえよ。じっくり痛ぶってから殺してやるよ」

「汚い足を退けろ」

「誰にもの言ってんだ！ 貴様から先に殺してやるよ」

「カサンドラ、スピカと白山のことを頼む。俺はコイツを倒す」

「ええ、任せって。今の私なら隔絶結界を張ることもできるわ」

「俺様を無視するんじゃない。無視されるのが一番嫌いのんだよ。望み通り貴様から殺してやる。覚悟しらがれ、負け犬くん」

「火だろう静電気だろうと全て吹き飛ばしてやる、俺の風で」

「その前に感電死させてやるよ。スパーク・ゲヘナ」

「お前の攻撃は俺には届かない。決して届くはずがないんだ。お前と俺では背負っているものが違い過ぎる。覚悟なき刃など俺には届かない」

スピカの想いを白山の思いを無駄にするわけにはいかない。

全ての思いをこの剣にかけて奴を斬る。

「電炎^{でんえん}を斬ったというのか。何だその剣。クソ！ 死ね死ね死ね死ねしまえ」

ヤツの攻撃を全てかわし、間合いを詰める。

右腕を斬り裂く。それでももう細剣を使うことはできないはずだ。

「バカな、なんだその剣は？ なぜそんなに身体能力が上がった。風、風はどうした」

「本当に風を操れると思ったか？ 残念、俺にそんな力はない。この剣の俊敏性上がるそれだけだ」

頭の回転がよくなるだけでだ。あくまでも特殊能力はだがな？

剣の強さは思い出の大切さでまわる。まあそれでも、敏捷性も上がっていないけど、奴は俺のスピードについてこれなかった。死を恐れたからだ。だから俺の力を見誤ったのだ。

「貴様の負けだ。大人しく捕まれ」

「ゴミクズに俺が負けた、そんなはずが……あるって、いいはずがない！俺は最強なんだ。負け組は嫌だ——」

「予断するな！戦意は喪失していない」

「もう遅い死ね」

残った左腕で襲い掛かってきた。

「バカな、今までの攻撃をかわしたというのか？ありえない」

「貴様の考えは全て読めている。」

不意打ちのつもりだたんだろうが、残念。

今の俺には通じない。筋肉の動きが手に取るようにわかるかな」

「クソ、クソ、クソ——なぜ当たらないだ。クソ——」

「無駄だというのがまだわからないようだな」

「なら究極の奥義を見せてやる。俺の魂を喰らえ。ベルヴィル」

「悪魔に魂を売ったのね。愚かだわ！なぜこの術が？禁呪と言われているか知ってる」

「人間の方リスク無く。自動人形から生体エネルギーを吸うからだろ」

「それは誤りだわ！バーサーカーの恐怖はこれから始まるのよ」

「どういうことだ」

「理性を失った人間と自立型人形の合体は『真のバケモノの誕生』を意味する。もはや誰にも止めることはできないわ、世界の全てを焼きつくすまで。これがあなたの望んだ未来なのね」

「世界の崩壊——それが俺の望んだ未来だというのか？」

「ええ、そうよ。あなたはこうなる前に殺すことができた。でもしなかった」

「俺は………」

「悔んでる時間はないわ。バケモノがその姿を現すわ。あなたにア

レが止められるかしら」

「なんだアレは気持ち悪い。皮膚が肉が溶けてやがる。うえっ」
辺りを包む腐臭。うえっ、マジ吐きそう、気持ち悪い。

切断された右腕からは何本も触手が生えている。

歩くたびアルファルトが酸化していく。

「情けないわ！ 殺す覚悟も無いのにアルネシア杯に参加するなんて。これは生き残りを賭けた勝負なんですよ」

あまたの触手がカサンドラを襲うが気にすることなく切断していく。

黒剣・エクリプス、なんて凄いい切れ味と強度を持っているだ。

「俺は人を殺さない。どんな悪人でもだ。それが俺の矜持だ。だからお前の手も借りない。手出し無用だ」

「綺麗事だけで生きていけるほどこの世界は優しくない。それを私は痛いほど知っているわ」

「ならあのバケモノを殺さずに捕まえてやる。俺の誇りにかけて」
幸い動きは遅い。この程度のスピードなら攻撃を喰らうことはないだろう。

まあ、厄介なのはあの触手だけか？

アルファルトを蹴って走り出す。

どんどん加速して行く。もっと速く、もっと速く、誰も追いつけない次元に！

「いまだ！ もらった」

うなじを柄で思い切り叩きつける。これで気を失うはずだ。

「バカな、倒れない。全然効いていないのか？ しかも触れたところが蝕まれている」

「早くそれを捨てる、手を持っていかれぞ」

正面からカランドラの機械的な声が聞こえ剣を地面に投げ捨てる。一瞬にして剣が消滅してしまった。額から油汗がらだらりと流れ、肝を冷やした。

黒いドレスが所々溶かされている、なんともエロい格好になって

いる。でも黒剣・エクリプスの斬れ味はおとろえてないみたいだ。まさに魔剣と呼ぶにふさわしいけんだ。

「これでわかっただろう。殺す気でいかなければ死ぬぞ。それでも私は構わないがな」

（彼女の言う通りだ。しかし俺は活慈剣^{かつじけん}を目指す。生かし、慈しむことを忘れない。それが俺の目標とする剣だ）

「アレはもはや人ではない、バケモノだ。迷う余地ないであろう。
なぜ躊躇^{ためらう}う」

「それでも——嫌なんだ。傷つくのを見るのも。傷つけるのも全部イヤーなんだ。だってそれじゃあ、誰も救われない。傷つける方も傷つけられた方も、みんなみんな不幸になるだけだ」

「じゃあこのままアイツをのさばらせておくつもりか？ やはり世界の破滅を望むのだな。器に小さく男よ」

（俺はどうすればいいだ。どんな生物だって生きているんだ。それを殺すことなんて俺にはできない）

「ほんとと呆れたわ。久遠の魔導具が選んだ相手だから期待していたが、とんだ腰抜けだ」

一息ついて——沈黙が続く。
嫌な空気だ。

息苦しいココに居たくない逃げだした。

そんな気持ちになつていた。

最初から無理だっただよ。

俺にできるはずがなかったんだ。

ここで死んだら争いのない平和な世界に行けるかな？

もう俺は疲れたよ

第24話 決着

「我が主はお前みたいなの、クズに何を期待していたのかわからない」
胸ぐらを掴み、腑抜け顔をした俺に向かって叫んで来た。俺は耳を抑え、目と口をつぐみ考えるのを止めた。俺はもう疲れたんだ。やれることは全部やったじゃないか？ もう休んでいいだと自分に言い聞かせる。頭が真白になり眠たくなってきた、これで終わるんだな、世界も俺もそれもいいかもしれない。だって俺に人殺しなんて無理だよ。できるわけがない。

「悔しくないのか？ 大切な者を踏みにじられて。私は悔しい、そして無力な自分が腹立たしい」

顔面を思いきり叩かれ、膝について倒れ込む。頬がヒリヒリする、痛い、心が痛む。

俺が本当に望んだ結末はこんなじゃないはずだ。

こんなバッドエンドでいいはずがない。

俺の物語はまだ終わらない、終わらすわけにはいかない。

「貴様はそこで倒れている、私一人で奴を倒す。とんだ腰抜けだったな」

地面に倒れこんだまま、俺は自問自答を繰り返していた。まるで出口のない迷路に迷い込んでしまった心境だ。自分の為すべきことがまるで見えてこない。絶望と後悔と自責の念が俺を支配する。

俺は何の為に戦っていたのだろうか？ もはや戦う理由すらわからない。全てのことがどうでもよくなってきた。ただ虚しくて悲しくて、ぽっかりと心に穴が開いてしまったかのような、喪失感だけが残っている。

息をするのすらめんどくさい、もはや視界には何も映らない。思考能力がどんどん落ちていく。もう疲れたな、少し休もう。俺は頑張った、やれることは全てやった。もう十分じゃないか？ あとはカサンドラに任せて、俺はもう休もう、これでいいはずだ。これが

正解のはずだ。だけど、頬をがヒリヒリ痛むよ、何でこんなに痛いだよ。

俺は俺はどうしらいだよ。頼むよ、誰か教えてくれ、俺は俺は

「——ちゃん、起きつて、お兄ちゃん起きて」

俺を呼ぶのは誰だ！　どこか懐かしい声。俺は何か大切なことを忘れている気がする。なぜ、アルネシア杯に参加しろうと思ったんだ。スピカに出会ったからか？　イヤ、違う——　もっと前に何かあったはずだ。何か大切なことが、思い出さなければいけないことが——　それが俺の戦う理由だったはずだ。決して忘れてはいけないことだったはずだ。思い出せ俺、俺はのために戦っていたはずだ。

そう、一人の少女、イヤ幼女との誓い。

己にさせた使命。

俺は俺はあの子を捜さなければいけない。

もう一度、会わなければいけない理由がある。

そのための手段としてスピカと契約してアルネシア杯に参加することになったんだ。

「全てを思い出したのね、お兄ちゃん。なら、もう大丈夫ね。戦つて、そして私を見つけて——　助けて」

「ああ、もう大丈夫だ。心配をかけたな、必ず助けに行くから——

——　もう少しだけ待ってくれ——　絶対に行くから——　這つてでも行くから——　ごめん、もう少しだけ待ってくれ」

「なぜ、お兄ちゃんが謝るの？　悪いのは私なのに、お兄ちゃんにいつぱいいっぱい迷惑かけて、今だってお兄ちゃんを困らせている。怨まれても仕方ないことたくさんしたのに、ホント優しいな。なんでそんなに優しいのかな？　言葉の通じない私に親身になってくれて、友達にもなってくれた。あの時は本当に嬉しかった。でも私はあなたの優しさを裏切った」

「ああ、突然居なくなつた時は悲しかった。怨みもした、でも今は違う」

「私を許してくれるというの？　こんな愚かな私を――」

「許す、許さないの話じゃない。お前は何もわかっていない。俺は最初から――イヤなんでもない。とにかくだ、自分を卑下するのだけは止める、俺はそういうのが一番嫌いだ」

「本当にあなたは変わらないのね、あの頃のまま、何も変わっていない、素直で優しい子」

「お前の眼は節穴か？　俺はそんな綺麗な男じゃない。何もわかってないんだな」

「もう照れちゃって、可愛いだから。あなたに力を貸したあげる。信念を、優しさを貫ける力をあがるわ」

今の一体何だっただろう。

「ぐだぐだ考えるのは俺らしくないな。俺は人の話を聞かない主義だ」

（協調性ゼロで空気が読めない男だ。それがどうした。何も気にすることはない。それが俺の生き方だから。胸を張って生きて行くだけさ）

状況を把握するために辺りを見渡す。まだカサンドラとバーサーカーが戦っていた。激しい死闘を繰り広げている。

「苦戦しているみたいだな。力を貸そうか？」

「いらん、コイツは私一人で倒す。手出し無用だ」

「まあ、そう言うなよ。俺に考えがあるんだ。力を貸してくれ、殺さずに捕まえる方法があるんだ。でも一人じゃ無理なんだよ、頼む」

「なぜ希望を捨てない。なぜ笑える。なぜそんな目ができる。何故なんだ。お前を突き動かすモノは何だ！　私の想像を超えている、ありえない、お前は一体なんだんだ」

「ただの変態さ。頼む力を貸してくれ、俺はアイツらを救いたいん

だよ」

「わかった。話だけ聞こう」

「たぶんなんだけどね、合体の核となるモノを壊せば、元に戻ると思っただよ。確証はないがやる価値はあるはずだ。俺は決して希望を捨てない。自分の可能性を信じて前へ進むだけだ。だから、俺を信じて力を貸して欲しい」

「私は何をすればいいんだ」

「俺が核を見つめるまでの時間を稼いでほしい。できるか？」

「あたりまえだ。あまり魔女を舐めるなよ」

「ああ、心強い」

目を閉じ、精神を集中させる。心の目。心眼で見ると。俺ならできるはずだ。

「見えた。そこだ」

アルファルトを蹴り、核を目指して手を伸ばす。皮膚が溶ける、痛い、物凄く痛い。だけど力を緩めることなく貫く。ここから先は我慢比べである。俺が先にコアを壊すか？ コイツが俺の腕を喰らうか？

「バカか、死ぬ気か？ とても正気の沙汰とは思えない。自殺行為だ」

言葉で言い表せないくらい痛い。でももう少しで届くはずだ。それさえ壊せば俺の勝ちだ。だからもう少しだけもってくれ、俺の腕

――頼む――

「掴んだ。これだ。壊れろ」

パリン。ガラスが砕けるような澄んだ音がした。

（やった。コアを壊したぞ。これで合体が解けるはずだ）

身体が光出す。

そして二人に別れた。焰とベルヴィルの姿が見えた。二人とも身体はボロボロである。

生きているのかさわからない。死んでも可笑しくない状態だ。見るも無残な姿だ。これが人間なれの果てなのかもしれない。

（成功したのか？）

近寄ろうとした俺の道を塞ぐ、カサンドラ。

「邪魔だ。そこをどけ」

目の前にそびえる壁。それは微動だにしない。まるで俺の声が聞こえてないみたいだ

「貴様の役目は終わった。そこで大人しく見ているんだな」

「一体何を言ってる。ちゃんと説明してくれ」

「私が片を付ける。手を出せばお前も殺す」

素早く黒剣を抜き、黒刃で親指を軽く斬り裂き、血を吸った黒剣は脈打ち紫色に光る。

俺はただ啞然としてしていた。止めることも叫ぶことも出来なかった。ヤツの放つ気に圧倒されたのだ。これが本当の魔女の力。今の俺では話にならない。次元が違い過ぎる。俺は弱い。無力だ。

魔界の門が開く。人間界と魔界を繋ぐ光。

「ケール」

ケールとは『切断』とか『破壊』という意味をもつ。

悪魔を喚起する呪文。

その悪魔の名を呼ぶだけ、使役することができる。

並の魔女ではなきないこと。悪魔契約はとも恐ろしいものなのだ。

一度悪魔と契約を結べば、その身体は普通ではなくなるという。光の中から悪魔が姿を現す。

翼を持ち、全身は黒いが、血に染まって赤くなっている部分もある。長い歯と爪をもち、異形の姿をしている。

「その女の右手を切り裂け」

その叫び声とともにベルヴィルの右手が切断される。

何かが碎ける音がした。

「うわあああ——」

二人の断末魔がアキバに響く。

「手を切られただけ死んだというのか？ 自立人形は不死身じゃない

「いのか？ それになぜ焰まで死んだ。どういうことだ。カサンドラ」
「コアを破壊されれば自立人形といえ死ぬわ。力を手に入れた対価として契約者も死ぬわ」

「それを知っていて壊したんだな。この人殺し、アイツは――」
驚きでそれ以上言葉を発することができなかった。ありえないものが視界に映ったからだ、それは死んだはずの父の姿である。鍛え抜かれた筋骨隆々に黒のタンクトップス姿で、金色に染めつた短髪。目は鋭く威風堂々と立っていた。その横に虹彩アイリスの姿も見えた。

第25話 花守天心。アポカリプス 登場。

どうして父と一緒にいるだ。

「その男は私の人形だ。アポカリプスに必要な人材だ。だから我々が引き取りにきた。大人しく渡してくれば危害を加えるつもりはない」

「親父、死んだんじゃないかったのかよ。今まで何処で何をやってたんだよ」

しかし親父は何も答えてはくれなかった。無言のまま、焰の身体を肩に乗せ、虹彩は倒れたベルヴィルの側に近付いて懐から宝石のようなモノを取り出し、壊れた核の代わりにその宝石をはめ込んでいる。

「貴様、花守の一族の者か？ 我等を生み出した悪魔の一族め。また我等を利用しようというのか。その男は花守天心だな。イヤ、今はアポカリプスと呼ぶべきかしら」

カサンドラは一体何を言っているだ。アイツは親父じゃないのか？ それに花守天心って大昔の人間じゃないのか？ 何がどうなっているのか、さっぱりわからない。

「ほほお、驚いた。この身体でワシだとわかるのか。さすが、魔女カサンドラだな。いかにも、ワシは花守天心だ。この神で溢れた世界を正すために舞い戻って来た」

そう言い残し音もなく、闇に溶け込むように姿を消した。辺りには気配はもうしない。

「何か知っているようだな。説明してもらおうか。アレは、本当に親父じゃないのか」

「ええ、あの男は死んだ肉体に入り込むことできるの。まあ憑依と言った方がわかりやすかしら。始まりの書がもたらした力ね」

「やっぱり死体のか。でも腐った感じはしなかったな。異臭もなかったし、見た目も普通だったというか、人形めいた所があったな」

「それはあの男のもう一つ的能力、人形化を自身にも施したのですわ」

「人形化、それも始まりの書から得た能力だな。おそらくその能力でお前らは生み出された、違うか」

「ええ、そうですね。人形化とは忌むべき能力。こうして自我を保っていられるのも神の石があるおかげですもの。神の石が壊されれば自我を失い、ただの人形になってしまう」

「人間に戻る方法とかはあるのか？ 神の石って一体何なんだ」

「人間に戻る方法は、イヴにしかわからないわ。あと神の石とは、イヴの涙が結晶したもので、寄生する個体によって形を変え、宿す力も違うわね。また人の負の感情をエネルギー元としているわ。だから私達は神の器として選ばれたんだけどね。これは久遠の魔導具から聞いたから」

「ああ、兵器として生み出されたことは聞いた。多くの人を殺したんだろう。この殺戮人形め。お前らは全員呪われているから、俺の恩人の焰も平気で殺せたんだろう」

「やはりあなたは何も見えてないわ。私が心を痛めてないと本気で思っているの？ 罪悪感に苛まれているけど、それでもやらなきゃいけないときがあるのよ。綺麗事だけじゃ、世界は変えられないわ。それじゃあ誰も救われないの」

罪悪感に苛まれるとわかっていて、なぜ殺したんだ。そうしなければいけない理由があったのか？ 彼女は一体何を背負って戦っているだ。

「魔女だと蔑まれようが、私には叶えたい願いがあるの。そのためには手段は選ばないわ。それにあなたに人殺しは似合わないわ？ 私みたいになつて欲しくないしね」

黙りこんだ俺を蔑み、彼女は話し続ける、黙々と淡々と機械的に、でも強い覚悟のようなものを感じた。そこまでして叶えたい願いは一体何だろうか？ 心を殺してまで叶えたモノとは——いくらく考えてもわからない。それに俺のために殺したというのか、「ふ

ざけるな」と、叫ばずにはいらなかった。いたたまれない気持ちになったからだ。

「私は人に恨まれるのは慣れているから」

「そんな悲しい事、真顔で言うなよ」

「どうしてあなたが泣くの？ 何も悪くないのに、人を殺したのは私で、私は魔女で、世界中の人から恨まれていて。そして心を閉ざした」

「なんでだろうね。なんでだろう？ 人殺し悪で許しちゃいけないのに。キミの顔を見ていたら涙がでてきた。一人で独りで、苦しんで苦しんで、それでも挫けることなく歩いている。眩しく、眩しくて仕方がないんだ」

俺は弱い。人を殺す覚悟なんてものはない。そこまでして叶えたい願いなんてものもない。結局は、中途半端な人間なのかもしれない。約束を守ること、信念を貫くこともできない。全てが半端者な男。それが俺だ。

「変わっているわ、人殺しで魔女である私が眩しいなんて」

「人殺しは悪だ。それは変わらない。しかしキミが悪だと思えないそれだけのことだ」

（悪だの？ 正義なの？ 一介高校生にわかるわけがない。難しいことを考えるのは苦手だ。熱血漢ぶって説教するつもりもない。そこまで強気な男じゃないだ。ただの独りよがりのちっぽけな人間さ。それでも胸を張って生きようと思う。俺も彼女達みたいに強くなりたいから—— 中途半端なまま終わりたくないから——）

「やっぱり変わっているわ。バカな人間もいたものね。貴方が捜する少女の名前はイヴ。始まりの少女と言われているわ。パンドラの娘にして、この荒んだ世界を救う最後の希望」

（イヴか？ うん、良い名前だ）

「あとスピカと出会えたのは偶然ではなくて、必然。イヴの意思ですわね。貴方はイヴに気に入られるみたいですよ。彼女に会いたかったらアルネシア杯で優勝することね」

「何故、俺に教えた。そんな重要な情報を——」

「単なる気まぐれよ、深い意味はなくてよ、うふふふ」

甲高い声で笑う魔女・カサンドラはどこか楽しそうで見ているコチまで微笑でしまくら、気持ちよく笑った。しばらく沈黙が続いてもそれは決してイヤじゃなかった。

その空気を壊して喋り始めたのもカサンドラだった。

「では、私はもう行くわ。最後に我が主を助けてくれてありがとう」

「礼にはおよばないぜ、友達を助けるのわ、あたりまえだろう」

「でも今は、敵同士だわ」

「先に助けてくれたのはあいつだ。借りは返す、それだけのことだ！ 感謝される覚えのないことだ。だから気にするな」

「随分と律儀な人ね」

「お互い様だろう」

「そうかもしれないわね」

「でもこれだけは忘れないで、私達は、あなたの味方ではないということを」

「ああ、分かっているつもりだ」

「ならいいわ。次会う時まで必ず生き残りなさい。貴方達を倒すのは、魔女である私の仕事だから」

「ああ、お前も死ねなよ」

「私は死なないは、だって魔女は不死だから——」

「そうか、そうだな」

「やつぱりおかしな人ね。何がそんなに嬉しいのかしら。でもまた会うのが——何だか——楽しみになってきたわ」

「そうだね。俺から最後に一言だけ言わせてもらおうよ。白山をよろしく」

「私はもう行くね。これ以上のんびりしているといろいろと面倒臭いことになるから」

「ああ、また必ず生きて会おう」

カサンドラの背中を静かに見守り、俺もスピ力を担ぎに帰ること

にした。

思いの他スピカは軽かったし傷口もうふさがっていた。ほっと一安心した。

そして辺りを見渡す、裏路地には何も無かった。ビルの残骸もなく平地になっていた。

見渡しよかった。

ただ地面は白く――アルファルトとは思えなかった。

しかも異臭はまだ残っている。

まあこれだけひらけた場所になれば、もう事件は起きないだろう。「兄様、お見せしたいことがございます。とても重要な事なので、わたくしについてきてくれますか」

ふっと気付くと虹彩アイリスの姿があり、声をかけてきた。見せたいものとは何だろうか。

「虹彩、見せたいものとは何だ」

「それは今、兄様が一番知りたいことにのヒントになるものです。焰様にもかかわることです。知りたかったら、わたくしについてきなさい」

俺の一番知りたいこと。それに焰にかかわることとはどういう意味だ。俺を誘き寄せるための罠か？ イヤー虹彩がそんなことをするとは思えない。それに俺を捕らえるきなら、こんなまどろこしいことはしないはずだ。護衛もつけずに一人できたことも気になる。

「ああ、わかった。ただし一つ条件がある。スピカも連れて行っていくか？ ここに置いていくわけにもいかないしな」

「ええ、構いません。スピカ様にもかかわることですから。では、わたくしに後についてきてください」

第26話 スイセンの花言葉は、自己愛、自惚れ、我欲などである

アイリス
虹彩に案内されたのは、神田花守神社の地下深くに隠された場所だった。

ここに一体何があるというのか？ 俺やスピカ、焰にもかかわることで、俺の一番知りたいこととなると限られてくるが、なぜか？ 見当がつかない。まあ、それももうじきわかることだ。なんだか少しだけ、わくわくしてきた。

「着きました。見せたいものは、こちらでございます」

「こ……これは……」

眼前に広がる光景を見にして、驚く声しか上げられなかった。それはスイセン。色とりどりのスイセンが部屋全体を埋め尽くしていた。

（美しい……言葉にならないくらいの美しさがそこにはあった）

感動のあまり涙がでるほどに心を震わせた。スイセンの花言葉は、自己愛、自惚れ、我欲などである。ナルキッソスの神話やフオークソングなどにもでてくる花だ。

「キミが見せたかったのは、このスイセンなのか？ これが俺の一番知りたいことで、俺やスピカ、焰にもかかわることなのか」

「はい、そうです。スイセンは、自分を信じることの素晴らしさと、その力が自分を含めたあらゆる人の運命を変えることができることを、わたしたちに教えてくれる花です」

そうか？ そういうことか。虹彩の言いたいことが少しだけわかったような気がする。

「もう迷わない。お前達が立ちほだかろうと焰を助ける。そして誰も殺さずにイヴを救う方法を探す。アルネシア杯には参加しないし、これ以上お前らの思い通りにはさせない」

もうスピカに人殺しはして欲しくないだ。アイツは反対するだろうが、必ず説得する。アルネシア杯に参加しなくたって、イヴを救

い出す方法はあるはずだ。諦めなければ道はあるはずだから、希望を捨てないで自分の信じた道を進むと決めた。そうさ、俺は自己中な男だから、人の話は聞かない。だからもう迷いはない。俺は俺の道を歩いて行くだけさ。

「いろいろとありがとうな。焰を助けてくれたことも感謝しているし、ここに連れて来てくれてありがとうな。俺は帰るはスピカの手当てもしたいしな」

「わかりました。くれくれも注意して、お帰りくださいね」

虹彩に背を向けて教会に向けて歩き出した。足は軽く気分はスッキリしていた。本当にここに来て良かったと思えた、自慢の義妹である。

教会・礼拝堂。

スピカの服はボロボロになっており、俺の身体も傷だらけで、その姿を見たシスターカレハはとても心配してくれた。簡単な応急処置を済ませ、いくぶんかは楽になったが、まだ節々が痛む。新しいセーラー服に着替え直した。今度はバッチリ冬服である。丈は長く露出は少ない可愛い紺のセーラー服でリボンはピンクだけどねスピカにとっても似合っていた。紺のプリツスカートと白ニーソックスという組み合わせも最高だ。

「シスターカレハ、無事に任務は完了しました」

「お疲れ様でした。これが今回の報酬です」

「ありがとうございます」

麦色の封筒を受け取った。何も書かれていなかった。機密保持のためか？

とりあえず、今日はもう疲れた。報告も終わったことだし、部屋に帰って寝るか？

「失礼しました」

軽くお時儀をして俺はスピカを抱えて、宿舎に向かって歩き出す。

スピカを隣りの部屋に寝かせ、俺は自室に戻っていた。ベッドとかなかったんだだけ。まあいいや。もうまま寝よう、着替えるのとかめんどくさい。お休み。

翌日。

「おい、起きろいつまで寝てるきだ」

どこか、聞き覚えがある気がした。

「いいかげんに起きろ」

腹に強い衝撃を受ける。多分蹴られたのだろう。冷静に分析する。

「おい！ いきなり何をする。もう少し優しく起こせないのか？」

「うるさい、黙れ。起こしてやったことに感謝しろ、ボケ、グズ、変態」

「朝から機嫌が悪いな」

「もう昼過ぎだ！ ボケ。外はもう明るいぞ、いつまで寝るきだ」

ゆっくりと身体を起こす。全身が痛い。昨日無理しすぎたな。

「イテテッテ。もうそんな時間か？」

「これを飲め。あと助かった。礼を言う。でもお前臭な〜〜ちやつとお風呂に入ってないだろう。あまり近づくなキモイから」

無愛想な顔をして血の入った、聖杯を押しつけて来る。起きてすぐにセーラー服が見れるなんて最高過ぎる！ 俺はなんて幸せ者なんだ。そう言われてみれば、昨日は疲れててお風呂に入ってないな。第一しみるだろう、全身傷だらけなんだから、ほんとそこは許してほしいよ。でもスピカが元気そうだから許してやるか？ セーラー服似合ってたな

「ありがとう。では頂くとするよ」

相変わらず苦い、そして鉄臭くて気持ち悪い味だ。最悪過ぎだろうこの飲み物。

血というのは何度見ても慣れない。でも痛みがひいていくが分かる。スピカの血を飲むことで『自然治癒力』が高まる。

こうして見るとスピカはやっぱり人間にしか見えないが。でも人

間じゃないだなと改めって思った。まあどうでもいいこだ。スピカはスピカだしな。その事実は変わらない。

「どうしたの？ 難しい顔して」

「どうもしないさ、ただね。うん。何でもない」

「変なの？ まあ、出会った時からお前は変な奴だったかな」

「スピカほどじゃないさ」

「私のどこが変だというだ。だいたい貴様は、何でいつもそう言うことしか言えないんだ」

「もう傷は大丈夫なのか？ 心配したぞ」

「核を壊されない限り大丈夫だ。安心して、もう少し休みめ」

「ああ、そうさせてもらうよ。まだ疲れているみたいだ。おやすみ」

第27話 思いが形になる時、イヴは姿を現す。

白。白い場所に居た。壁も床も全て白く、扉も窓も無い。完全な密室でどうやって入って来たのかすらわからない。ここは一体何処だ？ これは夢なのか？ それすらわからない。全てが謎に包まれていた。

「やっと会えたわね。ようこそ無限の世界へ」

背後から透き通る綺麗な美声がした。それはまるで天使の囁きだ。振り向き姿を拝む。美しい。まるで幼女神だ！ 全身から滲みでる神々しさがそう思わせた。

無垢な笑顔を浮かべ、目鼻の整った顔立ちは天使のようで、すらりとした白い素足は眩しかった。手入れの行き届いた、澄んだ長い髪には白く輝いてており、凹凸の少ない身体を覆う白い布はこの世界と同調しているような一体感があった。緋色の瞳が俺を見つめて来る。とても優しく愛おしそうに――

「ずっとずっと会いたかったの？ この日が来るのをずっとずっと待ってた」

「キミは誰？ お会いしたことありましたか？ ここはどこですか？」

「あつ！ この姿で会うのは初めてだっけ？ わたしはイヴ。ここは無限の世界」

「キミがああの時の少女？ 随分イメージが変わったね。ところで無限の世界って、何？」

「イヴちゃんにもわかんない。そんなことよりもね。お兄ちゃんって呼んでもイイ」

「別に良いけどね。質問にはちゃんと答えてね」

「わあゝ。ありがとうお兄ちゃん。私ねお兄ちゃんが欲しかった？

ずっとずっと昔からね。お兄ちゃんが欲しかったの？ だから本当
にありがとう、兄ちゃん」

（うわあっ！ 思いつき調子の狂う少女。イヤ、幼女だ。出端の
を挫かれた。完全に幼女ペースだ。このままじゃヤバイ）

「イヴちゃん？」

「なぐに、お兄ちゃん」

「ずっとここに独りで居る？」

沈黙…… 答えたくないのかな？ でもここで折れるわけにはい
かない。

「イヴちゃんのこと教えてくれないかな？ 知りたいな」

少し屈んで、目線を合わせ、優しく微笑みかける。手は膝ぐらい
置いておく。

「イヴちゃんはイヴちゃんなの。でもねみんなイヴちゃんこと、女
神さまって言うの。でね、優しくしてくれるだけね。寂しいの？

どこか虚しく、消失感あるの。本当のは私を誰も見てないの？」

目元に手をあつて潤んで瞳から涙がこぼれた、泣き出した。悲し
い顔だ、自分の存在を認められないというのは、とても悲しく辛い
ことだ。俺はよく知っている。頭を優しくなでながら紳士的な態様
をとる。

「ごめん。変なことを訊いて。確かに誰にも認めてもらえないこと
は悲しいことだね。だからもつとキミのことを教えて。好きな食べ
物とか、いつも何をしているのか。キミのことがもつと知りたいん
だよ」

手で涙を拭って、につばと笑い話し始める。楽しそうに生き生き
しているように見える。幼女好きの俺はその笑顔でどれだけ癒され
ることか？

「好きなはね、チョコレートパフェ。あとお兄ちゃんも好きだよ。
でね、うーと。いつね。冷たい檻の中にいるの？ そこはとても静
かでも何も無い所だなの？ 年に一、二回ぐらいしかお外に出ること
ができないの。私の力は理を変え、秩序を乱し、世界を歪める力だ

から、隔絶されたの。それを私は望んだことの。もう誰も傷つけた
くなかったから、私のために誰かがの死のはもううんざりなの。で
もね、誰かの温もりに触れたくなる時がある？ 　だから年に一、
二回は外にでるの。そしてみんな、私のことを女神さまと呼ぶの。
ねえ、お兄ちゃん。神さまってどんな存在だと思う？」

身ぶり手ぶりを加えて身体全体で表現してくるたび、白いワンピースはためき、白く長い髪も揺れ動く。脚は細く綺麗で白いサンダルを履いている。初めこそ笑顔で喋っていたが、どんどん表情が暗くなっていた。そして複雑な顔をして問いかけてきた。

「人の願いを叶える存在かな？」

「その答えはあながち間違っていないけど、正解とは言えないね。神の定義はそれだけじゃないから——神ってたぶん、この世界そのものなんだよ。だってね、神はずっと昔——人類が生まれる前からいるだよ。それはとても凄いことで、ちつぽけな人間が理解できることじゃないだよ。万物を司るということは世界そのものになるということなんだよ、お兄ちゃん。だから神はどこにでもいるし、どこにでもあらわれるんだよ。ただそれを認識することができないだけね。私の力は、神を顕現させることだができるの。誰にでも神を認識することができるの。ただそれだけの能力——だっての？ でも今は違う。それは遙昔の話。遠い過去の私。願ってしまった。それが私の罪、過ち、後悔」

それ以上は何も喋ろうとしなかった。口を嚙み。沈黙が流れる。綺麗な緋色の瞳が俺を静かに見つめる、まるでサラシを巻いて締めような控えめな胸に目がいつていしまう。空気が重い、耐えかねた俺はずっと訊きたかった、あのことを口にしていた。

「キミが掛けた呪いを解く方法を知っているかい」

「ごめんね、お兄ちゃん。思念体である私にはわからないの？ 今の私は無数に存在する思念体の一人に過ぎないの。思念体は神を思う心。信心が生み出すの。あなたの会った私と今の私は違うの。同じだけど違うの。私を生み出したのはあなたの心。十年間私のこと

を思っていてくれた。あなたの心が私を生み出したの。あなたは私のことを忘れなかった。そして強く会いたいと願っただから私が生まれたの。だから責任をとってお兄ちゃん」

「キミの言っていることは要領を得ない。俺がキミを生み出した、意味がわからない。それが神の力だというのか？ 一体キミは何もなんだ」

「私はイヴ。それ以上でもそれ以下でもない」

「本当に俺が生み出したのか？ 呪いを解く方法は知らないんだな」

「もう、時間はないは目覚めの時は近い」

「こら起きろ、もう随分寝ただろう。それ以上寝ると豚になるぞ」

あゝ〜〜スピカの声が聞こえてくる。もう朝か？ 結局、昨日はずっと寝てしまった。でもスピカの血を飲んだおかげか、身体が軽い、怪我は治ったみたいだ。どこも痛くない。じゃあ起きるかと思いい身体を動かすと何か柔らかいものに当たった。

とても柔らかく暖かい。毛布を退けると幼女の姿があった。なぜ？ どうして？ とりあずほっぺをつねってみる。痛い、夢じゃない。いつの間に俺の毛布に忍び込んだんだろうか？ それに何処かで見たとような気がするが思い出せない。白髪で白い布を羽織ったみそぼらしい女の子。ちゃんとした栄養のあるモノを食っていないのだろう。か細く血の気の悪い肌は、恐ろしいくらいに白く、異常なくらい白い。そのくせ瞳は赤い。緋色というか、スカーレットで、まるで灼熱の炎のように真っ赤な瞳。すべての血がいつてるじゃないか、と！ 思わせるほど赤かった。

「あまりじろじろ見ないでよ、お兄ちゃん。恥ずかしいわよ」

「えっ！ お兄ちゃん？ 誤解を招くことを言うな」

「お兄ちゃん。何も覚えてないの？」

ボキボキと指を折る音が聞こえる。紺のセーラー服を着たスピカが、凄まじい殺気を放っている。鬼神の怒りに触れてしまったみたいだ。このままでは殺される。半殺しは確定だろう。誤解を解かな

ければ。

「落ち着いて聞け、俺にも何がなんだかわからないだ。だから落ち着いてくれ」

昨日腹を蹴られた時に思ったのだが、コイツの身体能力は格段に上がっている。たぶん死の淵から回復したからだろう。まるでサ。ヤ人だ。

「そんな話が信じられるか？ この変態が！ 貴様が幼女好きの変態だということは知っている。だけど誘拐をする奴だとは思わなかった。見損なったぞ」

「おい、人の話を聞け。誤解だつて。信じてくれいよ」

「貴様の話など信じられるか？ 貴様が変態なのは周知の事実だ。受ける聖なる鉄拳」

「あぶねえ」

「避けるな、バカ。当たらないだろうが」

「無理、当たったら死ぬ。手加減する気ないだろう」

「当たり前だ。変態に容赦するほど私は優しくない」

「お兄ちゃんをイジメないで。イヴの大切なお兄ちゃんなの」

イヴその名前に聞き覚えがある。まさか夢の出てきた少女なのかな？ にわかには信じられんが、それ以外考えられないのも事実だが

「お前——イヴなのか？ 俺の心が生み出したという——幻影」

「そうだよ。お兄ちゃん。私はお兄ちゃんが思い描いたイヴ」

「臭いな——まずおわ風呂に入ってこい。そのあと事情を聞いてやる。臭くて臭くて死にそうだ。もう我慢できん。とっとその汚い身体を洗ってこい。これじゃあ満足に話もできない」

（そこまで臭くないだろう、俺に対する好感度マイナスなんじゃないか？ スピカの態度が冷たい。俺、嫌われ様なことしたかな。全然覚えてないんだけど）

「わかった。一旦お風呂に入ってくる。俺が戻ってくるまで、この子の面倒を見といてくれ。できるだけ早く戻ってくるから」

「急がなくてもいい、しっかり身体を洗ってこい。少しでも臭いが残っていたら、お前を殺す。まあ心配するな。私は子供の扱いにはなれている」

「というわけだから、大人しく待ってるんだよ。いいね、イヴちゃん」

「イヤ、お兄ちゃんと一緒にお風呂入る。だってお姉ちゃん怖いモン」

脚を掴んで離れようとしないうヴちゃん。この状態ではお風呂に行けない、ぷつぷつと何かが切れる音がする。比喻ではなく本当に聞こえる。背筋がぞつとする、この状況はかなりヤバイんじゃないか？ イヴちゃんに足をおさえられ身動きが取れない

「どこにも行かないから、脚から手を離してくれる。このままじゃ殺されちゃうよ」

「うん、わかった」

イヴちゃんが手を離すと同時に拳が腹部に向かって飛んで、それをかろうじてかわすと素早く走り出した。戦線離脱である。正直に言うといヴちゃんと一緒にお風呂に入りたかったが、あとでスピカに殺されるから、今は止めておこう。スピカが居ない時を見計らって一緒に入ることにした。結局バレなければ何をやってもいいだ。己の欲望を抑えることなどできるわけがない。

身体を清めて戻ってきた俺をスピカは笑顔で迎えてくれるわけもなく、入った瞬間険悪なムードになった。なんでこんなに重苦しい空気が流れているんだ。そして問題の原因のイヴちゃんは天真爛漫な笑みを浮かべているが、所々に泣いた後が見受けられる。

何この状況、俺が全部悪いの？ 俺だって被害者だよ、イヤむしろ一番の被害者は俺じゃない。何もしてないのに犯罪者呼ばわりされるし、クサイだのキモイだの死ねだと言われてさんざんだよ。

「一体どういうこと。説明しなさい。私達の間隠し事は無しよ」
エメラルド・グリーンの瞳を光らせながら問い詰めてくる。魔性

の瞳だと思った。この瞳で見られたらどんな男でもすぐに自白するな、だって目力がすごいんだもん。

それにあの長くてしなやかな睫毛まつげがとてもチャーミングだ。

（イヤイヤ、お前謎だらけだろう。よくそんなこと言えるるな）

「どう説明していいんだか、俺にもわからないが……起こったことを掻い摘んで説明してやる」

「なるほどね。あなたも創造の力が使えるようになったみたいね」

「アレはお前だけの力じゃないのか？ それに俺は力を使った覚えはないぞ」

「私達はオートマタの力の源は我欲よ」

「どういう関係があるんだ」

「私は昔パンドラという女性にあつたことがある。百パーセント。イヴの遺伝子を受け継いだ完璧なクローン、つまり人工生命ね。私は実力を飼われパンドラの護衛を任されたことがあつたの。彼女の力は神を顕現させる力。組織が求めた力よ。パンドラはとても素晴らしい女性だった。愛と正義のため身を捧げた聖女。彼女の意志を受け継いだ、私がやらなければいけないのよ。今にして思えば、あなたとの出会いは運命だったのかもしれないわ。桜からパンドラ、もといいイヴの力を引き継いだ子との邂逅。偶然ではなく必然。これが神の意志というやつか？」

どこか虚ろな瞳で遠くを見つけながら語り出す、その姿は神秘的で思わず魅入ってしまう。

艶のある赤い唇を指でなぞり、細い指がまた魅力的で絵になっていた。まさに芸術。

（俺の……中に、イヴの力が流れてるだって）

「それは本当のことなのか？」

「現にお前の魔力はかなり減っているわ。たぶんその子を創造したからだと思うわ」

「イヴの力が具現化したというのか？ 今になってなぜ。きっかけはなんだ」

「ねえ、お兄ちゃん。難しい話してないで、イヴちゃんと遊んでよ」
俺の右腕を掴んで愛らしい眼で訴えてくる。

（めっちゃ、可愛い。抱きしめたい。幼女最高だ）

「もう少しだけ大人しく待ってね。そしたら遊んだあげるから」

「うん、わかった。イヴちゃん待ってる」

（素直で良い子だ。そして天使みたい可愛い）

「話の腰を折ってしまったな、でっ！ どうなんだ」

「お前の考えは間違ってる。補足するならその娘は、お前の記憶が具現化したものだろう。大元はお前に宿っていたイヴの力だがな。それときっかけか？ 私に思い当たる点はないな」

（しかし、俺の記憶といか、イメージとは随分違うんだけど……
本当に俺の記憶を投影されて作られたのかな？ 疑問だ！ といか俺の中にイヴの力が流れていたことが今だに信じられない）

自問自答を繰り返す、しかし答えはできない。そういうものなんだろうと受け入れることにした。難しいことを考えるのは苦手だ。ありのままを受け入れよう、そう決意した。

「なるほど、やっぱり俺の記憶が実体化したのか？ では俺が捜している少女ではないのだな」

「違うな、まだ教会に捕まっているはずだ」

「そうか、早く助けてやらないとな」

「アルネシア杯で優勝しかない。だが翼、お前は心も身体もまだ弱い。修業が必要だ」

「そのことなだけどさ。俺はやっぱりアルネシア杯には参加するきないわ。だけど、今回のことで身に沁みてわかった。正義を貫くには強さが必要だ。力がなければ何も守れない。俺のプライドはズタズタだ。だから俺は強くなる。自分の信念を最後まで貫ける男になりたいから、一緒に修業はするつもりだ」

「その気持ちがあればお前はまだまだ強くなれる。犠牲の上になり経つ平和など真の平和ではない。それにお前が人の話を聞かない性

格なのは、わかっているさ。好きにすればいい。私は私で勝手にやらせてもらう」

「ありがとう、スピカ。絶対に誰よりも強くなってみせる。そしてお前を最後まで護り抜いてみせるぜ」

「ねえ、お話終わったの？ お兄ちゃん。だったら一緒に遊ぼうよ。ねえ、いいでしょう」

「ああ、そうだな。何して遊ぶ」

「絵本読んで、絵本」

「うん。わかった」

何冊か？ 読んであげた。今は膝の上よく眠っている。寝顔もとても可愛い。

ぷにぷにした肌、サラサな髪に甘い香りがする。とても幸せな気持ちになる。起こさないように優しく頭を撫でる。あ、安らぐ、癒される。まさに憩いの空間である。

「何、和んでいるだ、貴様は」

「なんだ！ スピカまだ居たのか？」

「何寝ぼけたことを言っている。さつさと血飲む」

「もうそんな時間か？ いつもありがとう」

銀の聖杯を受け取り、一気に飲み乾す。相変わらず美味しくない。良薬口に苦しというからな、まあしょうがないのかもしれない。

また、この感覚だ、今度はどんな記憶を見せてくれんだ。少し楽しみだな。

「あなたの叶えたい願いつて何？」

「桜になら教えてもいいかな？ 人間に戻ることに。それと幸せな家族を作ること。とてもささやかな夢。私ね、家庭っていうものに憧れている？ だって独りは寂しいもん。だから、暖かい場所がほしいの？」

「それがあなたの望み、叶えられるといいわね。わたしも力を貸すわ」

「ありがとう」

これはやはり、母さんなんだろう。でもは可笑い、スピカが眠りについたので統一戦争の時だから、今から九十年ぐらい前だろう、この映像わ。どう見ても母さんは二十代後半といった感じた。まだ親父とは出会ってないのだろう。そして俺を何歳で生んだのだろうか？ スピカに聞いたらわかるのだろうか？ まあアイツが素直に教えてくれるとは思えないが——不思議な話である。

第28話 完結。 イヴ誕生の真話

数日後、シスターカレハから話があるというので、教会に向かうこと。

森の中を三人で仲良く歩きながら楽しくお喋りをしている

「いまさらだけど、なんでスピカっていうだ。日本兵器とは思えない名前だよな」

「ほんと、いまさらだな。まあいい、今日は特別機嫌がいいから、教えてやろう、光栄に思え。私の核石が真珠だからだ。まあ他にもあるのだが——それは秘密だ」

「そうか。真珠か、確かに前前にピッタリな宝石だな」

「スピちゃんは可愛いもね。わたしも好きだよ真珠。あとお兄ちゃん大好き」

「こら抱きつくな、歩きにくいだろう」

教会・食堂。

「待っていたわよ、さあ座って」

紺なの修道服を着た、二十代後半と思しき綺麗な女性、シスターカレハが声をかけてくれた。席に着いた俺は早速本題に入ることにした。回りくどいのは嫌いだ。イヴちゃんはなぜか、俺の膝の上に座っている、イスはたくさんあまっているのに？　そして俺はスピカに足を踏まれている。とりあえずこの状況から逃げだしたいというのもあった。

「お話ってなんですか？　約束通り、神狩りの調査はしましたよ。犯人は逃がしてしまいましたが、まだ俺達に用があるんですか？」

「はい。貴方に話しておかなければならないことがあります。何故イヴという少女が生まれたのかを。そして何故桜様がお亡くなりになったのかを知らなければならぬ。

統一戦争の時パンドラが顕現させた神とは不老不死の力を与える

神でした。パンドラが望んだのは誰も老いない、死なない、平和世界です。しかしイヴの力とは歪んだ形で現れます。顕現された神は自分を信仰する者だけを不老不死にしました。結果宗教は一つになり統一感が生まれました。不老不死を手に入れた代償に死というものを忘れてしまいました。原罪を忘れてしまった人間は墮落していききました。ヒトは考えることを放棄し神に隷属していききました。それは神の家畜。もはや肉の塊でしかありませんでした。ヒトとしての尊厳は完全に失われていました。不老不死を手に入れるということとは、神に忠誠を誓うことなのだとパンドラは理解しました。そして止めどなく襲ってくる罪悪感に苛まれ、自責の念に押し潰された彼女は、親友である桜様に助けを求めました。そして起こったのが二〇一八年の天変地異です。イヴの力とは歪んだ形で現れます。神を憎む気持ちと、信者を減らしたいという想いが逆に、信者を増やしました。さらに追い打ちをかけるように、自分を救って欲しいという気持ちが桜様を殺したのです。親友を失ったパンドラは絶望し、人間はさらに墮落していき、科学万能の時代は終わりを告げ、神々が人間を支配する時代が始まったのです。絶望の底で考え出されたのが、対神兵器・イヴです。自分の細胞を改良・強化・進化させるために、始まりの書を用いて生み出されたのがイヴです。イヴを生み出すためにパンドラはその命を落しました。パンドラが死により、イヴが神を顕現することになり、神の力も変わったです。神の呪縛解け、ヒトは死という概念を取り戻しました。しかし、それで全てが終わったわけではありません。始まりの書に取り憑いていた怨霊・花守天心がパンドラの身体を乗っ取ったのです。真理の霊王の誕生の瞬間でもありました。真理の霊王は萌えという感情を喰らい、分身を増やし、オタク達を隷属させていきました」

「それで真理の霊王の調査を親父にお願いしたのか？ 親父が調べていたのは堕ち神ではなく……真理の霊王だったのか？ でもなぜイヴは親父に助けを求めたんだ」

「それはわたしにもわかりません。ただあのお方は誰よりも優しく、

誰も殺めていない確かです」

「ああ、それはなんとなくわかる。だけど本人はそう思っていないのかもしれない。直接聞いたわけじゃないけど――――思念体が興味深いことを言っていたのを薄らと覚えている。アレはたぶん遺伝子に刻まれた記憶ことだったのかもしれない」

「これで私の話は終わりです。イヴという少女が、どのようにして生まれたのか？ わかってもらえたでしょうか。どうか、お願いします。あの子を助けてあげてください」

「そんなこと言われなくてもわかってている。俺は最初からそのつもりだ」

「ありがとうございます。どうかイヴを救ってあげてください。それができるのはあなただけです」

「私もそう思う。たぶんイヴを救えるは、桜の血を引くあなたしかないと思うの」

「うん。お兄ちゃんならできるよ。イヴちゃんも精一杯協力するから大丈夫だよ」

「皆、ありがとうございます。俺は必ずイヴを救い出して見せる。よし修業に行くか」

「そうね、今のままじゃ。イヴはまだ助けられないものね。もっともっと、強くならないとね。でも修業って何をしたらいいのかしらねえ、カレハ。何かいいアイデアある」

「それならアキバで起こっている、女性用下着消失事件の調査をお願いするわ」

「おお！ 長興味深い事件だな。早速調べに行くか？ スカピ、イヴちゃんついてこい。今からアキバに向かうぞ」

「わあいわあい、お兄ちゃんとお出かけだ」

「まあ、良かろう。私も付き合っただけあげるわ、光栄に思いなさい」

俺達はアキバに向かって歩き出した。女性用下着消失事件の謎を解くために、それがイヴを助けることに繋がると信じて教会を後のしたのだった。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2184w/>

孤独な兵器少女と変態で幼女好きな俺

2011年11月18日03時19分発行